
尋獄E2 (BLOODY STORAGE)

砂上 巳水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

尋獄E2 (B L O O D Y S T O R A G E)

【Nコード】

N 7 2 6 4 G

【作者名】

砂上 巳水

【あらすじ】

誰も受けることが無かった身元不明の男からの依頼。黒服のメンバー安形はそれに興味を持ち、指定されていた場所へと赴いた。だが、一方で他の黒服メンバーにも別の依頼が入っていた。それは安形の依頼主の捕獲という仕事だった。黒服VS黒服。スラム街で発生する謎のバイオハザード。イグマではない”何か”に感染した襲い来る”人間の集団”。依頼主を助けようと奮闘するうちに、安形は黒服の闇、依頼主の本当の正体、そして白居学という男の存在を知るのだった。

<第一章>地獄のお尋ね者（前書き）

このお話は尋獄（BLUCK DOMAIN）を読んでいないと分
からない面があるかも知れませんが、
出来ればそちらからお読み下さい。

<第一章>地獄のお尋ね者

<プロローグ>

廃ビルが無数に立ち並び、ゴミや土埃が舞う路地が続いている。
今その路地に、動く大きな影があった。

それはゆつくりと歩を進め、ゴミだらけの道を進んでいく。
ティラノサウルスのような前傾姿勢の二メートル以上はある骨格
に、般若のような歪んだ顔。その頭からは無数の灰色の長い毛が伸
び、全身の皮膚は青紫に彩られ、血管が縦横無尽に浮き出ていた。

> i 1 6 3 2 — 2 2 4 <

「ズウオオオオオ……！」

その般若は輝く満月に向かって遠吠えをすると、突然両腕両足を
左右に広げ、体中に力を込めたした。

ズズズズズ……

それと同時に、般若の全身から無数の小さなミミズのような生き
物が這い出てくる。一体どついう生物なのだろうか、そのミミズの
体からは針だらけの短い触手が、側面に列を成して生えていた。

既にかかなりの数のミミズが出ているにも関わらず、般若は尚も体
に力を込め続ける。

足元がうねうね蠢くミミズで満たされ、地面が見えなくなった頃
だろうか。般若はようやく満足したらしく、構えを解くと何事もな
かったかのように歩行を再開した。その目には目標も目的も何も映
つてはおらず、ただ底知れない不安と恐怖、憎しみ、そして悲しみ
だけが映っている。

「ズオオオオオオー！」

最後に体に籠った感情を爆発させるように大きく鳴くと、般若の姿は路地から消えた。

尋獄E2 (BLOODY STORAGE)

<第一章>地獄のお尋ね者

あがたかすや
おおがら
安形和也。

この車が全く通らないような、ゴミだらけの道路を歩いている男の名前だ。

おおがら
大柄の逞しい体格に、太い眉と凛々しい目、黒の短髪。

服装は警察の特殊部隊と、カジュアルなジャケットを足して二で割ったような真っ黒な井出立ちだ。その姿はどう見ても一般人には見えず、何かの格闘家のような雰囲気を感じていた。

本当の下の名前は和也では無いのだが、安形は在籍している組織、ナグルファル——通称「黒服」に入るためにその名を捨てた。

そうしなければ生き残ることが出来なかったのだから。

安形は三年前、今では「富山樹海毒ガス発生事件」などと呼ばれる事件の当事者だった。

当時近隣の町で毒牙を自由気ままに振るっていた殺人鬼——「バンの二人組み」を捕まえるために、彼らの獲物の中に潜入し、その時に巻き込まれてしまったのだ。

そこで安形は信じられないような体験をした。

生きた人間が未知の微生物に感染し、化物となり、自分たちを襲ってくるという体験を。

結果として、安形は無事にその事件から生還できたのだが、命の代わりに大きな選択を迫られた。

闇社会の派遣社員とも呼ばれる黒服に入るか、このまま富山樹海に残されるか。

樹海に残される。

それは確かに嬉しい事ではないが、この時のその意味はもっと重い。

何故ならば、樹海中に微生物に感染した被害者がうろついていたからだ。仲間も居ないたった一人で地獄のような樹海にとり残される。普通の人間がそんな状態に耐えられるはずがなかった。

勧誘した男であり現在の上司、通称「キツネ」にとってはただの暇つぶしのような提案だったのだろうが、安形にとっては生きるか死ぬかの問題だ。安形は二つ返事で黒服入りを了承した。

「もう少し先か」

ボロボロの標識を見ながら安形は呟いた。

何故安形が今こんな場所にいるのかは理由がある。そう、黒服の仕事だ。

あれは、三日前の事だった。

黒服第五支部船内、指令受領室。

安形はの中で、無数に設置してあるパソコンの一つを弄^{いじ}っていた。

黒服は政府組織では無いため、国家公認の建物や駐屯場所を得る事が出来ない。だから通常は黒服総合管理官や幹部らが所有している偽装タンカー、大型船舶が活動拠点となる。この第五支部も勿論その一つだ。

「ふう……中々良い仕事ないな」

安形は画面を見つめながら溜息をついた。

黒服メンバーが仕事を請ける方法はいくつかある。だが、大抵はこうして本部からパソコンに割り振られた仕事の中で、自分がやりたいものを選択し希望届けを出す。そしてその受領知らせが届けば、任務開始ということになるのだが……

安形は人柄が良かったため、殆どの任務に希望届けを出す事がなかった。

しかしそれも仕方が無いと言えるだろう。

黒服とは言わば傭兵だ。金さえ払えばどんな危険な仕事でも、どんな人道に反する行動でも取らなければならない。

元々人のために、人を守るために警察官という職業に就いていた安形にとって、どうしても根本的に相性が悪いのだ。

「安形さん、また仕事放棄ですか。そろそろ何かやらないと黒服から消されますよ」

横のパソコンに座っていた同僚の截が、心配そうな顔で安形を見

た。

だが、安形は気楽そうな笑顔で言葉を返す。

「大丈夫さ。そのうち俺にも出来そうな仕事がパツと出てくるよ。截は心配しないでいい。——というか、お前もう次の仕事を探してるのか？　一ヶ月前に紀行園に行っただけだから？」

「いや、別に仕事を探してるわけじゃないですよ。ちょっと調べたことがあったので」

截は僅かに慌てた表情を浮かべ、話を濁した。その際こっそりと画面を切り替えたことに安形は気づいていたが、敢えて黙って見過ごす事にした。

「んっ！？　これ、ちょっと面白そうじゃないか？」

突然安形が截のパソコンを指差した。どうやら画面を切り替えた際に、任務依頼の最新リストを出してしまったらしい。

「ああ、これですか。この依頼——……昨日から有るんですけど、まだ誰も届け出してないみたいです。まあ、これだけ不明点が多ければ怪しむのは同然ですよ。僕もやる気がおきませんし」

「へえ、どんな依頼なんだ？」

安形はまじまじとその依頼内容を見てみた。

その食いつきに苦笑いしながらも、截はその詳細ボタンをクリックする。

「下級メンバー用任務詳細」

依頼番号　：NO.067

依頼主　　：匿名希望

< 内容 >

わけが有り、詳しいことは教える事が出来ません。この依頼を受けて頂けたのなら、直接会いそこで詳細を教え致します。どうか私を助けて下さい。お願いします。本当に困っているんです。もし受けて頂けるのなら三日後、長野県の夢遊町に来てください。その南、3-12-8でお待ちしております。

匿名希望

内容はそれだけだった。実にシンプルで短い文だ。

「夢遊町って、あのスラム街だよな？」

目を画面に釘付けにしたまま、安形が聞く。

「ええ、三年前の『富山大震災』で家族を無くした人間や、『富山樹海毒ガス事件』の影響で避難を勧告された人たち、彼らが集まって出来た町です」

「そうか、随分とまあ俺たちと縁の深い依頼だな」

「……そうですね」

安形と同じように「富山樹海毒ガス事件」の当事者だった截は、悲しそうな目で頷いた。

「面白そうじゃないか。俺、これ受けて見ようかな」

「本気ですか、こんな怪しい依頼を？」

「ああ、だからこそ受けてみたいんだよ。それに下級メンバー用の依頼じゃないか、何も心配することはないさ」

「……まあ、安形さんに受ける気があるのなら、僕は何も言いませんよ」

截は静かにパソコンの電気を落とした。

もう部屋を出る気なのだろう。何か調べ物をしていると言っていたから、今度は資料室にでも行く気なのかもしれない。安形はそう考え、自分のパソコンにさっきの依頼データを移すと、力強くキーをクリックした。

その直後、部屋の入口付近から聞きなれた女性の大声が聞こえてくる。

「截ー！ お前私が冷蔵庫に入れてたケーキ勝手に食ったな！」

「べ、別にいいだろ？」

「いいわけ無いだろ、あれ限定販売で二時間も並んで買ったんだぞ、弁償しろ！」

「弁償って、お前が俺の部屋の冷蔵庫に置いて行っただのが悪いんだろ？ もっかい並んで自分で買っただな」

「なんだと、ふざけるなよ、私の苦勞を何だと思ってるんだ？」

いつものやり取りなのでスルーし、安形はそのまま手を進めた。

「それにしても『助けてください』、か。一体どんな依頼なんだ？」

その懇願するようなメールの言葉を、安形は頭の中から離す事が出来なかった。

何かが変だ。

安形は先ほどからこのスラム街に奇妙な違和感を感じていた。

ここまで歩いてくる間に数人の人間とすれ違ったのだが、妙に彼らに覇氣がないのだ。スラム街だからということを考えても、その雰囲気は不気味過ぎる。まるで何かに怯えているように見えた。

よそ者である自分に対し警戒心を持つのは分かる。だが、何故か彼らは知り合いであるはずの住民同士でも、顔を会わせる度にビクつくのだ。そして一度お互いの顔をまじまじと見てから、やっと安心したように移動を再開する。

「……嫌な予感がするぞ」

異常な行動を取る住民たちを見ているうちに、安形は段々と不安になってきた。ここで何かただ事ではない事が起きている。そんな気がしたからだ。

それが何かは分からないが、用心するに越した事は無い。安形は服の上から黒服メンバーの証でもある、自分の黒柄ナイフを一撫ですると、今までよりも慎重に歩き出した。

しばらく歩くと、ビルの隙間にあるこの路地の先に公園らしき場所が見えてきた。依頼主から指定されていた場所だ。

安形がそのエリアに足を踏み入れると、人の気は一切無く、ただ無数のゴミや動物の死体が散乱しているだけだった。周囲に目を配ってみても、どこにも依頼主の姿はない。

「まだ来てないのか？　はあ、じゃあちよつと待つか」

安形は穴や落書きだらけの、虫食いに遭ったようなベンチに腰掛けると、ほっと一息ついた。

公園から少しだけ離れた廃ビルの中。

一人の長髪の男が怯えながら窓際に後ずさりしていた。

「は、原田、お前どうしちゃったんだよ、イカれてるぞ!？」

目を見開き顔一杯に恐怖の感情を浮かべながら、近付いてくる短髪の人間に向かって長髪男は呼びかけた。しかし相手は全く耳を貸す気配もなく歩き続ける。

「くっ、来るな!」

長髪男は目の前に立った原田に殴りかかった。真っ直ぐに伸びる渾身の力が籠った拳。それは見事に原田の顎に命中した。

「……あああうううう……」

だが、口から血を流しながらも、すぐに原田は何事も無かったように長髪男に両手を伸ばした。まるで痛みを感じてないかのような「ひっ!？」

自分の喉を両腕でつかまれ、焦る長髪男。

恐らく首を締められるとでも考えているのだろう。何とか原田の腕を外そうともがきだした。

その瞬間、長髪男の首に電気が走ったような、何かを塗りつけられたような奇妙な感覚が走った。それと同時に原田が崩れ落ちる。

「は、原田?」

長髪男はわけが分からず、逃げ腰のまま倒れた原田を見つめた。

「……ん? 俺は——ここはどこだ」

原田は顎を押さえながらゆっくりと立ち上がる。

「お前、正気に戻ったのか?」

「は? 正気って何だよ。何で俺はこんなとに居るんだ?」

「お前何も覚えて無いのか?」

まだ怯えたような視線で原田を見つめる長髪男。

「何をだよ?」

原田は不思議そうに聞いた。

長髪男は黙って原田の背後を指差す。

原田が振り返ると、そこはまるで地獄のようだった。

「な、なんだこりゃ!？」

大きな血溜まりが広がり、その中に数人の男女が傷だらけになって倒れている。どう見ても生きてはいない。死体だ。

「何だよこれ!？」

長髪男の方へ驚愕の表情で振り返る原田。

だが、長髪男は何も答えなかった。いや、答えられなかった。苦しそうに頭を押さえながら震えている。

「お、おい？」

原田は心配そうに長髪男の顔を覗いた。

「……あああああううあっ!」

その瞬間、長髪男は奇声をあげながら原田の首本に噛み付いた。

「があ!？」

原田は何を考える間もなく、悲鳴をあげる間もなく、ただ目を見開いて首から夥しい血液を撒き散らすと、そのままあっさりと崩れ落ちた。

その姿をしばらく意味も無く見つめると、長髪男はゆらゆらと歩き出した。

まるで先ほどの原田のように。

「遅いな。もう三十分だぞ？」

安形はベンチに座ったまま、イライラとした様子で呟いた。

あれから半時。幾ら待っていても一向に依頼主は姿を見せない。流石に安形も不安になっていた。

黒服へ悪戯の依頼を出すことが技術的に不可能な以上、約束の場所に依頼主が現れないという事実が意味することはただ一つだ。

依頼主の死。

それ以外は考えられない。

もし本当に依頼主が死んでいれば、この夢遊町に来た意味はなくなる。安形は予想してなかった事態にがっかりし、盛大な溜息を吐いた。

「仕様がないな、帰るか。たつく、キツネになんて言えばいいんだよ。すぐに別の仕事見つけないと、今度こそ俺の身が危なくなる」

一人でぶつぶつと文句を言いながら公園の入口まで歩く。そのまま歩を進めようとすると、ふと目の前に四人の人間が現れた。一瞬安形はそのまま素通りしようかと思ったが、本能的に何か危険を感じ取り、踏みとどまる。

「……何だ？」

明らかに様子がおかしいその面々を見て、安形は警戒心を強めた。

「あんたら何なんだ？ 何か用でもあるのか」

「ああ……うとうとうああ……」

一応確認の意味で聞いてきみたが、相手の集団は呻き声を出すばかりで全く返事をしない。

——普通じゃないぞ……！ 何だかまるで——……

安形は三年前の事件を思い出した。あの時の感染者は体中が灰色に染まり、瞳が赤く血走って明らかに人間とは違う外見になっていた。だが、雰囲気は限りなくあの時の感染者に近いことを省けば、目の前の集団は外見的には普通の人間だ。

黒服の任務を受けるうちに、三年前と同様の感染者との戦闘経験

をいくらか持った安形は、この異常な集団を前にしても冷静に状況を分析した。

「まいったな。黒服への依頼、それにこの集団……何かありそうぞ」

安形は両腕を前に構え、近接格闘の用意をしながらそう呟いた。黒柄ナイフを使わないのは一応相手が人間かもしれないという線を考慮してもことだ。

「あうううううううあうあああー」

次第に近付いてくる謎の集団。

——悪魔でもあるまいし、四人くらいなんとかなるだろ。

安形はこの異常な状況になって尚、楽観的に考えていた。そう、次の瞬間までは。

「——は？」

目の前の集団の背後からさらに六人の同じような男女が歩いてきた。そのどれもが羨めしように安形を見つめている。

——これは流石に、やばい！

安形は体を反転させると、先ほど来た道とは逆方向に走り出した。「あああああううううううあああああ！」

それと同時に、物凄いスピードで安形を追いかけ始める謎の集団。彼らは皆一様に無表情で、口からは涎を垂れ流し、何故か体の所々に触手の生えたミミズを無数にぶら下げていた。

「うおおおおお！」

安形はその集団の意外な足の速さに恐怖感を抱き、必死に走った。「な、何なんだ！？ あいつら」

このままじゃすぐに追いつかれてしまうだろう。安形は逃げ惑いながらも、隠れられそうな場所を探した。

段々と集団との距離が詰まってくる。

——まずい、まずい、まずい！

頭の中で高い大音量の警告音が鳴り響く。奇妙な奇声が耳に近付いてくる。

安形は何とか集団を撒こうと、次の路地を左に曲がった。

「うつ！？」

その瞬間、何かが安形の腕を引っ張った。一瞬集団の仲間かと身構える安形。

だがそれは「まともな人間」の腕だった。大学生くらいの青年が緊張した顔でこちらを見ている。

「こつちだ、来い！」

青年が小声で叫んだ。

安形は一瞬迷ったものの、他に行き場もないため、仕方が無くその青年の後について行く事にした。

「——行っただか」

とある五階建ての廃ビルの窓から外を眺めると、青年は小さく咳いた。

安形はその青年の顔をまじまじと見つめてみた。

男にしては長いストレートヘアの黒髪。ボロボロのホームレスのような服。その顔は細い眉に色白と、どこか中性的だ。歳は大体截と同じかそれより下だろうか。とにかく若いという印象を人に与える外見だった。

「この町はどうなってるんだ？ さっきの集団は？」

青年が振り返ったので安形は疑問に思っていた質問をぶつけた。

「その格好——……あんた、黒服か？」

だが青年は安形の言葉を見せず、逆に質問を浴びせてきた。

——黒服を知ってる？

その問いに、安形は不思議がる。

「お前が依頼主か？」

安形は怪訝そうな顔で青年に聞いた。

「ああ、そうだ。俺があんたにここに来るようにメールを送った。
飛山鋭だ^{ひやまえい}」

青年、鋭は、値踏みするような視線を安形に向け、そう言った。

「随分若そうだけど、何故黒服の連絡コードを知ってる？ それに、さつきも聞いたけど一体何が起こっているんだ？」

「……あの奇妙な奴らを見ただろ？」

「ああ、あの麻薬中毒みたいな連中な」

「あいつらは普通の人間じゃない。とある生物に感染している」

「とある生物？」

「あいつらが感染しているのは疫病鬼^{ネルガル}だ。もつともこれは正式名称で、大抵はミミズと呼ばれるが」

「ミミズ？　なんだそれは、イグマ細胞の亜種か？」

「黙って聞け」

鋭は僅かにむっとしたように言った。

「四日前から突然現れだした小型の化物だ。人の体から体を移動し、まるで悪霊や疫病のように移動する。奴らに感染するとその間は体を支配されるが、奴らが体から出ると自分の意識を取り戻すんだ。簡単に言えば、体を一時的に乗っ取られたようなもんだな」

——体に乗っ取る？　そんな細胞は聞いた事がないぞ？

安形は鋭の言葉に驚いた。

「何故俺を呼んだ。何が目的だ？」

一番の疑問点を尋ねた。この事件の核心に繋がるかもしれない疑問を。

「俺をこの夢遊町から逃がして欲しい。俺は……追われているんだ」「追われている？　おいおい、ちゃんと説明しろよ。何で、誰に追われているんだ？」

「それは――……」

鋭は一瞬口ごもりながらも話した。

黒服第五支部船内、指令受領室。

いつものように依頼リストを確認していると、截はそこであるものを見つけた。通常の依頼欄とは別のファイルに、黒服本部からのメールが来ていたのだ。どうやら一日前に出されたものらしい。

「これは本部直指定の依頼？」

本部が依頼を出してくることは珍しくは無いが、この場合はその依頼主がおかしかった。

截は妙に思いながらもそれを開いてみた。

「本部指定直下依頼」

依頼番号 : NO . - - - - -

依頼主 : 草壁国広

「草壁国広くさかへくにひろの依頼!？」

截は我が目を疑った。

草壁国広は実質的な黒服の最高幹部、ナンバー二だ。殆どの人間が顔を知らない黒服の総括に代わり、この組織をまとめ上げているエース。地位だけで言えば截どころかキツネよりも上の存在。そんな人間が依頼を出してくるとは一体どういうことなのか。截は気になって画面を下に動かした。

ナグルファル会員の皆様へ。

本部からの重要なご連絡を申し上げます。

二日前、我々が所有する研究所の人間が一名脱走を企てました。彼の逃亡は我々ナグルファルにとっては最高重要な機密情報をばら撒かれるようなものです。

イミユニティーやディエス・イレ、他のテロ組織が彼の存在に気がつく前に、出来るだけ早く彼を捕らえなければなりません。

任務成功者には一般的な報酬の三倍の額をお支払いいたします。興味を持った方はなるべく早くこちらまでご連絡下さい。

なお、情報漏洩と活動の利点を考え、この任務は定員四名までと致します。

<詳細情報>

逃亡者：飛山鋭

年齢：23歳

性別：男

潜伏予測値：夢遊町

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「これは……安形さんやバインじゃないか？」

文面からほぼ間違いなく安形の依頼者のことだと、截は瞬時に察した。

草壁直々（じきじき）の依頼となれば、黒服の中でも熟練者や凄腕の面子が選ばれることになる。いくら安形がキツネの部下といえども、そんな連中を四人も同時に相手にして無事で済むわけが無い。截は安形に電話を入れようとした。だが――

「出ない？ 何で……黒服用の特殊な携帯なのに。まさかもこの依頼を受けた人間が現地に？」

上位の黒服の人間ならば、黒服の電波の妨害も簡単だ。截はそれを考慮してこう考えた。

「行くぞ」

安形と鋭の潜んでいるビルから五百メートルほど離れた建物。その屋上で一人の男が野太い声を放った。男は安形と同じ、警察の特殊部隊とカジュアルなジャケットを足して二で割ったような格好をしている。ドレッドの長い髪に、大きく獣のような瞳が特徴的だ。

黒村鉄心。三十七歳の黒服のメンバーである。

黒村の呼びかけに、彼の後ろに立っていた同じ服装の三人が頷いた。右から順に高木隆二、本田泰三、曾根真二と言う名だ。彼ら四人は草壁の依頼で、鋭を捕獲するためにこの夢遊町に來た者たちだった。

「俺と高木が正面から行く。本田と曾根は離れて援護だ」

一番年上の黒村が指揮をとり命令を下す。こういった場合では位の高いものに従う事になっているのか、残りの三人は素直に命令の通りに動き出した。

「飛山鋭、残念だったな。お前はもう黒服中のお尋ね者だ。逃げられるとは思うなよ」

黒村は双眼鏡を掲げ、その先に映っている鋭を見つめた。

憎しみの怒りも興味さえも無い、ただ金を得るための道具を見るような目つきで。

<第一章>地獄のお尋ね者（後書き）

同時連載の為、次の更新は遅くなるかもしれません。

<第二章>玄衣の踊り手達

<第二章>玄衣の踊り手達

廃ビルの三階。ボロボロの古いソファの上。そこに鋭と安形が座っていた。

「俺は少し前まで黒服で研究員として働いていた。勿論イグマ細胞の研究についてな」

鋭が静かに言葉を吐き出す。

「ずっと黒服で研究し続けたと思っていた。イグマ細胞の研究こそが、最高の神秘の研究だと思っていたんだ。だけど——あの時草壁国広の話を聞いてから、俺は考えを改めた」

「草壁？ 黒服の副代表のことか」

「そうだ。俺は黒服本部、つまり第一支部の偽装タンカーが仕事場所だった。そこで草壁に会ったんだ。あいつは言った。黒服での俺たちの研究は科学の進歩のためでも社会のためでもない。イミュニティーやディエス・イレを出し抜き圧倒的な支配力を得るためだとな。……がっかりしたよ。結局は黒服も他の組織とんなら変わりはしない。ただ力に欲望の涎を垂らす、飢えた獣だ」

「それとこれがどう関係してるんだ？」

「この三大勢力の小競り合いにうんざりした俺は黒服の本部から最高機密の兵器、いや研究体を持ち逃げし、それを世間一般に公表しようとしたんだ。黒服がイグマ細胞の兵器開発をしていることはイミュニティーもディエス・イレも知らない。短期で行動すればすぐにも公表出来ると思っていた」

鋭は僅かに俯いた。

「だが……甘かった。そう簡単に反逆が成功するわけがない。俺は

すぐに黒服の追手に追い詰められ、何とかこのスラム街に身を潜めることが精一杯だった」

「おい、おかしいぞ？ 黒服に追われているのなら何で黒服に助けを求めるメールを送った？ 自分から隠れ場所を教えるようなものじゃないか」

当然の疑問を持つ安形。

「俺を追っているということも、俺が何を持ち逃げしているかも知っているのは黒服の上位だけだ。追手は幹部の直属兵だし、普通の構成員は何一つ知らない。黒服は一度任務に当たれば例え上司が相手だろうと躊躇せず戦えるんだろ？ そこを逆手に利用したのさ」
「なるほど、賢しいな。それでその黒服の最高機密の兵器とやらはどこにあるんだ？」

安形は面倒な依頼を受けちまったと、内心溜息を吐きながら聞いた。

「兵器は……今は俺の手元にはない。このスラム街、夢遊町のどこかにいる」

「『いる？』まさか、その兵器つて既に固定形態になっているのか？」

「ああ。というより最初から感染細胞ではなく、大型生物型の兵器として作られていた」

「よくそんな大きな怪物を黒服から持ち出せたな。一体どんな手を使った？」

「……—そんな事より、そろそろ俺を逃がしてくれ。あんたなら黒服のやり方が分かるだろ？ そのために雇ったんだ。いつまでもここで話している暇はない」

何故か突然話を変えるように安形の疑問を鋭が止めた。どうみてもその先を話したくないというような態度だ。

「あ、ああ。そうだな。この町には感染者も居る事だし、黒服の追手が来る前に発つか。——ん？ そういえば、感染者たちにくっ付いてたあのミミズは何なんだ？ あれもお前が持ち逃げした兵器の

「一つなのか？」

ソファアから立ち上がりながら安形が聞く。

「あれは兵器の体内で生産されるいわば兵器の分身だ。兵器本体を守るために周囲の生命体に感染し、排除するように神経系にプログラムされている。十秒以上あのミミズに触れると体内に侵入してくるから気をつけるよ。本体の体から生産される以外に感染増殖することはないが、体から体に移ってくるからな。感染者は普通の人間だしあれが抜ければ元々の意識を取り戻す。ま、一般人を傷つけたくないと思うのなら決してナイフは抜くな」

「なるほど、あのミミズが感染源なのか。確かに元の人間に戻るのならナイフは使えないが……だったらどうやって戦えばいい？　こっちは逃げるしかないのか？」

「倒す方法はある。かなりぶっ飛んだ方法だけどな」

「何だ？」

「あいつの感染特性を利用する。あのミミズが体から体に移る時は、接触面に十秒間触れている事が条件だ。つまり、逆に言えばあいつは十秒かけて体間移動をする。だからその時に、あいつの体が移動しきる前に殺せばいい」

「つまり、俺かお前が囷になつて感染者の体に触れて、ミミズが移つて来たら感染しきる前に体からはみ出ている部分を仕留めるってことか？　とんでもなく危険で無茶苦茶な戦法だな」

「だが対抗策はそれしかない。あんたが一般人を切り刻めるのなら話は別だけどな。あと言うておくが俺が囷になるのは無理だ。俺はミミズに感染しないように研究所で薬を投与してある。戦うのならあんたが囷になるしかない」

安形は頭を抱えた。

——軽い仕事だと思つて来たのに、何て厄介な事件に巻き込まれてしまったんだよ。これじゃ俺の手に余るぞ。しかも相手が黒服だよ——最悪だな。

頭痛でもしているかのようにしばらく額に手を当て続けると、安

形はようやく鋭の顔に視線を戻した。

「はあ、仕方がない。この依頼を断れば俺の首が飛ぶ……で、どこに行きたいんだ？　まずはとにかくこの街から脱出か？」

疲れた顔で質問する安形。しかし鋭は壁の方に顔を向け、真剣な顔で一点を見つめていた。

「？　どうした？」

「……囲まれてる。あの服装、あんたの同僚だな」

「は？　どこに黒服が居るんだよ？」

「この壁の向こう二十メートル下の車内に二人、一階にさらに二人居る」

鋭は壁を見つめたままそう言った。

「お前、超感覚者か」

その事実には安形は驚いた。

「ああ、俺は事象の微小変化伝達をリアルタイムで感じる事が出来る。周囲のどこに誰がどんな姿で居るか分かるんだ。で、どうする？　相手は二人だ。窓から逃げるか？」

「ここは三階だぞ。飛び降りるとは危険が伴うし、ゆっくり降りていても追手に追いつかれる。屋上から隣の建物に移ろう」

安形は黒服で培われた冷静な判断力を活かし、そう言った。

安形と鋭が潜んでいるビルの一階。上階へと繋がる階段の前で、黒村の携帯電話のバイブレーションがなった。

「何だ？」

黒村は上階の気配を探りつつ電話相手に尋ねた。

「黒村さん、奴ら気がついたみたいです。今屋上に出てきました。多分、屋根伝いに逃げる気なんでしょう」

「気づかれた？　そうか、超感覚者というのは本当らしいな。仕方がねえ。お前らはそのまま監視を続ける。俺と高木は奴らと同じ屋上からのルートで追う」

「分かりました。ではまた後で」

普通の部下なら気をつけてとでもいうべきなのだろうが、電話の相手は黒村の身体の安否など興味が無いと言っようにあつさりと電話を切った。黒村もそれが当然のようにしている。

「黒村、どうした？」

隣に立っている筋肉質で短い髪を逆立てた男、高木が無表情で聞いた。

「気づかれた。屋上から追う、行くぞ」

その問いに関して実に完結かつ冷静にこたえる黒村。その言葉だけで現状を把握出来たのか、高木はそれ以上聞くことはなく黙って階段を上りだした。

「なあ、考えたんだけど今追ってきている連中は俺と同じ格好をしてるんだよね？」

先ほどのビルから隣のビルの屋上に移動した所で、安形が鋭に突然こんな質問をした。まだ午前のためか空には黄金のような太陽が燦々と輝き、水色の大きな空が視界一杯に広がっている。

「そうだけど、それがどうかしたのか？」

足を止めることなく鋭が聞く。

「俺と同じ格好ってことは普通の黒服メンバーってことだ。お前を研究所から追っていた奴らじゃない」

「だから何だ？」

「お前、研究所の追手を全員殺したのか？」

安形は僅かに訝^{いぶか}しがるような視線を鋭に向けた。

「全員殺していたらこんな街に潜んでいるわけ無いだろ。まあ、一〇二人は仕留めたけどな。黒服が追手の追跡を止めさせて正式な熟練メンバーをよこしたのは、確実に俺と生物兵器を捕まえるためだ。研究所からの追手はあくまで追手であって本場のメンバーには実力が劣るからな」

「一、二人ね……」

「別に何も嘘はついてない。そんなに怪しむなよ。ところで、俺もあんたに聞きたい事があるんだ」

「何だ？」

安形は意外そうな顔で鋭を見た。と同時に次の隣接している建物の屋根に飛び乗る。密集地帯のためか建物と建物の幅は数十センチしかない。

「あんたが現れてすぐ連中は襲ってきた。連中とあんたがグルって可能性もある。俺があんたを信じれる保障は？」

「俺がグルなら最初に会ったときにお前を攻撃してるだろ。それにさっきだってお前が奴らに気がついた時点でいつでも逃げ道を塞いだ。多分追手の連中はお前が黒服に送った依頼に気がついていたんだ。それで俺がそれを受けた事も知っていた。恐らくさっきの待ち合わせ地点付近まで俺を見張ってたんだろ。お前が現れた時を狙って捕まえるつもりだったんだろ」

「ごつつい見かけによらず頭が働くじゃないか」

鋭はニヤリと口元を歪めながら言った。

「俺を試したな？ お前は超感覚者だ。待ち合わせの場所に現れなかったのも俺を尾行していた追手の姿を感じていたからだろ？ だ

からあのミミズ感染者が現れて俺と追手の距離が離れるまで姿を見せなかった。結局は追手に見つかったけど」

「そこまで分かっているのなら十分だ。あんたが使えるそんな人間で良かったよ」

再び小さく笑う鋭。

「……それで、脱出方法なんだが、俺はこの夢遊町の手前までヘリで来てる。そこまで辿りつけければ連中も追って来れない筈だ」

「ヘリが衛星で追われる心配は無いのか？」

「衛星だって万能じゃない。トンネルの中や橋の下とか見えない場所は何らでもある。そういった場所でお前をこっそりヘリから落とせばいいさ」

「なるほどな」

鋭は頷いた。

「ところで――」

安形は次の疑問をぶつけようと声を出した。

「――来たぞ、走れ！」

だがその瞬間、鋭が背後の黒村と高木の姿を感じ取った。どうやら透視のように間にどんな障害物を挟んでも相手の姿を感じる事が出来るらしい。

「居たぞ高木！」

安形と鋭から二つ後ろのビルの屋上で、ドレッドヘアを振り乱した黒村が大声で叫んだ。

高木は未来から来たロボット兵士のように無表情でただ一点を見つめ、肩から小型ナイフを抜き取り前方に向かって投げた。

「つつ！」

それが鋭の背中に突き刺さる直前、安形は素早く腰から黒柄ナイフを引き抜くとナイフを叩き落とした。

拳銃のグリップのような形の黒い柄に、ダークグレーの刃が付いた変わったナイフだ。その刃の内側は一センチほど銀色に光っており、ナイフにしては珍しくローマ字の「E」のような鰐止めが付い

ている。

「この野郎！」

安形はお返しと言わんばかりに弾いた小型ナイフを拾い上げ、追手の二人目掛け投げ返した。

「ふん」

先ほどの安形のようにそれを叩き返そうとする高木。だが、予想よりも遥かに飛んでくるナイフの速度と力が強かったためか、逆に高木の黒柄ナイフが弾かれた。

「がっ！？ 何て馬鹿力だ！」

高木は手首を振りつつもう一方の手で自分の黒柄ナイフを拾うと、急いで既に先へ進んでいる黒村の後を追った。

「このままじゃこつちが不利だぞ！」

次の建物に飛び移りながら鋭が安形に怒鳴る。それを聞いた安形は必死に冷静さを保たせながらこう言った。

「相手は四人居たんだよな？ だつたらあと二人の黒服メンバーがどこかで俺たちを見ているはずだ。そいつらの視界から外れない限り永遠に追われ続ける。どこか狭い場所は無いか？ 遠くから姿が見えないような道とか」

「……一つある、こつちだ」

鋭は次のビルの屋上に移った途端、屋内への扉を開け放ち階段を降り出した。安形もすぐにそれに続く。

「下に降りたぞ！ 本田、曾根、見逃すな」

その姿を目撃した黒村は、懐の通信を入れっぱなしの携帯電話に向かって叫んだ。

先ほどのビルの地下。

ガラス張りの両開き扉を開け放つと、鋭は静かに言った。

「ここは元々は地下商店街だった。今では見る影もないけどな。この道を真っ直ぐに進めばビル密集地帯を気づかれずに抜けられるはずだ」

「一応屋上の扉はモップをつつかえ棒にして開かないようにしたけど、いつまで持つか分からない。出来るだけ急ごう」

安形は真剣な面構えで答える。

二人はナイフをそれぞれ構え慎重に歩き出した。

ガタ、ガタ――

風の所為で、ボロボロの商店街のシャッターが鳴る。鋭はその度に鋭い目つきでシャッターを睨み付けた。

ザッ、ザッ――

二人の足音が無音の地下通路に響く。その音は緊張感を引き起こし、二人の心臓の速度を加速させ、額からは冷たい水を絞り取った。僅か数十メートルの短い道が嫌に長く感じられる。今にも立ち並ぶ商店の中から何かが飛び出してきそうだ。

カランッ――

安形の真左の店の中から空き缶が転がる音が聞こえた。

すかさずナイフをそちらに向ける二人。

店の中は真っ暗でここからでは何も見えない。

安形は声を出さずに左手で鋭にここで待つように指示を出すと、足音に気をつけながら店の中に踏み込んだ。

雑貨屋だったのだろうか。店の中は無数の日用品が散らばり棚が立ち並んでいる。

いつミミズ感染者や黒服の追手に襲われても良いように、安形は前後左右全てに気を張りながら奥へ進んでいく。その姿を心配そう

に店の外から鋭が見つめた。

安形はカウンターの前、内側にまで来た。そこに空き缶が転がっている。こんな屋内にある空き缶が風で転がるとは考えられない。ましてやコロコロではなくランツと何か硬いものに当たったような音を響かせていたのだ。ほぼ間違いなくこの店の中には今何かが居る。

安形は用心しながらカウンターの下を覗きこんだ。

しかし、誰かが潜んでいるような事も物音を立てる原因になりそうなものも無かった。

「何で音が鳴ったんだ？」

不思議に思いながらもカウンターの下から顔を上げた。

その瞬間、目の前に涎を垂らした女が立っていた。

「うおおおっ！？」

「あううううあああああー！？」

女、ミミズ感染者は安形が反応するよりも早くその首に両腕を巻きつけた。

——ま、まずい！

相手が悪魔だったのならすぐにナイフで倒せるのだが、この場合はただ体を一時的に乗っ取られているだけの被害者だ。攻撃することなど出来るわけが無い。

頸動脈が圧迫され次第に安形の顔が赤く染まっていく。これでは窒息死してしまうだろう。だが、それよりも恐ろしい危険があった。そう、十秒感染だ。

首本に電気が流れるような何かが染み込むような嫌な感覚が走る。既に首を掴まれてから六秒近く経過している。このままではあとたった四秒でこの女の体内からミミズが移って来てしまう。そうなれば任務達成も自分の命も危うくなる。

——くそっ！

安形は無我夢中でミミズ感染女の腕を引き剥がそうとした。幸いにも安形の筋力は並外れている。幾ら相手がミミズ感染者だろうと

悪魔化しているわけでは無いため、安形の剛力なら引き離せるはずだ。

「うおおおおおっ！」

安形はミミズ感染女の腕を強引に振り解いた。その瞬間、ばったりと倒れるミミズ感染女。

一安心する間もなく、安形は自分の首本から伸びている、うねうねと蠢く触手だらけのミミズの姿に気がついた。もう既に前半部が安形の体内に侵入している。

「うわああっ！？ 気持ちわりいー！？」

慌ててそれを引っ抜き、地面に叩きつけると思いっきり踏みつけた。

「はあっ、はあっ——はあ……！」

間一髪だった。

短時間の疲れがどつと湧き出てくる。安形はカウンターに寄りかかるように体を傾けた。

「どうした！？」

鋭が急いで駆けて来た。

「いや、ただ感染者に襲われたただけだ。心配はない。……さあ行く」

安形は自分の情けない姿を見られまいと強がった。

「待て、この女性はどうするんだ？」

「ん？ あ、そうか。まいったな。ここでこうして放って置くわけにもいかないし。——仕様が無い。鋭、お前が安全な場所までおぶってやれ」

「い、いや俺は力が無いからあんたがおぶってくれ。それにもう何日も逃げ続けて体力が無いんだ。頼む」

その言葉を聞いた途端、何故か鋭は怯えたような表情を作りこう言った。

「しかたねえな……？」

安形は鋭の態度に奇妙な違和感を感じつつも、床に倒れていた女

性を背中に乗せる。それを見てホットしたように息を吐き出すと、鋭はさつさと店から出て行った。

「あいつ、何かまだ隠してるんがあるそうだな。」

その後姿を見ながら安形は誰にも聞こえないような声で呟いた。

「外には出ていません。はい、まだ中に居るか地下を使つたかどちらかだと思います。……ええ、はい。分かりました。そうします。では」

ハリネズミ頭の黒服メンバー、本田は黒村との電話を切った。

「何だつて？」

茶色の短髪のもみ上げと顎鬚がくっ付き、まるで顔を毛が一周しているような外見の男、同僚の曾根が確認するように聞く。

二人は今黒塗りの車の中に居た。ここからスラム街の狭い道路を走り、双眼鏡を使つて鋭と安形を追っていたのだ。

「黒村の旦那の奴そうとう焦ってるな。このまま見逃しそうならナルキッソスをばら撒けつてよ」

「ナルキッソス？ 任務直前に草壁から渡されたあれか。こんなに早く使うのか？」

「らしいぜ。つて言つても、あくまで見逃しそうな場合だけだな」

「あれは使い方を間違えれば俺たちにも危険が及ぶ。それに、あれをアウトブレイクさせてはこの任務のことがイミューニティーにバレてしまふんじゃないのか？ 確かこの任務は黒服内の最重要機密に

関わっているのだろ？」

「バレるよりも飛山鋭を逃がす方がヤバイってことさ。どうやらあいつは黒服にとってそれほど重要な存在らしい」

「ふむ。草壁は詳細を黒村以外には教えてくれなかったからな。俺たちは鋭について何も知らないが、それほどの価値のある男と言う事か」

「らしいな。さあ、そろそろ行こうぜ。こんな所でだらだらしてたら俺らが黒村の旦那に追われちゃう。働けってな」

本田は車のハンドルを握り締め、アクセルを踏んだ。段々と速度が上がっている。

「どこに向かうんだ？」

助手席から曾根が聞いた。

「ミッドタウン中心街だ」

質問に対し、本田は完結に答える。

その瞬間、二人の後ろ、後部座席に置いてある一つのクラーボックスが、まるでもうすぐ自由になれる事が分かっているかのように嬉しそうに揺れた。

それが車の振動によるものなのか、中に入っている物の所為なのかは誰にも分からなかった。

<第二章>玄衣の踊り手達（後書き）

題名のE₁やE₂のEはEXTRA（番外編）の略です。

<第三章> 武田忠信の決意

<第三章> 武田忠信の決意

コンコンコンッ――

ドアをノックする音が古びたアパートの狭い廊下に響く。

「誰だ？」

そのドアの向こう側から熟年の男らしき声が聞こえた。

「俺です、ゴローさん。 武田っす」

革ジャンにジーンパン、いやに前髪が長い黒髪の若い男が、声を落として返事をする。

「ああ、武田か。 入れ」

ボロボロのコート姿の長い髭に長い髪。 どう見てもホームレスとしか言えない様な格好の男、ゴローはドアを開けるとニッコリと微笑み武田を部屋の中に促した。

「お、武田さん。 ちーす！」

高校生らしき制服姿の男が気づき、武田に向かって声をかけた。

「なあ青木、木枝^{このえ}は？」

「木枝さんっすか？ 奥で寝てますよ」

「そうか、ありがとう」

武田は軽く頭を傾け青木に礼を言つと、奥の部屋へと歩き出した。 それを見たゴローが慌てて武田を引き止める。

「ちょっと待て武田。 その前に外の様子を教えろよ。 そのためにお前今まで出ていたんだろ？」

「あ、すいません。 外は…… かなり酷くなってます。 頭の狂った奴等が三日前の五倍近くに増えていました」

「そんなに増えているのか。 本当に一体何が起きているんだ？」

「分かりません。俺も襲われるのが怖かったんで、隠れながらこの周囲を数百メートルほど見てみただけなんです」

「そうか、悪かったな。くじの結果とは言え無理やり行かせて。もう話はいいい。早く木枝ちゃんの所へ行つて安心させてあげな」

ゴローは武田の肩を叩くと疲れたような笑顔でそう言った。

ここは夢遊町中心街居住区。

三日前からゴローや武田は感染者に襲われる事を恐れ、ここに集団で閉じこもっていた。

武田とその恋人である木枝は駆け落ちの末この町に逃げてきたのであり、青木は富山大震災で家と家族を失い三年前からここに住んでいる。ゴローと言えば彼は十年近くここに住んでいるという事以外は一切謎のおじさんだった。ちよつと前まで富山樹海から来たとか言う田中さんと名乗る元大手企業の人間と同棲していたらしいが、今は一人で住んでいる。

「木枝、帰ったぞ」

武田は奥の部屋に入って直ぐに自分の恋人に呼びかけた。

「忠信……！」

するとすぐに木枝はベットから飛び起き武田に抱きつく。よほど心配だったのだろう。その瞳の下には涙の跡らしき筋が二本出来ていた。

「何だよー泣いてたのか？ 可愛いところあんじゃん」

武田は木枝を強く抱きしめながら優しく微笑んだ。

「ふざけないでよ馬鹿！ 心配したんだから」

木枝は武田の胸板を叩きながらその顔を睨みつける。

「悪い、悪い、そんなに怒んなよ」

武田は少し困った顔と、どこか嬉しそうな顔の混じった表情で木枝に謝った。

「しかし、こうなつたらもう助けを待たないで逃げた方がいいんじゃないっすかねえ？」

「外は狂人だらけだぞ？ どうやって逃げるんだ」

抱き合つたままの二人を他所に、隣の部屋では青木とゴローが深刻そうな表情で今後の自分たちの行動について話し合っていた。

「トラックみたいな大型の車が手に入れば簡単に逃げられると思うんですよ。確か、二百メートルほど近くに元郵便局があったじゃないですか。あれ、使ったらどうつすかね？」

「トラックか。確かにそれに乗れたら逃げられるかも知れないけどよ。そこまで無事に行けるとは思えないぞ？」

青木の言葉にゴローはあまり賛成では無いように言う。

「でも武田さんは大体そんなくらいの距離を歩き回って来たんじゃないですか。気をつけてれば大丈夫ですよ。それに、まだ普通に外を歩いている狂人以外の人間もいるじゃないですか」

「でもな……」

青木の言葉を幾ら聞いても、ゴローは外に出る気にはなれなかった。折角安全な場所に居るのに、態々（わざわざ）外に出ることは無い。自分たちから死の危険を呼び込むことなど御免なのだ。

これほどの精神異常者が出ているのだ。きっと数日の間には警察が出てくるはず。

ゴローはそう思っていた。

「助けてくれー！」

突然アパートの外から男性の声が聞こえた。かなり追い詰められているような声だ。

「誰か襲われてるぞ！？」

武田は木枝と体を離し、急いで窓に手を掛けた。それと同時にゴローや青木も部屋の中に入ってくる。

武田、木枝、青木、ゴローの四人が窓の隙間から慎重に外を覗くと、武田と同じ位の年齢と思われる若い男が数人の狂人に追われ、道路上をこのアパートの付近へ真っ直ぐに走って来ている姿が目に入った。ここは三階であるため、その様子はつきりと確認する事が出来る。

ストリートヘアーをアメリカのミュージシャンのように垂らした

長髪に、真丸のメガネを掛けたボロボロのヤージ姿の男性だ。恐らくゴローや青木と同じこの夢遊町の住民だろう。

「た、助けなきゃ！」

木枝がギョツと武田の腕にくっ付き心配そうに呟く。だが武田は木枝を守るために冷静な判断を下した。

「だ、駄目だ。今あいつを助ければあの追いかけてる狂人たちに、俺らがこのアパートにいるって事を教えてしまう。残酷だけどここは見捨てるしかない」

「でも忠信……！」

「仕方がないんだ！」

武田は自分に言い聞かせるようにそう小さく叫んだ。

「そんなの間違ってる！」

武田もゴローも木枝も男を助けようとしないう姿を見た青木は、突然窓を大きく開け放ち大声を放った。

「こっつちだ！ こっちに来い」

「なっ！？」

ゴローと武田が同時に驚きの声をあげる。二人はすぐに青木を部屋の中に引き戻し、窓を素早く閉めた。が、時は既に遅かった。

外を走っていたメガネの若者は天の助けだと言う様に、一気にアパートの正面入口前まで来ると、勢い良くその扉を開けた。

「――仕方がない、あいつを中に入れたらすぐに鍵を閉めて閉じこもるぞ！」

ゴローは苦虫を噛み潰したような表情で自分たちの部屋の扉を開け、丁度階段を上がってきた若者に向かって声を掛けた。

「こっちだ、急げ！」

若者はゴローを見つけるとすぐに、荒い息使いで駆けて来る。その真後ろには相変わらず狂人たちの姿があり、先ほどよりもその間の距離は狭まっている。

「掴まれー！」

ゴローは手を限界まで伸ばし、若者の腕を掴んで部屋の中へと引

っ張った。折り重なるように中に倒れる二人を他所に、青木が素早く部屋の扉を閉める。

ガッ！

しかしあと一歩という所で狂人の腕がそれを止めた。ギリギリのところまで扉を掴んだのだ。もうこうなつては青木にはどうしようもない。

「は、入ってくるぞ！ 木枝、窓から逃げるんだ」

武田は恐怖に歪んだ表情で窓を大きく開け放ち、そこから木枝と共に逃げ出そうと試みた。だが――

「たっ、忠信っ！」

武田が窓から身を乗りだたさせたと同時に木枝が悲痛な悲鳴をあげた。どうやら狂人に肩を掴まれてしまったらしい。

「くそっ、木枝を離せこのイカレ野郎、うがあっ！？」

武田は精一杯の力で狂人の腕を振りほどこうとしたが、全く効果はなく逆に壁に叩きつけられてしまった。

「こ、木枝え！」

痛みで霞む視界の中で、今にも喉を噛みつかれそうな木枝を見る。段々と狂人の歯が木枝の首元へ近付いていく。

「忠信――！」

木枝は泣きながら武田の顔を横目に見つめた。

ガッンッ！

誰もが木枝の死を覚悟したその時、鈍い音と共に狂人の首がぐりりと捻じ曲がった。

「今だ！ 行け！」

武田が木枝と狂人の後ろを見ると、そこにバットを構えて立っていたゴローが必死の形相で叫んだ。

「あ、ありがとうございます、ゴローさん！」

武田は心から礼を述べると木枝の腕を掴み全力で走り出した。

ゴローの身も心配だったが、何よりも今は最愛の恋人である木枝を助けることの方が重要だ。武田は心の中でゴローの安否を祈りな

から部屋を飛び出す。その間に青木に群がる狂人の集団を目撃したが、こんな状況では気にする暇もない。逆に逃げ出すチャンスだと言わんばかりに武田は青木を助けることなく先へ進んだ。

「はあ、はあ、はあっ……うっ!？」

アパートから一般道に出た瞬間、突然木枝が走るのを止めた。

「どうした木枝、早く逃げないと殺されるぞ？」

木枝の両肩を掴んで揺るように言ったが、木枝は何も答えずじつと武田の顔を見ている。

「木枝？」

武田は急に不安になつて木枝の顔を覗き込んだ。

「あああああうううああっー!」

その瞬間、木枝は奇声を上げながら武田の顔に噛み付いた。瞬く間に武田の顔に電撃のような鋭く熱い痛みが走る。

「あがあああ!？」

思わず武田は殴りつけるような突きを繰り出し、木枝の体を自分から遠ざけた。

「ぐっ、な、何するんだ？」

顔を抑えながら武田が木枝を見ると、そこに立っていた女性は体中を小刻みに痙攣させながら涎を垂れ流し、自分を獣のような目つきで睨みつけていた。その様子はまるで先ほどの狂人と変わらない。

「木枝……嘘だろ!？」

武田は信じられない、信じたくないという目で愛すべき恋人の哀れな姿を見つめる。

高校生の頃から好きだった彼女。

遊園地で子供のように走り回っていた彼女。

初心な小学生みたいに顔を真っ赤にしながら手を握り合った彼女。その最愛の彼女が今、感情の籠らない目で自分を睨みつけている。

「こ、木枝え……」

武田は見つとも無い声を出しながら、木枝のその変わり果てた姿を眺め続けた。

ついさつき嬉しそうに、心配そうに自分を抱きしめてくれたあの暖かい温もり、優しい瞳はもはや見る影もない。

何故、一体どうして彼女がこんな顔で自分を見るのか武田は理解出来なかった。

「あああああううう…… ああああ」

赤子のような声を撒き散らしながら、木枝はゆつくりと武田に近付いていく。その行動に、武田は思わず一步退いた。

もしもこの時武田がミミズ感染について、ネルガルという細胞兵器について知っていたのなら、あんな事にはならなかったかもしれない。あんな運命を辿ることにはならなかったかも知れない。

しかしそんな事は無理な注文というものだろう。

一般人である武田がネルガルについて知る術があるわけもなく、木枝が今どういう状態なのかも理解出来はしない。

全ては運が悪かったとしかいえない様な偶然の結果だった。

「あああううああ！」

木枝は勢い良く飛び上がり武田の体を押し倒した。女性といえどもミミズ感染によって強化された力は凄まじく、簡単に武田はその背を地面につけてしまう。

木枝はそのままゆつくりと武田の首元に自分の歯を近づけていった。

迷う事も戸惑うことも悲しむことも一切なく、ただ害虫を排除するかのような機械的な動きで。

—— ああ、もう元には戻れないんだな。

武田の中でそんな考えがふと浮かんだ。

原因は何にしろ彼女はおかしくなってしまった。

イカれてしまった。

壊れてしまった。

そして今、愛し合ったはずの自分を殺そうとしている。

もし魂というものが存在するのなら、きっと——いや、絶対に木枝はこんなことは望まないだろう。

自分のしてしまったことの罪の意識で狂ってしまうかもしれない。武田は涙を流しながら決意を固めた。

死にたくないという思いも勿論あったが、それ以上に木枝を悲しませたくない。殺人者にしたくない。苦しませたくないという思いの方が強かった。

近付いてくる木枝の変わり果てた顔を見つめながら、何時も腰につけている小型の万能ツールを片手で取り外し、内臓されていたナイフを引き出した。

「あああああううう……あああああ……」

「木枝、今楽にしてあげるよ」

その瞬間、灰色の道路の上に真っ赤な花が咲いた。

まるで地獄に咲いているかのような残酷で悲しい花が。

「ここを上がればミッドタウンだ」

鋭が地下商店街の端にある階段の上を見上げながら言った。

「よし、じゃあ行くか」

安形は背中におぶった女性をしっかりと抱えなおし、階段を上がりだした。

「なあ、へりは夢遊町の端に止まっているんだろ？ ミッドタウンを通っていったら遠回りなんじゃないのか？」

「遠回りじゃないぞ。端っこだってこっち側じゃなくミッドタウンを挟んで反対側の端だからな」

「何で態々（わざわざ）、そんな待ち合わせ場所から離れたところに着陸したんだ？」

「だって待ち合わせ場所に近いと色々と危険だろ？ 依頼主が信用できる人間かどうか分からないんだからな。ある程度こちらの存在を知られない場所から接近し、罠があるかどうかとか色々調べる必要があつたのさ」

「その割には全く慎重さが無いように見えたけど」

「まあ、俺は慎重に動くとかそういうのあまり好きじゃないからな」
安形はあっさりとなんな事を言った。

「良くそれで黒服に入れたな」

「別にいいだろそんな事は。ほら、外だ。もうおしゃべりは止めて気を引き締めようぜ」

実際に悟という同僚のついでで黒服に入った安形は、あまりその話をしたくないのか話題を変えるようにこう言った。

「うう……？」

階段を上がり住宅地のような場所に出たと同時に、安形の背に背負われていた女性が声を上げ目を覚ました。

「お、起きたか。良かった。このままずっとおぶっていくのは流石にきついからな」

「うん？ ……——っあ、あんたら誰よ？ 私なんで担がれてんの！？」

自分が誘拐されたとも思っているのだろうか。女性は困惑と怯えの入り混じったような表情を浮かべる。

「落ち着け。俺たちはあんたに危害を加えたりはしない。下ろすぞ？」

安形はゆっくりと女性を背中から下ろした。

「あんたはミミズに感染してたんだ。覚えてないか？」

道路横のコンクリートの壁に背を付きながら、鋭が確認するように聞いた。

「ミミズ？ いや私は唯に首を掴まれて……」

「その時に感染したんだ。良かったな。安形が助けなかったらあなたは永遠に操り人形になるか、他の体にミミズが移ったあとに殺されてたか、どちらかだっただろう」

「ちよつとわけ分かんないんだけど？ 何なのよミミズって！？」
「これだ」

いきなり鋭は手の平を開いて女性に見せた。そこには触手だらけの長い生き物がうねうねと蠢いている。

「ひっ！？」

思わず女性は顔を勢い良く鋭から離す。だが、驚いたのは女性だけではなかった。

「鋭、お前それでどこ見つけた？ いつの間に掴んだんだ？」

意外そうに安形が尋ねる。

「そんなに驚くな。今この夢遊町には腐るほど居るんだ。目を凝らしてそこら中を探せば直ぐに見つかるぞ。ほら、そこにも居る」

「うおっ！？」

安形はいつの間にか自分の肩の上を這っていたミミズを慌てて叩き落した。

「用心しろ。悪魔と違ってこいつらは気づかれ難い。絶えず周囲に意識を配ってないとすぐに感染するぞ」

安形は黙ってミミズを踏み潰した。それを意味ありげな表情で見つめると鋭は歩き出した。

「さあ、行こう。立ち止まるのはマズい」

「ちよつと、どこ行くのよ？」

女性が怪訝そうに尋ねる。

「あんたには関係ないだろ？ もう意識も戻ったことだし、勝手にどこか行け」

「はあ？ 何よそれ！ こんなとこに私を一人で置いてく気？」

「当たり前だろ。まさかあんた、俺たちに着いて来る気なのか？」

「当然でしょ。あんたたちが助けたんだから最後まで責任持ちなさいよ」

「何でそこまで俺らが面倒を見なきゃ行けないんだ。自分の命くらい自分で守れ」

「何ですって!?!」

女性は耳を赤くして怒鳴った。

「鋭、少し冷た過ぎるぞ。こんな危険な場所に彼女を置き去りにする事なんて出来ない。せめてどこか安全な場所に避難させよう。何かいい場所を知らないか? お前——三日間ここに潜んでたんだろ?」

安形が場を納めるように言った。

「……ミッドタウンの東部にデパートがある。そこに俺の知り合いが数人立て籠ってる。俺も待ち合わせ場所に向かうまではそこに隠れていた」

「そうか、よし、じゃあそこで決まりだな。そこでこの人を預けよう。ヘリにはその跡に行けばいい」

「黒服に追いつかれるぞ?」

鋭はやや不機嫌そうに安形を見る。

「その時はその時だ」

だが、安形は楽天的な態度で鋭を一笑すると、ズンズンと歩き出した。

「はあ……」

鋭は頭を抱え溜息をつく、仕方がなくそれに続いた。

「曾根と本田は既に車でミッドタウンの方へ向かった。このビルの周囲は全て探したが、どこにも奴らの気配は無い。やっぱりミッドタウンに逃げ込んだらしいな」

ボロボロのビルの中、受付前の広間でレゲエ頭の黒村が憎憎しげにそう言った。

「本田らの車をここに呼ぼう。このままだと俺たちだけ出遅れる」
ロボット兵のような高木が無表情で携帯電話を取り出し、それを耳に当てる。

「止めとけ、普通の上司と部下ならともかく、黒服ではそんな命令を真に受ける奴なんてめったにいなーよ。電話を入れても大方「手が離せません」とか言われるのがおちだ。手柄を得るためにな」
「確かに俺たちの間にはそれ程権力差は無いからな。お前が今仕切っているのも年上で経験豊富だからに過ぎない。これは飛山鋭との戦いだけでなく黒服同士の争いでもある」

「まあ、もっと上の人間が指揮を取れば別だけどな。草壁本人が出てくるとか」

「あのイヌが出てくるわけ無いだろう。あいつは総官以外の人間はゴミクズぐらいにしか思っていない。出てきたら俺はこのナイフをケツに指してもいい」

高木は黒柄ナイフを手首の回りに回転させながら珍しくニヤリと笑った。

ルルルルル――

その時、黒村の携帯の電話が鳴った。そこには草壁国広と名前が出ている。

「はっ!？」

今の話が聞かれているわけは無いのだが、その名前を見た瞬間、二人は多少焦った。

「は、はい。黒村です。えっ? はい……分かりました。でも一体

何故……はい、そうですか」

あまり長くは電話をしなかったが、高木の目から見て黒村が何やら戸惑っているような様子はしっかりと分かった。

「どうした？」

高木は黒村が電話を切るとすぐに聞いた。

「それがもう一人増援が来るそうだ」

「増援？ 一体誰だ？」

高木も訳が分からないというような顔で聞く。

黒村は躊躇いながらも僅かに緊張した表情で答えた。

「本物の上の人間だよ」

黒服第三支部任務用準備室。

截はお決まりの警察特殊部隊の服とカジュアルなジャケットを足して二で割ったような黒い服を着込むと、その腰に二本の白い柄と黒い柄のナイフを挿した。

「よし、夢遊町か。今出ればまだ安形さんの身も無事なはずだ。急がないと」

数十分前。安形の依頼主を草壁が捕獲しようとしていることを知った截は、すぐに安形の手助けを考えた。本来は依頼無しに他の黒服の仕事を妨害することは許されない。だが、安形には三年前に心を救ってもらった恩がある。一緒に富山樹海から逃げ延びた仲間意識がある。

それにとある理由から元々黒服と決別するかもしれない覚悟を決めていた截にとって、黒服に反することはそれ程嫌な事ではなかった。

「安形さんから依頼を受けたことにすれば何とかなるだろ」

最悪、そう貫き通せばいいと考えていた。

截は準備室を出ると地下の小型ボート船着場へと向った。

今現在この第三支部は日本海の真っ只中だ。外に出るのはボートを使うしかない。早朝や深夜ならばボートが全て出ていることが多いが、幸い今は昼間だ。

運がいい事にボートは三台も置いてあった。

截はそのまま一台のボートに乗り込もうとした。

「どこいくんだ？」

その瞬間、背後からいきなり肩を掴まれた。

「な!？」

截が驚いて振り向くと、そこには現在もつとも見たくない顔があった。

「クスクス、こんな真昼間から仕事を請けてるとは随分熱心だな。

それとも観光にでも行く気か？」

西洋風のセミショートの緩やかな癖毛の黒髪に切れめの目、貼り付けたような薄ら笑いを浮かべた截の直属上司、通称キツネがそこに立っていた。

「お前には関係ないだろ。何でここに居る？ 仕事か？」

截は鋭い目つきでキツネを睨みつけた。

「ああ、仕事だよ。ちよつと夢遊町までな」

「夢遊町!？」

「安形の馬鹿が本部の脱走者の依頼を知らずに受けたらしくてさ、その責任を取るために僕が急遽行く事になったんだよ」

「お前が……?」

——最悪だ……! こいつが行けば、安形さんの仕事が成功する可能性はほぼゼロになる。よりによって何でこのタイミングで前の

仕事から帰ってくるんだ。

截は心の中で毒ついた。

「だから『お前』は行かなくていい。安形のことは僕に任せろ」

キツネは貼り付けたような笑顔のまま截の肩に置いた手に力を込めた。無言で手を出すなど言っているのだろう。

「残念だけど俺は安形さんから『依頼』を受けてるんだ。幾らお前でも仕事を請けた俺を止める事は出来ないはずだぞ」

「確かに出来ないさ。僕にはな」

キツネはそこで一端言葉を切った。

「——そういえば最近六角行成に付いて調べ回っているらしいじゃないか。黒服のデーターベースにもこっそり侵入したりして。どうしてなんだ？」

そして突然そんな事を言い出した。

——こいつ何で知ってるんだ？ 俺を脅す気か？

思わず截は身構える。

「僕はどうでもいいんだけどな。草壁がその事を気にしてたから、これ以上変な動きはしない方がいいと思うぞ。自分のためにも、相棒のためにも……」

截は拳を握り締めた。

「クスクス——」

そんな截を面白そうにしばらく眺めると、突然キツネは截の体を一本背負いのように投げ飛ばそうとした。

「くっ!？」

咄嗟に感覚が反応した截は、そのキツネの両腕を何とか手首を返すように受け流す。だが、キツネはその動きのまま既に次の行動に入っていた。手が反らされたと同時にその腕の肘で截の顎を強打したのだ。

「ぐあっ!？」

感覚では次の行動を理解していたものの、キツネのあまりの自然で見事な動きに、截は完璧にその攻撃を受けてしまった。顎に強い

衝撃を受けた所為で脳が揺らされ意識が飛びかける。

「……っ！」

截は何とか歯を食いしばり意識を保たせると、キツネの股の間に自分の足を滑り込ませ足を引っ掛けると同時に、肘撃ちを鳩尾みぞおち目掛けて一気に突き出した。

しかしキツネはその攻撃を自分の肘でかち上げ弾き、逆に截の腹部に強烈な膝蹴りを食らわせた。

「がはっ！」

思わず体を折り曲げ唾を吐く截。

その瞬間、留めと言わんばかりにキツネは截の鳩尾に強烈な掌を飛ばした。ドスつと鈍い音が鳴り響き、截の体が崩れ落ちる。

その姿を見ながら、キツネは先ほどまでと変わらない涼しい表情でこう言った。

「しばらくそうやって寝ている。起きた時には全て終わってるさ」

截は消え行く意識の中、その声だけを頭に木霊させ視界を闇に沈めていく。

「さあ、お尋ね者の退治に行くとするか」

気絶した截の体をそのままにし、キツネは悠々とボートに飛び乗るとエンジンを素早く入れ、真っ青な海の中へと飛び出していった。

<第四章>特攻

<第四章>特攻

深い後悔、胃の中で巨大な怪物が暴れているかのような苦しみが、痛みが、悲しみが、何度も体を反芻する。

武田は魂の抜けた死人のような顔つきで、たった一人。真っ赤に濡れた服のままミミズ感染者の闊歩する夢遊町住宅区の裏路地を歩いていた。

自分が木枝をこの手で殺してしまった。

勝手に助けられないと諦めて。

勝手に苦しんでいると判断して。

自分が殺されると思い込んで。

ズキズキと噛まれた鼻が痛む。

——ああ……やっぱりこれは現実なんだな。

武田はその痛みを感じる度に、己のしてしまった殺人という事実と恋人を失った悲しみに襲われた。

その悲しみから逃れるためにじわじわとどす黒い憎しみが湧き上がって来る。

「くそ、青木の馬鹿野郎……なんであの時扉を開けたんだよ。お前が開けさえしなかったら木枝は……」

自分の罪を擦り付け、既にこの世には居ないであろうしばしの同胞に憎しみを飛ばす。

本人が気づかない中に、徐々に、徐々に——武田の心は崩れだしていた。

「ん？」

裏路地の先から激しい足音が聞こえた。状況から考えると誰かが

狂人たちに追われているようだ。武田はもうこれ以上他人の厄介ごととに巻き込まれたくないと思い、その逃げている人物を助けようとはせずに古びた荒廃した家々の隙間に身を挟ませた。

——俺に気づかず行ってくれ。

げっそりとした頬を壁に擦り付けながら、心の中でまだ姿の見えぬ相手にそう一瞥する。

程なくして一人の年をとった男性が真横を通り過ぎていった。この街では一般的なボロボロの服装に無精ひげを生やした男だ。

——次はあいつを追ってる狂人達が通り過ぎるのを待つだけだな。緊張した様子で身をさらに潜ませる。先ほど衝撃的な襲撃を味わったばかりの武田にとって、狂人たちは恐怖の対象でしかない。団子虫のように体を丸めながらじっと息を殺して壁に体を押し付けた。

「——来たか」

再び足音が聞こえてきた。狂人たちだろうか。だが少し妙な感じがする。音は何故か住民が逃げた方向から聞こえた。狂人たちならそんな方向から来る筈は無いのだが。

「おっ！——瞬何か見えたと思ったら、やっぱり人が居たか」

所々禿げて崩れ落ちている壁の合間に、先ほど通り過ぎた無精ひげの男の顔が飛び出した。他の生存者に会えて安心したのか、嬉しそうにこちらを笑顔で見つめてくる。

——ふざけるな！もうすぐそこまで狂人が迫ってるんだぞ！？
何で戻ってくる？何でわざわざ俺に話しかける？

武田はあまりにも考えの無い男の行動に、口元を小刻みにピクピクと動かした。

壁から伝わってくる狂人たちの行進音がかなり大きな音になる。どうやらもう十メートル以内には来ているようだ。男が気づいていないことから恐らく曲がり角の先に居るのだろう。

——このままじゃ、まずい。さっきと全く同じだ……！

武田は再び無神経な生存者に命の危険に巻き込まれ、追い詰められた。大量の汗を流しながら目を血走らせて男を睨みつける。

死にたくないという強い感情が壊れかけた心を通り頭の中に流れ込んでくる。

——俺を巻き込むな……！俺を危険にさらすな……！ふざけるなよこの野郎！

木枝を失った苦痛——それがリプレイされたかのような今の状況に、高熱で沸騰させられたとき強烈な憎しみと排除感が沸き起こった。
「ん、まずい奴等が来る！俺も中に隠れさせてくれ」

ようやく足音が耳に届いたのか、無精ひげの男は慌てて家々の隙間に身を乗り出した。

もう一刻も猶予は無い。ここにこの男が入り込んだら確実に自分も殺される。二人が隠れられるほどのスペースなんて無いのだから既に一人——最愛の恋人である木枝を殺してしまったんだ。生きるか死ぬかの状況だし今更こんな馬鹿な男を殺すくらいそれほど抵抗はない。武田は男に気づかれないうちに腰の後ろで万能ツールからナイフを引き出した。

「邪魔なんだよ！」

そして一気に男の背に突き刺した。

「——なっ！？」

まさか攻撃されるとは考えもしなかった無精ひげの男は、目を見開き武田を振り返る。痛みを感じるより早く驚きが勝つたらしい。

「ここは俺が隠れていたんだ！俺を巻き込むな」

武田はさらにナイフを男の体に強く押し込むと、思いつきりその腰を蹴飛ばした。

「ぐおおっ！？」

鮮血を弾かせながら道路のど真ん中に倒れこむ男。

その直後に男の前の狭い十字路の右側から三人の狂人が現れた。左から順に鉄パイプ、木材、草刈用の鎌などで武装している。

「くっ、来るな！」

既に虫の息だった無精ひげの男は口から血を吐き出しながらそう叫んだ。

しかしミミズ感染者と化した彼らにそんな言葉は意味を成さない。男はあつと言う間に三本の武器によってその体をばこぼこに打ちつけられる。

最初こそそれなりに呻き声を漏らしていた男だったが、数十秒もたつと静かになりただじつと三人の攻撃をその身で受けるだけになった。

それを見ると、排除完了と判断したのか狂人たちは男の体からそれぞれの武器を退かし、何事も無かったかのように歩き出した。

「はあ、はあ……」

三人が居なくなると、武田は慎重に家々の隙間から這い出た。そして先ほどまで自分に笑いかけていた無精ひげの男のつぶれた顔を見つめる。

既に死んでいるにも関わらず、男は壮絶な表情で武田を睨みつけていた。

「悪く思っなよ。もう……生きるか死ぬかしかないんだ。奇麗事なんて言ってられない。俺は、木枝の為に生きる必要がある、木枝の分まで生きなくちゃいけないんだ」

そのまま自分に言い聞かせるようにぼそりと呟く。

歩き出そうとふと視線を前に戻すと、正面にある家の窓には日の光に反射し鬼のような顔をした自分の姿が映っていた。

武田は無言でその顔を見つめた。

ただじつと――血の滴るナイフを右手に持ちながら。

「あそこだ」

古いタバコ屋の前から頭のみを道路に出した格好で、鋭が二百メートルほど先に見える五階建てほどの建物を指差した。仲間が立てこもっているらしきデパートだ。

それを聞いた途端安形が目を細めて質問する。

「思ったより早くたどり着いたな。だがどうする？　ここから見えるだけでもかなりの数の感染者がデパートの周囲に居るぞ。殺すわけにもいかないし……お前はどうかやってあそこから抜け出したんだ？」

「俺があそこを出たときはここまで感染者は居なかった。多分……生存者の気配に引かれて集まってきたんだろうな」

僅かに奇妙な間を置きながら鋭が答えた。

「ちよつと、あそこに行くくらいならこのまま逃げた方がいいじゃない！　あんなところ死に行くようなものよ！」

先ほど助けたOL風の長い髪の女性が、感染者達を見て喚く。

「少し黙ってくれ。大声を出すな。俺たちを奴らに気づかせる気か？」

安形は煩わしそうに女性の口を遮った。

「周囲に感染者が集まっているのはまだ生存者が居る——中に踏み込まれていないってことだ。安全性は保障出来る。俺が最後に見たときもかなり頑丈そうなバリケードが作られていたし……あと数日は十分に立てこもれるだろう」

鋭が確信を持った様子で頷いた。風で前髪が揺れ綺麗な白い額を覗かせている。

「じゃあ問題はない。どうせ俺がお前を逃がした後にその、例の兵器を黒服の連中が始末するはずだ。お前を早く逃がすことが出来れ

ば、数日も掛からずにここら一帯のミミズは消える」

「そうだ。俺がこの街から消えれば奴らも兵器を手に入れる事しかやる事はなくなる。兵器が消えればそれを守るために殺害行動を取っているネルガルも消滅する。俺たちにとってこの女が足手まどいでしかない以上ここに置いて行くべきだ」

「じゃあ、決まりだな。問題はどうかやってあの中に入るか」

デパートの周囲に群がる感染者、狂人たちの姿を遠目に身ながら、安形は悩ましげに呟いた。

「あんたはあいつらを殺す事が出来ないんだろ？ だったら強行突破は無理だ。ここからデパートまで住宅の屋根の上を通って行こう。上からなら窓からデパートの中に入れるかもしれない。俺もあそこから出るときはそのルートだった」

「それ以外にはいい方法はなさそうだな。よし、それで行くぞ。頼むから君も、静かにしていってくれよ」

そういえば名前知らねえと今更気づきながら、安形は女性に言った。

屋上に上がると周囲を綺麗に一望出来た。さっきまでは分からなかったことまでよく見える。デパートの周囲の駐車場や道路はまるで戦争があつたかのように無数の車が転倒し、その中には警察車両まであつた。ここまで甚大な被害が出ていればイミューニティーも動き出していいはずだが、元々スラム街という場所の所為か、黒服の

力によるものなのか、それとも一ヶ月前の水憐島、紀行園での事件の後始末に追われているためか、イミューニティーは全く行動を起こしてはいないらしい。そもそもここでこういった事件が起きていることすら気づいていない可能性もある。

実はこれには草壁国広の多大な努力が影響しているのだが、そんなことは安形たちには分かるわけがなかった。

「まいったな。感染者が屋上にも居るじゃないか。しかも五体も」
デパートの丁度目の前の家の屋上で窓を叩くようにして群がっている狂人たちを見て、安形は残念そうに舌打ちした。その家の住民たちが感染でもしたのかもしれない。

「はああ！？ それじゃ中に入れないじゃないのよ。どうすんの！？」

かなり近い位置にいるにも関わらず、大声で怒鳴る名前不明の女性。どうやら元々大声で話すのが癖のようだ。

「どうするって……なんとかしてあいつらを退かすしかないだろ。」

一人一人ミミズを除去するしかない」

「五体も居るのよ。そんなの無理でしょ。殺した方が早いわ。どうせもう人間じゃないんだから」

「おい、何言ってるんだ。あいつらは一時的に感染してるだけなんだぞ。そんなことなんかできるか。それにその理論だと俺がさっき君を殺しても良かったってことになるぞ？」

「だって……そうしないとこっちがやられるじゃない！」

女性は泣きそうな顔をして言った。

それを見た安形は思わず目を下に移す。

——この子は一般人だ。自分や鋭のような心構えも覚悟も無い。いきなりこの地獄に放り込まれたただの普通の女性。いつ感染者に襲われるか分からない恐怖や緊張に常に侵されているこの状況では、そう考えるのも当然か。

「君、名前は？」

「……稲城愛^{いなぎあい}」

「愛さんか。愛さん、俺たちはこういうことに慣れている言わばプロだ。大丈夫。きっと君を無事にデパートに送り届ける。信じて俺たちに任せてくれ」

安形は自分の盛り上がった大きな胸を張りながら、安心させるように言った。だが愛は先ほどまでの大声はどこえやら細かい声で話す。

「信じたいけど——無理よ。五体も居るんでしょ？ 勝ち目が無いじゃない」

「勝ち目は、あるさ」

何か妙案を思いついたのか、安形は自信たっぷりに力強く答えた。

デパート最上階である五階。無数の大きなテーブルが並び、鮮やかな絵画や植物が所々に飾られている。いや、飾られていたと言った方が正しいだろう。少なくともそれらが美しさを放っていたのはもう何十年も前の事なのだから。スラム街と化した今のこの夢遊町で手入れをされ原型を止めている物など何一つ存在しない。かつては有名なレストランだったここも当然のように酷い有様だった。

「みんな見るよ！ 誰かがデパートの前に居るぞ」

窓を覗いていた中年の男、禿げを隠す為に側面の毛をバツ印のように頭の頂上でクロスさせている変わった髪形の男が驚いたように声を上げた。

「他の生存者か？ どこだ!？」

声を聞きつけてここに潜んでいた他の人間たちも窓に集まってくる。その数はざっと十人は居た。女性、男性、老人若者……年齢も性別も様々だ。

「おい、あれ鋭じゃないか？ 朝ここを出て行っただ……生きてたのか」

だぶだぶの灰色の長ズボンに同様のトレーナを着たヤンキースタイルの若い青年が、窓から身を乗り出し嬉しそうに顔をほころばせた。この青年は鋭が始めて夢遊町に来たときに一緒に感染者たちから逃げ友情を結んだこの街の住民だ。ただ鋭については偶然この街に来た一人旅の若者や、自分と同じように世捨て人になった人間程度にしか思っておらず、この事件の根本的な原因が鋭の黒服脱走であることは知らない。

「他にも誰か居るわよ」

四十代ほどのやせ細った女性が安形と愛を指差した。

「ここに来る気なのか？ 入口の前にも二階の窓の前にも狂人たちがいるんだぞ？」

先ほどのバツ頭の男が目を吊り上げながら言う。

その時、窓の外―下の家々の屋根に居る安形たちがいきなり激しく動き出した。

「あつ！？」

その様子を見たほぼ全員が一斉に声を上げる。特にバツ頭は一際大声で叫んだ。

「突っ込むぞ！ 正気か！？」

「うおおおおおっ おお！」

野獣のような雄叫びを吐き出しながら、安形はその遅い大きな体と強い力を活かし、アメリカンフットボールの選手顔負けの勢いで一気に感染者たちの目の前に到達した。

「何が勝ち目があるだ！ ただの特攻じゃないか」

その後ろを愛と一緒に追いながら、呆れたように鋭が呟く。

安形の考えは実に単純明快だった。

勢いを付けた突進で感染者達を屋上や屋根の上から落とすというものだ。落ちてても二階程度だし、ミミズに強化さつれて居る状態では死にはしないだろうと思つての作戦だった。

—— 殺すよりは百倍いい！

耳に入り込んできた鋭の声に心の中で反抗しながら最初の感染者を見据える。場所は丁度デパートから三軒ほど前の屋根の上だ。

「ああああうううあうあああつ！」

感染者は空ろな目を向けるとその両腕を覆いかぶさるように安形に振り下ろした。

だが安形はそれが自身の体に触れる前に肩で相手を強打し、思いっきり吹き飛ばす。感染者はボーリングのピンよろしく屋根から落ちていった。

「あと四人！」

遅い声で気合を入れる安形。ヤの付く人達が見れば『アニキ！』と叫びたくなるような勇ましい姿だ。

次の家の屋根に飛び乗った途端、今度は二体の感染者が同時に襲いかかってきた。普通ならば二体どころか一体の狂人を退かす事も至難の技だ。しかし今の安形は助走をつけ犀のような激しい突進移動の真つ最中であり、なおかつ感染者達も屋根の上という限定され

た狭い場所にいるため、その通常時の論理は大きく外れた。

「どつりやああああ！」

大きく広げられた両腕は安形の渾身の力によって同時に左右の感染者の首を体ごと屋根から刈り取った。つい数秒前のデジャブウを見せているように落ちていく二つの人影。その様子を見た鋭は思わぬ結果に嬉しい誤算だと喜んだ。

「あと二人！」

勢いに乗った安形はそのまま残り二人も一層しようとする。これまでのことから考えるとそれは簡単に達成出来るかのように見えた。だが――

「待て安形！ 武器を持つてるぞ」

残り二人の姿を見て慌てて鋭が声を裏返す。

これまで素手で人間を襲っていた感染者たちだったが、何故か最後の二人はそれぞれ武器を構えていた。

――こんなことは見たことも聞いた事も無い。イグマ細胞に感染した生き物が道具を使用するなどとは……

鋭は冷や汗を流した。

安形の耳にその声は勿論聞こえていたが、ここまで勢いがついてしまっている状態では、感染者にたどり着く前に止まることはもう出来ない。既にかかなりの速度で全力疾走していた所為で自分から死に行くような絵図になってしまった。

「ああああおおおおああああ！」

二体の感染者はそれぞれ手に持った金属性の陶器と鉄パイプを振りかぶる。もはや避けることは不可能だ。

愛は思わず視界を両手で覆った。

――避けられない！

近付いてくる二つの凶暴な鈍器を視界に納めながら、安形は自分が超感覚者で無いことを今更ながら残念に思った。刹那に数週間前の出来事を思い出す。

「ふう、良くそんだけかわせるな。ホント、超感覚者ってのはズルイぜ」

黒服訓練室での稽古中、いつまでたつても自分の拳を直撃させる事の出来なかった截に向かつて安形は妬むように呟いた。

截の超感覚——「絶対危機回避感」は、不意打ちも正面からの攻撃も全て事前に察知することが出来るという超感覚者達の中でもかなり使い勝手のいい代物である。力はあっても技術や速さの無い安形の攻撃が当たる事が無いのは至極当然の結果だ。安形も当然それを分かっているのだがやっぱり心では納得がいかないため、よくこのような愚痴をこぼしていた。

「確かに利点はあるけど、こんなものは人間相手には大した効果は無いですよ。考えも無しに突っ込んでくる悪魔ならともかく、人間には頭脳がある。感覚だけに頼ってたら僕だって簡単にやられます」

「それでも有利には変わりないだろ？ 俺の攻撃を散々避けといてよく言うな」

「有利かどうかは時と場合によりますよ。超感覚は一つの道具に過ぎない。強みもあるし、勿論弱点もある。その弱点を巧みに利用されたら——例えばどんな感覚を持っても対処しきれません」

安形の癖んだような質問にやや苦笑いしながら截は答えた。

「それってキツネとかこの前の赤鬼のやり方ってことだろ？ 俺にそんな器用な真似が出来ると思うか？」

「まあ、確かに安形さんには敵しそうですね」

截は声を出して笑った。それを見た安形は不機嫌そうに文句を言

う。

「おい、否定しろよ。それじゃやっぱり俺にはどうしようも無いってことじゃないか」

「そんなことは無いですよ。さっきも言っただじゃないですか。超感覚者は幾ら凄い感覚を持っても所詮人間だ。ただ普通の人とは違う『性格』を持つているだけです。弱点や特徴すら理解していればどうにでもなりますよ。例えば指定制服のある学校で違う学校の制服を来ているようなもんです」

「随分分かり難い例えだな」

安形は混乱したように頭を抱えた。その様子を面白そうに眺めながら截は言葉を続ける。

「僕は結局は一番強いのは『普通の人間』だと思っています。有名な映画や漫画とかでもそうじゃないですか。普通の人間が最後は大きな役割をこなして見事に事件の決着を着ける。特別な人間はその前に劇的な死を迎えるか、主人公を守って死んでいく。人間は人間だからこそ弱くまた強い。力が無いからこそ考えそれを克服し乗り越える。だから安形さんが超感覚を持たないことは別に何の劣等感も抱く必要は無いですよ。これまでのように自分のやり方で戦えば良いんです。まあ努力することは大切ですけどね」

截は大きな曇りない目で安形を見据えながらそう言った。何かを悟っているような深みのある瞳だ。

それに対し、安形はこう返した。

「……何かお前の方が年上みたいでム力つくわ」

「だあああああつ！」

狂人たちの攻撃が体に命中する事などお構いなく、安形は力強く目の前の屋根に己の足を沈めた。当然その結果、安形の体——肩と太ももに狂人の鉄パイプと陶器が命中する。

「あああつ！？」

愛が絶望するような高い声を響かせた。

「ああうううおおおおお！」

獲物の動きが止まったことを確認し、再び攻撃を繰り出そうと腰の高さまで大きくその腕を振りかぶる二体の狂人。勝利を確信しているのか、先ほどよりもさらに振りかぶっている。安形はその動きを痛みに耐えながら何とか見逃さなかった。

——截、俺は俺のやり方でやれば良いんだよな。

「う……おおおおおおお！」

安形は強靱な足腰の筋肉を力いっぱい稼働させ、狂人たちが二撃目を繰り出すよりも早くその二体の体を両手の張り手で押し飛ばした。

大き過ぎるほど振りかぶっていた狂人たちは、ブリッチを作るように勢い良く体を後ろに仰け反らせる。

「どうおいやーっ！」

安形はそのまま左手の一体を屋根から蹴飛ばした。

——あと一匹！

勢いに乗り素早く右を振り返る。

先ほど受けた掌撃で持っていた鉄パイプを下に落としてしまった狂人は、体勢を立て直すと素手で安形に掴みかかってきた。それと同時に掴まれている安形の腕に、例の染み込むような電気が走るような感染の兆しの感覚が現れる。

「俺は凄い感覚も大した技術もないけど——体の頑丈さとその腕っ節の強さなら誰にも負けるつもりは無いぞ。例えばグマ細胞の感染者だろうがな！」

ドッパと音が聞こえてきそうな激しい投げを繰り出され、狂人は

安形によつて地面にその身を押さえつけられた。警察ドラマなどによく犯人が組み伏せられているあの格好だ。

——さあ——来い！

相手の上に跨つたまま安形は狂人の本体とも言えるミミズが自分に移ろうつとする瞬間を待つ。五秒ほど時間が経つたところに安形は狂人を掴んでいた腕を放した。そこには一匹のミミズが頭を腕にめり込ませながら蠢いている。

「消えろ！」

勢い良くそれをもう片手で握り潰し、安形はその細長い感染生物を爆ぜ潰した。先ほどまでの騒音が嘘のように辺りが静寂に包まれる。

「……終わったな」

屋根の上にいた全ての狂人が退けられたことを確認し、鋭は安堵の息を吐いた。

<第五章>内部崩壊

<第五章>内部崩壊

デパートは一階が食品店。二階が本屋。三階が雑貨屋。四階が洋服屋で五階がレストランになっている。といっても『元』の話だが、今はどの階のどこを見渡しても安物の商品一つ見つけることが出来ない。長い間放置されていた所為で、住民に荒らされ尽くしたからだ。利用できるものは利用し、金になりそうなものは全て売り払う。そんなことを繰り返されていれば、小学生でもどうなるかわかるだろう。文字通り今のこのデパートはただの廃墟でしかなかった。安形たちが五階に着くと、下の階の静けさが嘘のように多くの生存者の姿が見えた。およそ十人くらいだろうか。穴や傷だらけの服を着た住民たちが、それぞれレストランのあちらこちらで座ったり談笑したり、身を寄せ合ったりしていた。

「おお、来たか。さつきは凄かったな。上から見てたよ」

安形に気づき、魚のような大きな目をしたマリモ頭の中年の男性が寄ってくる。服装こそ他の住民と同様だったが、その顔はこの住民には珍しく髪も髭もしっかりと手入れされ、サラリーマンのような雰囲気^{なんじょうりようたろう}を纏っていた。

「俺は南城良太郎だ。君たちは？ 見たところその女性以外はこここの住民には見えないが」

魚眼を見開き、優しそうな表情で明るく問いかけてた。安形は何か男のこの表情が好きになれず、無表情で答える。

「俺は安形和也。警察の者です。家出だったこの鋭くんを探しに来てたんですが……一体何が起きているんですか？」

全て知っているにも関わらず、しらを切りそう聞いた。生存者た

ちの知識や情報を確認すると共に、自分も彼らと同じ一般人であることをこつそりと示すためだ。

「俺にも分からない。とにかく突然みんなが狂い出したんだ。——他の生存者の話から判断すると、何やらミミズみたいな生き物に体を乗っ取られたらしい」

「ミミズみたいな生き物ですか。そういえば、外に沢山いましたね」
「あれに触れると気が狂ってしまうんだ。君らは運が良かったな。よくここまで感染しなかったよ」

南城は愛嬌のある笑顔を浮かべながら、安形の肩を叩いた。

「さあ、こつちに来てくれ。僅かだが食い物もある。疲れただろ？」
「あ、どうも」

安形は南城の後に続いて奥のテーブルに足を進めた。その途中不意に袖を引つ張られ、首を後ろに傾けると愛の顔が間近に見えた。何か言いたそうにこちらを見ている。

「何だ？」

眉を細め、小声で聞いた。

「あの男には気をつけて。あいつは……マジでヤバイから」

「ん？　どういう意味だ？」

安形は聞き返そうとした。だが、既に部屋の奥のテーブルに着いた南城が相変わらず笑顔で安形に呼びかけたため、愛は急いで顔を安形から離れた。

「ここにあるものは自由に食べて構わない。なに、どうせ缶詰だ、遠慮しなくていい。俺は下の様子を見に行くから、何かあったら呼んでくれ」

「ありがとうございます」

安形は嬉しそうな顔を作り、礼を言った。

完全に南城の姿が見えなくなると、食べ物には全く手をつけずにさっきの言葉の真意を確かめようと愛を見た。周囲の様子を確認しながら真面目な顔で聞く。

「愛さん、さっきの話……」

「鋭ーっ！」

安形の言葉をかき消すように、数歩離れた位置から若々しい男の声が聞こえた。三日前、鋭がここに来た時に仲良くなったヤンキー、さくまふみと佐久間文人だ。

「へい！ 鋭、へい！ 鋭！」

意味の分からない叫び声を上げながら、無言で椅子に座っていた鋭の頭をバシバシと叩く佐久間。鋭はうざったそうにその腕を振り払った。

「分かったから止める。鬱陶しい」

「ああ？ 鬱陶しいだ？ この野郎、お前もう戻らないとか言って朝ここを出て行ったのに、何で戻ってきてんだよ」

「好きで戻ってきたんじゃない。ただの案内だ」

「またまた、言いわけしちやって〜！」

佐久間はぐりぐりと鋭の頭を拳で締め付けた。

「止める！ はあ……何か変わったことはあったか？」

「変わったこと？ おう、在ったぜ！ お前が戻ってきたことだ」

鋭は遠くを見つめた。

「分かったよ、たつく、ジョークが通じねえ奴だな。まあ、一つ在ったぜ。お前らの前に別の生存者がここに逃げ込んで来たんだ。それも一人で」

「一人で？ どんな奴なんだ？」

一人という所に興味を持ち、安形が初めて会話に入った。たけただただのふ

「武田忠信っていう冴えねえ男だよ。一人で脇道をふらふらしてたところを土橋のオッサンがここから見つけて、裏口から入れたんだ。今四階に居るぜ」

「一人でふらふらか、度胸があるのか何と言うか」

安形は武田という男の話を聞いて苦笑いした。

「——あ、いっけねえ、俺南城さんに三階から武器になりそうなものを取ってくるようにって、言われてたんだった。じゃあな、鋭！ それと、ゴツッい兄さんと綺麗な姐さん」

慌てて走り去っていく佐久間。

「変わった男だな。昔似たような坊主頭の奴を見たことがあるが……ああいう男は結構生き残れるぞ」

その後ろ姿を眺めながら、考えげに安形は呟いた。

「安形さん」

凜々しく引き締まった眉を僅かに寄せて、愛が真剣な眼差しを向けてくる。安形はすぐにさっきの話の事だろうと察した。

「分かってるよ。南城——の事だろ？ あいつの何がどうヤバいんだ？」

「南城は……この夢遊町で闇取引をしている商人なの。主に生きた人間の売買をね」

「人身売買か。そうか——さっきから妙だとは思っていたが、ここに居る生存者たちが妙にあいつに丁寧な口調で話しているのはそれが理由みたいだな。道理で偉そうにしているわけだ」

スラム街なら簡単に人身売買を行える。当然それは住民にとって大きな脅威であり、恐怖の対象となったはずだ。安形は南城に感じていた嫌悪感の理由が理解でき、腫れ物が取れたようにすっきりした顔になった。

「そんな甘いものじゃ無いわよ。南城がただのチンピラならみんなで協力してとづくに袋にしているはずでしょ？ 曲がりなりにもここはスラム街、弱肉強食の世界なんだから。みんながあいつを恐れている理由はそんな単純な理由じゃない」

「じゃあ、何なんだよ？」

「権力だ」

鋭が愛よりも先に答えた。いつの間にかもぐもぐと缶詰の牛肉を口の中で噛み締めている。

「裏の人脈、金、情報網、自由に操れる部下……絶対的な統制力をあいつは所持している。あいつはこの町ではある意味王様なんだよ。逆らったり、裏切ろうと計画すれば、すぐに気づかれてたちどころにあいつの手の者に拉致られる。逆らう事なんて出来っこない。い

や、出来ないようなシステムがいつの間にか作られていた。住民は常にお互いを見張りあい、何か妙な動きがあれば金目当てに報告する。そんな状況が日常茶飯事なんだからな」

「何でそこまで南城は力を持っているんだ？ たかが人身売買で、おかしくないか？」

幾らスラム街の孤立した空間と言えども、この日本でそこまでの力や商売を可能にすることは多くの制約と危険が伴うはずだ。納得できないように安形は太い腕を組んだ。

その質問を予期していたように愛が説明する。

「南城には強力な後ろ盾が居るのよ。誰も姿を見たことは無いし、私も名前を南城がチンピラ仲間と話している時に偶然立ち聞きした程度だから確かじゃないけど……」

「後ろ盾？」

はいまなぶ

「白居学という資産家よ。数十年前——まだスラム街になる前のこころ一体を支配していた元財団の代表。今は政治家になって都会の方に移ったって話だけど、どうだかね」

——白居？ どこかで聞いた事があるような……

安形はその名前に妙な引っかけりを感じ、首をかしげた。

「じゃあ、その白居が南城に金を流してここで好き勝手やらせているんだな。元財団関係者で政治家なら確かにそれぐらいは出来そうだ」

「まあ、町がこうなった今、その権力も十分に働きそうにはない。部下も二、三人しか居ないようだしな」

鋭が知った顔で言った。

「部下の顔を知ってるって、三日前にここに着たばかりなのにやけに詳しいな鋭」

南城が人前で平然と部下と話すとは思えない。少し頭が回る人間なら上手く生存者たちの中に潜ませるはずだ。その方が色々と住民の情報や会話を知る事が出来る。

「別に……三日も居ればそれくらい気がつけるさ」

鋭は急に声の調子を変えた。手に持っていた牛肉の缶詰をがっつくように口の中にかき込む。

——やっぱり何か隠してるみたいだな。

安形の中で鋭に対する疑惑の感情が大きくなった。

自分に害を与えるようには見えないが、万が一のためにある程度鋭にも用心していた方がいいかもしれないと考える。勿論ほんの僅かな疑惑でしか無いのだが。

「さ、食べましょう」

愛がこの奇妙な空気を打ち消すように明るい声で二人に声を掛けた。

「ああ、そうだな」

自分の警戒心を悟られないように安形も明るい声で応じる。目の前に積んであった缶詰を一つ取り、蓋を開け中身を確認することなく飲むように口に含んだ。とにかく今は気を張っていても仕様が無い。これからへりに向けて狂人の蔓延る夢遊町を歩き回らないといけないのだ。食べれる時に食べなくては。

舌先が缶の中身に触れた瞬間、安形は顔をしかめた。

「苦っ!？」

ゴーヤの塊だった。

「よお、武田っち！ 元気になったか？」

今この町で起きている事を知っているのか疑いたくなるような高いテンションで、佐久間はソファーに寝ている武田に声を掛けた。いくら片っ端から商品が売られたとはいえ、一応は元洋服屋だ。質は悪いがそれなりに服は残っている。武田はこの四階で血に塗れた自分の服を全て着替え、気分を落ち着かせようとソファーに横になった途端、佐久間の張りのある声を聞き、無理やり起こされた。「ああ、元氣だよ。おかげで眠氣も吹き飛んだし」

皮肉を込めて言う。

「そうか、それなら良かった。新しい生存者が増えたぜ。安形とかいう黒い服を着たでっかい男だ。上の階にいるから後で見てみな！」
「どうやら皮肉は伝わらなかったらしい。佐久間は表情を輝かせ、嬉しそうに上を指した。」

——さっき来たばかりの俺に新しいも古いも分かるわけ無いだろ……。

溜息をつき、隈の出来た目を擦る武田。

「じゃあ、俺行くな。三階に包丁とか果物ナイフとか僅かに残ってるらしいから、それを取りに行かないといけねえんだ。また後でな！」

武田の様子に全く気がつく様子も無く爽やかに笑顔を振りまくと、佐久間はスキップをしそうな軽やかな足取りでソファーから離れていった。

「はあ……俺は何をしてるんだか」

視線を下に落とし重い息を吐く武田。人より倍は長い前髪を掻き上げ、呆けたように灰色の天井を見つめる。

この地獄から脱出し、最愛の恋人である木枝を弔い、人生を取り戻す。そのために人殺しをしてまで一人で逃げてきた。

だが、幾ら頑張っても狂人たちの間を抜ける事が出来ず、こうしてまたドブネズミのように怯えて隠れている。

「クククク……」

己の不甲斐なさと、滑稽さが可笑しくなっていて涙を流しながら小さ

く笑った。人に見られないようにソファに深く身を沈め姿を隠す。長い前髪を指で撫でつけこのまま自殺しようかと考えた。手に持っていた万能ツールのナイフを手首に押し当て、そこで動きを止める。後は腕を引けばすぐ楽になるのだが、どうしてもその最後の一线を越えることが出来ない。

——何が木枝の弔いだ……結局俺もただ死にたくないだけじゃないか。

生への願望を、人殺しの罪を木枝の所為にして正当化してただけであることに気づき、呆れる。武田はナイフをしまうと両手で顔を覆い尽くした。

「……………のですか？」

背後十メートルほど後ろにある階段から人の声が聞こえてきた。こんなグシャグシャの顔を見られたくはない。武田は目を拭い、ソファの後ろに回ると、そこにしゃがみ込んだ。合わせるように下の階から二人の男が上ってくる。

「間違いない。あの安形とか言う男は何か特殊な訓練を受けている人間だ。一般人には分からないだろうが、俺の目はごまかせない。足の運び方、視線の動き、どれをとっても常に急な攻撃に対応できるように神経が研ぎ澄まされている」

南城の声だ。

「町がこうなってしまった事と関係あるんですかね？」

部下らしきパンチパーマの男が立ち止まり小声で聞く。しかし周囲が静かな所為か音が響いてしまいほぼ筒抜けだった。

「さあな、でもまあ無関係でもなさそうだ。さっきあいつが狂人を退けたのを見ただろ。あれはどう見てもあの手の化物とやりなれている人間の動きだった。白居候の部下か、政府の調査員か、それとも…………」

「テロリストとか？」

「ああ、一ヶ月前に起きた水憐島、紀行園の大事件の例もある。もしかしたら、この夢遊町をこんな状態にした張本人かもしれないな」

「そうだったらさつさと殺してやりましょう。御蔭で俺らは商売上ったりなんだ。白居候とも連絡が着かない状態なんですし」

「まあ待て。あいつは使える。化物とやりなれていると言う事は、逃げ方や対応策も知っているという事だ。上手く利用して脱出の手伝いをさせよう」

「協力するでしょうか？」

パンチパーマの男は不安げに聞いた。上手くいくと思っていないのか心配そうに南城の顔を見上げる。しかし男の態度とは反対に、南城は魚眼を盛大に見開いてニヤリと笑った。

「させるさ」

南城らが五階に消えると、武田はソファアの影から体を出し、立ち上がった。親指を顎に当て眉間に深い一本の縦筋を刻みながら、げっそりした顔で今聞いたばかりの話について考える。

——ここから脱出するだと？ それもこんな大人数で？ 無謀すぎる……！

立てこもった場所からの脱出。それがどれほど難しいか武田は身をもって知っている。一歩間違え先に狂人に気づかれれば、全滅という最悪の結果を招いてしまう。木枝が死んだ瞬間を反射的に頭の中で再生し、吐き気を覚えた。

「……止めないと、また多くの人間が死ぬ。折角の安全場所が危険にさらされる……」

これまで他人の理不尽な考えで恋人を失い、自分の命を危険にさらされ、死の一步真横まで追い詰められた経験から、武田は自分の考えが一番正しい——自分が一番まとまな判断をしていると思う込むようになっていた。

「安形、とか言っただけ」

南城らの会話に出てきた名前を思い出す。脱出のキーマンであり、特殊な訓練を受けたらしい怪しい人間。その名前を心の中で何度も唱えるながら、武田は一つの結論に辿りついた。

「殺すしかない」

紺色の上着の中に手をつ込み、万能ツールのナイフを固く握り締める。そして、ゆっくりと上の階への階段へ向かった。だが足を一段目に伸ばす前に不安がよぎり動きを止める。

「訓練を受けた、急な攻撃に対応出来るとか言っていたな。俺が不意打ちしても……成功する可能性は低いかな」

自分の身体能力は良く知っている。武田は困った顔で頭をかきながら、何と無く周囲を一望した。特に意味は無い。ただ無意識の中にそうしただけだ。

「ん？」

ふと何か動くものが部屋の奥に見えた。階段横の窓際まで移動すると、武田はまじまじとそれを見た。どうやってここまで上ってきたのか、うねうねと蠢くミミズが三匹窓の外側に引っ付いている。

頭の中で何かが閃いた。昔ニュースで見たES細胞の発明者が記者会見でしていた様子を真似て、嬉しそうに腕を組み頷く。そして足元に転がっていた空のビール瓶を拾うと、窓開け、同じように落ちていたボールペンでミミズ達をその中へと落とす。

これなら何の危険も無く上手く事を運べるだろう。

「俺が、みんなを助けるんだ」

武田は狂気を含んだ醜い笑みを浮かべ、満足げに呟いた。

夢遊町住宅区の中央。悪臭を撒き散らし、ハエや鼠、ゴキブリの蔓延るこの場所は、ゴミ捨て場と言うよりは再利用や処分が出来ないゴミを集めて作られる埋立地に似ていた。

住宅街のど真ん中に普通、こんな場所は無い。ここの始まりは一軒のゴミ屋敷だった。生きるためにゴミを集めることはスラム街ではよくある事だが、その家は度が超えていた。全く売れそうに無い生活に使えるそうにない生ゴミや使い捨ての雑巾など、どうでもいい物まで集めていたのだ。いつしか町の住民はここに自分たちのゴミを勝手に捨てるようになっていった。家の主も全くそれを嫌がることが無かったため、次第にゴミはここに捨てるのがさも当然であるかのような暗黙のルールが生まれ、家の主が死んでも多くの人間が行方を続けた。夢遊町近隣の企業や会社、密輸業者までも利用するほどで、今では『夢遊町のトイレ』と呼ばれ、ひそかに名を馳せたスポットになっている。

「こんな臭せー場所に本当に隠れてんのかよ」

ハリネズミのような髪型の黒服メンバー、本田が鼻を押さえながら文句を垂れる。

「可能性は高い。人が寄り付き難いし、何より隠れる場所が豊富だ。俺だったらここに隠れる」

短髪と揉み上げ、髭が一周するように顔を囲んでいる男、曽根が機械的に言った。悪臭など全く気にする素振りもない。

「お前鼻おかしいんじゃないのか？ こんな所に隠れてたら三十分で頭がイカれるぜ。自分もゴミになっちまったって錯覚してな」

「これだけ広いと、探している間に逃げられてしまう。ナルキッソスを使おう」

「賛成だが、媒体はどうするんだよ。人なんか殆ど見えないぞ？」

「有名な企業がゴミを捨てに来るんだ。住民がそれを素通りするわけが無い。使えるようなものを探して売ろうとするはず。必ず人は何

人も居るさ。探し物をして穴を掘っている最中なのか、身を屈めているのか……そもそもこれだけ山なりの多い場所では数メートル先の景色も良く見えないだろ」

「分かったよ。ばら撒けばいいんだろ？　ばら撒けば……」

本田は左手に持っていたクーラーボックスを下に置き、蓋を丁寧に開けた。

「三分後に散布するようにセツトと。これでよし！　さあ、とつととズラかろうぜ」

「うむ。一時感染経路である空気感染は効果時間が短い、範囲が広いからな。急いで車まで戻ろう」

早足で二人は歩き出した。

「——そういえば、さっき途中でデパートの廃墟の前に無数の狂人が集まっている姿が見えた。十字路を横切る時に遠くに見えたただだから確信は無いけど……一度見に行ってみるか？　念のためにな」

「感染者が集まるのは新鮮な肉の気配を察知した時だけだ。——鋭や『身内』かは分からないが、生存者は居るかもしれない。行ってみる価値はある」

「よし、決まりだな。ならとつとと行こうぜ。早くしないと黒村の旦那に先を越されちまう。今頃来たのかつてな」

本田は黒村の鋭い目つきを真似て口を突き出しながらそう言った。道無き道の先に道路と曽根の愛車、ジボレーが見えてくる。

「——お、作動したぜ」

助手席に座り、車が動き出した直後、夢遊町のトイレから一飛沫の霧の柱が見えた。それは高く高く上り、燦々と輝く太陽の光を命一杯受けて、美しい虹を作った。

「そろそろ行こうか」

安形はテーブルに手を付き、椅子から腰を浮かせた。

ここに来た目的である愛の保護も一応済んだし、自身の任務である鋭の脱出補助を流石に再開しなくてはならない。

「本当に行っちゃうの？」

僅かとはいえ、生死を共にした仲だ。愛はちよつと寂しそうな顔で安形と鋭を交互に見た。

「ああ、それが目的だからな。こればかりはどうしようもない。なに、鋭を送ったらまたここに戻ってくるさ」

安形は愛を安心させるように優しく微笑んだ。

「南城に見つかったら厄介だ。早く行こう」

鋭く自然にレストラン内の他の人間の様子を見ながら、鋭は緊張感ある声で安形を促す。

「そう急かすなよ。分かつてる」

最後に愛に目でお別れを言うと、安形は歩き出した。

揺ぎ無い足取りで部屋の正面の端を真っ直ぐに目指す。手すりが見え、太陽の届かない暗に覆われた階段が現れる。再び地獄の中に踏み入れる覚悟を決め、一気に降りていこうとした。

「おや、何処にいくんだ？」

真下から何の前触れも無く南城とパンチパーマの男が笑顔のまま現れた。その気配の無さに安形は驚き咄嗟に身構えてしまう。

「おいおい、俺が何をした？ その空手家のような構えを解いてくれ」

大げさに両腕を上げる南城。安形は「しまった」と思いながら慌てて手を下ろした。場を繕う様に鋭が口を開く。『感覚』で数メートル前から南城たちの存在に気がついていたのか、対処がかなり早

かった。

「ちよつと狂人の様子を見に行こうと思ってたから、緊張していたんだ。ここもいつまで持つか分からないからな。定期的に確認やバリケードの点検をした方がいい。ちよつと下に行って二人で見てくる」

「ああ、心配するな。それなら交代でもうやってるさ。君らはまだ来たばかりなんだ。ゆっくり休んでくれ」

「いや、休んでいても何だか落ち着かない。気晴らしのつもりで行かせてくれ」

鋭は引き下がることなく言葉を続けた。ここまで言えば大抵の間ならば譲るはずだ。だが南城は違った。

「いいから、いいから。丁度君達に話したいことがあったんだ。聞いてくれ」

人懐こい笑顔を崩さず、優しそうに鋭の背に手を置く。大した力は込められて居なかったが、その手が絶対に逃がさないぞと言っている様で、鋭はそれ以上反抗出来なかった。安形を見ると、仕方が無いというように肩を竦めている。ここで南城たちを気絶させて出て行くのは簡単だが、そんなことをすれば一緒に逃げてきた愛があとでどんな目に合わされるか分からない。鋭はとうとう諦め、それ以上何も言わなかった。満足げに微笑み、南城は脱出について話そうと口を開く。

だが言葉を発する前に足音が聞こえ、階段の下から紺色のジャンパーにジーパン姿の、前髪のいやに長い男が上ってきた。武田だ。

「おお、武田くん。もう気分は治ったのか？」

南城は切り出そうとした提案を止められ、一瞬不機嫌そうな顔を作ったが、すぐに表情を戻し、武田を振り返った。

「お蔭様で良くなりました。ありがとう御座います。少し上で食事を取らせて下さい。吐き気が収まったら何だか腹が減ってしまつて」
「ああ、構わない。好きなだけ食ってくれ」

南城は終始笑顔で応じると、武田を奥の席へとパンチパーマの男

に送らせた。何故か武田はこちらをじつと見つめていたが、安形はあまり気にしなかった。

——あれがたった一人で逃げ込んできたとか言う男か。随分華奢な体格だったな。

安形は武田という名前を聞き、先ほどの佐久間の言葉を思い起す。

「さてと、何処まで話したっけな。いや、まだ話し始めてもなかったか。ハハハハ」

声を出して笑い、こちらに向き直る南城。若干不機嫌そうなのは会話を中断させられたからだろうか。

大きく息を吸い込むと、今度こそはと口を開け念入りに考えた言葉の口に出そうとした。

しかし、それはまたしても妨害された。

「きやあああああああつ!？」

生存者のものと思われる女性の悲鳴が響き渡った。それもデパートの外ではなくレストランの内部から。

「何だ?」

ガラスでも割ったのかといった態度で部屋の奥を見つめる南城。安全を保っていたこのデパートで狂人がいきなり、しかも最高階である五階に出現するなど考えられない。当然の反応といえば当然だ。「安形、狂人が居るぞ!」

感覚で状況を理解した鋭が、南城とは正反対に緊張した声を出した。

「何だと!？」——そんな馬鹿な! さっきまで俺たちあつちに座ってたんだぞ!？」

流石の安形も状況が理解出来ず心臓を大きく跳ね上がらせる。

「さっき武田を送って言ったパンチパーマの男だ。あいつが感染している」

「と、とにかく何とかするぞ、愛さんや他の生存者が危ない!」

安形は大急ぎで走り出した。

「あああああああああ！」

奇声を上げながら狂人は逃げ惑う人々を追いかけた。皆一様に顔を青ざめ、階段や部屋の奥を目掛けて蜘蛛の子を散らすように駆けて行く。

狂人はその最後尾に居た、側面の髪の毛を頭上クロスさせている男に追いつくと、何のためらいも無く首に噛み付いた。

「ぎゃあああああつ!？」

神経を痛みの信号が駆け巡り思考を麻痺させる。男はムンクの叫びのような表情で叫ぶと、大量の血を吐き出し体を痙攣させ、狂人の口に首を啜えられたまま体をピクピクと動かすだけの肉塊となった。

「止める！」

逆方向に雪崩のように去っていく人垣を押し分けながら、安形は狂人の前に躍り出る。同時に黒柄ナイフを抜き、威圧的に構えた。

「た、助けてくれ！」

狂人の右横から声が聞こえた。顔を前に向けたまま視線を動かすと、武田が腰を床に付き子犬のように震えていた。

——逃げ遅れたのか!？

武田は狂人とかかなり近い場所に居る。下手に刺激すればあつと言う間に殺されかねない。安形は狂人の注意が武田に向かないように視線をその狂人と交差させたまま、距離を潰していった。

「いいか、俺がこれからあいつの動きを止める。その際に階段に全力で走るんだ」

「わ、分かった」

安形の命令するような口調にどもりながら武田は答えた。
「今だ！」

大声を放ち、一気に間合いを積み狂人の胸をナイフの柄で強打する。狂人は悶えつつも安形の服を掴み、押し倒そうとした。

「あああああああああ！」

——くそつ、俺は相撲取りじゃないぞ！

安形は足を踏ん張り何とか体を支える。狂人の力は悪魔ほどではないといえ、人間よりは強力であることに変わりはない。安形と狂人はほぼ互角の押し合いを繰り返した。

「うぐっ!？」

突然首筋に何か生暖かいものが触れた。覚えのある感触だ。浸透してくるような、電気が走るような――

「あんたが安形だろ？ 悪いがあんたが居ると南城が脱出したがるんだ。ここで死んでくれ」

ついさっき目の前で怯えていた男の声が真後ろから聞こえる。

――な、まさか――!？

最悪の状況が頭を過ぎる。だが、その考えはすぐに遠のいていった。消しゴムで消し去ったように頭の中が真っ白になる。

変わりに猛烈な殺意と、排除感、憎しみを覚え、体中に得体のしれない力が沸き起こっていく。

無意識の中に安形は声を出していた。

感情の無い、冷たい、ただ吐き出しているだけのような声を。

「ああああああああああ……!」

<第六章>四面楚歌

<第六章>四面楚歌

「何事だ!？」

流れ込んでくる人の雪崩を見た南城は、あからさまに動揺し素っ頓狂な声を上げた。

階段をスーパースポールのように跳ね降りていく生存者たちの中から一人の男の襟を掴み、動きを封じる。そしてもはや愛嬌があるとは決して言えないような凄みのある視線をその男に向け命令した。

男は濁った二つの大きな瞳と巨大なマリモ頭に気おされ、急いで簡潔な説明をする。

「きよ、狂人が出やがった! 離してくれっ、こ、殺される」

「狂人だと!? 何故突然……!？」

驚きに指の力が緩んだ。その隙に襟を掴まれていた男は腕から抜け出し、他の生存者の後を追いつつ大慌てで階段を駆け下りていった。

——あの野郎、やりやがった——!

感覚で安形が感染するまでの一部始終を見ていた鋭は、武田の策と行動に感心すると共に、猛烈な怒りを覚えた。拳を握り締め端正な顔の中心にある二つの双眼を真っすぐに廊下の先、レストランの奥へと差し込ませる。

殆どの生存者が下の階に逃げたかレストランの隅に身を押し付けていたため、感覚を利用しなくてもはつきりと安形の姿を目視出来た。

だらしなく口を大きく開け、黒柄ナイフを振り回しながら乾いた雄叫びを響かせている。

「くそ、よりによってあの男が感染してしまったか。予定外だが仕

方が無い……」

鋭が安形の下へと走り出そうとしたとき、真横に立っていた南城が自分の懷から黒い鉄の筒を取り出しそう呟くのが聞こえた。

「銃——！？」

思わず声に出してしまう。

「お前はここの住民なら俺のこと知っているだろ。こんなもの簡単に手に入るさ、金はかさんだがな」

南城はその拳銃クーガーを肩の高さに構え、ピッタリと安形に照準を合わせた。

『今』安形に死なれるのは不味い——俺の計画が破綻する……！
「待て、ミミズを除去すればあいつは元の人間に戻る。俺が何とかするから撃つな」

鋭は冷や汗を流し、銃口の前に立ちふさがった。

「お前が？ どうやって？」

完全にキヤラを壊し本来の冷酷な『人売り』の口調で、馬鹿にするように南城は聞く。

「いいからやらせろ！ こっちにあいつが来れば撃てばいいだろ。それまでは俺に任せてくれ」

「今殺す方が確実だ」

銃声が空間を割り、耳を突き抜けた。南城がいきなり引き金を引いたのだ。心臓が飛び跳ね、思わず鋭は首を安形の方へと向ける。レストランの奥でその音と共に丁度中年の女性に噛み付こうとしていたパンチパーマの男が崩れ落ちた。

「あと一匹！」

南城は再び安形へと銃口の向きを戻す。

「——つやめろ！」

「がつ——！！？」

鋭は反射的に片腕を突き出した。その途端、まるでキングコングか何かに投げ飛ばされたように南城は勢い良く壁に体を強打した。

「お、お前！？」

体に走る衝撃と痛み、化物じみた鋭の怪力に驚きながら、南城は目を回す。脳震盪でも起こしたらしい。

鋭は床に転がった銃を階段の隙間から一階に蹴落とすと、フンつと鼻を鳴らし、安形の居る部屋の奥へと飛び出した。

一方、安形を感染させ、南城に銃で撃たせるという作戦を考えていた武田は、階段の方から現れた人物が自分よりも年下の普通の住民の男だったことに肩を落とした。

安形の感染はここに来たばかりの時に、おしゃべりな佐久間から南城が銃を持っているということを聞いた上での策だったのだが、見事に失敗してしまったようだ。これでは眼前に迫り来る安形から逃げる術はない。すぐにあの黒いナイフの餌食になってしまうだろう。

「あああああああ……」

起伏の無い声のまま、安形は武田の腹を蹴飛ばし床に転がした。

「ぐうつ!? ——っそ……」

武田は腸を中から何かが飛び出してきそうな激しい痛みに襲われながらも、何とか仰向けのまま後退する。しかし、すぐに背後は壁になり追い詰められた。

「ああああ……あああ……」

安形は大きく腕を振りかぶった。

対イグマ感染者用の特殊ナイフである黒柄ナイフの凄まじい刃を受ければ、武田など骨まで簡単に切断されてしまう。この一撃を受けければ軽傷で済まないことは目に見えていた。

「止める!」

突如何者が背後から安形にタックルを食らわした。死角からの攻撃に対処出来ず、頭から床にキスをする安形。

武田が顔を上げると、それは先ほどここに駆け込んできた若い住民らしき男だった。確か、安形と行動を共にしていた人物だ。

「邪魔だ——消えろ」

その男——鋭は氷のような顔で武田を一瞥すると、神経を張り詰

めさせた様子で安形に向き直った。

——何のつもりだ？ 俺を助けに来たのか？

一瞬武田は鋭の行動に疑問と呆れを覚える。だが、すぐに別の考えが浮かび、ズル賢く頭を回転させた。

こいつはこの安形とかいう男の仲間だ。きっと同じように何かの訓練を受けている人間なのかもしれない。あとあと邪魔になる前にこいつも……流石にこれ以上南城も黙ってはいないはずだし。

ちらりと周りを見ても、レストラン内に残っている生存者は皆一様に壁に体を摺り寄せ、目をつぶり神頼みしている。バレることは無さそうだ。武田は鋭に気づかれないようにこっそりと懐からビール瓶を取り出した。

「……あああああ？」

安形は何かを感じ取ったらしく、不思議がるように鋭の顔をじっと見つめた。警戒しているのか襲おうとはせずに距離を取ったまま固まっている。その隙に鋭はゆっくりと足を動かした。

——今だ！

鋭の注意が完全に自分から反れたと思った瞬間、武田は瓶からミズを掴み鋭の首の後ろに押し付けた。勿論自分の手は袖で覆っているから感染の心配は無い。

「——邪魔だつて言つてんだろ」

しかし、鋭は全く動揺することも驚く事も無く、前を向いたまま武田に背面蹴りを繰り出し、おもっいきり吹き飛ばした。

「がつ！？」

驚愕の表情を浮かべながら武田は壁に背を強く打ち付けた。いくら感染に十秒の時間が掛かり、先ほどの安形と違って体の自由があるとはいえ、異常なほどに鋭の行動は冷静で余裕がある。この鋭の行動は武田にとって予想の範囲を優に超えていた。まるで自分の行動が見えていた、安形に負けるわけが無い確信しているような態度だ。

「俺を助けるんじゃないかったのか安形？」

何事も無かったかのように鋭は安形と視線を交えた。それを合図に安形はナイフを暴力的に突き出す。

感染した安形の筋力は尋常ではなく、まともに受け止めることは普通の人間には無理だ。やはり鋭も攻撃を避けることに意識を集中させた。

体に染み付いた経験からか、記憶の残像からか、覚束ない動きではあるものの安形の突きや斬撃は全て寸分の狂いもなく見事に急所を狙ってくる。鋭はその正確さに舌を巻いた。

銀色の軌跡が目をチカチカさせ、体のあちらこちらに無数の線を刻んでいく。それは流れる雲のように不確かで、稲妻のように素早く鋭い攻撃だった。

どう見ても劣勢で追い詰められている状態なのだが、鋭の表情は先ほど度何一つ変わらず、奇妙なほど冷静さを保っていた。

——感染した状態でこの動き、さすが黒服つてとこか。

改めて安形の力量を確認し、感心する。次第に避けることも難しくなってきたのか、段々と体につけられる線の量も深く、多くなっている。

「む？」

ふと感覚が安形の背後の方へ何かの動きを感じ取った。横薙ぎされた一撃をかわした際にその方向を盗み見る。

「……大した根性だ」

鋭はこちらに向かってくる人物の顔を見て咄嗟にそう口ずさんだ。それは稲城愛だった。OLのような真っ直ぐに整えられた肩まである髪を左右に振り乱し、緊張の所為か目を充血させながらパイプ椅子を掲げ走ってくる。突然の狂人出現に咄嗟に壁際に逃げたものの、鋭のピンチと安形の感染に気がつき戻ってきたようだ。

愛は鋭に注意を取られている安形の真後ろに到着すると、問答無用でパイプ椅子を振り下ろした。「ドカツ」と痛々しい音が響き、安形の腰が僅かに落ちる。直後に鋭は上段蹴りを繰り出し、黒柄ナイフを安形の手から叩き落とした。

「今だ！」

鋭は組み伏せようと両腕を安形の肩に乗せた。だが、その瞬間後ろから誰かに引つ張られ直ぐに離してしまった。

「……つおおお……！」

地獄の住民のようなおぞましい表情を浮かべた武田が、必死の形相で鋭の腰に抱きついている。

「このつ、離せ！」

肘で武田の腹を強打し、鋭は無理やり体を離れた。もんどりうつように崩れ落ちる武田。

「はあ、はあ………ん！？」

再び前に向き直った途端、鋭は安形の太い右腕に片手で掴まれると同時に一気に投げ飛ばされた。背中から後ろのガラスを突き抜け、真っ直ぐにデパートの外に飛び出す。そして、五階という高さからその体を地面の上に無抵抗のまま明け渡した。

「グシャリ」という音が道路に響く。

「えっ、嘘——ちよっ………！？」

予想だにしなかった突然の仲間の死に頭が付いていかない。愛はパイプ椅子を抱えたまま動きを止めた。その間に安形は黒柄ナイフを拾い、無感情で愛に向かって突き出した。

「きゃあ！？」

愛は咄嗟にパイプ椅子で防いだものの、突き出された力とナイフの切れ味の所為で僅かに椅子を貫通した刃の先が腰を掠めた。椅子を安形に投げ飛ばし距離を取りながらそこを見ると、ジワリと赤く滲み出している。

「痛い——！」

顔をしかめ、片手で傷を押さえた。

じりじりと安形が近付いてくる。その光景はさながら鎌を構えた死神だ。あの穏やかでどこか面倒そうな、優しそうな安形の顔は影も形も見えない。あるのはただ狂った元人間の顔のみ。

愛は恐怖でしゃがみ込んでしまった。

一步一步、ワザとゆっくり歩いているのかと疑いを持つほどの長い時間の後に、安形が目の前に立った。左腕で愛の裾を掴み、持ち上げる。

愛は喉を圧迫され、頭に血が溜まるのを感じた。盛大に咳を爆発させたかったが、掴まれているためどうにもならない。ただ苦しさだけが募っていく。

——私、死ぬんだ……！

そう思うことしか出来なかった。

「どりゃっああつしゃい！」

良く分からない雄叫びと共に、何者かが安形に体当たりした。手が裾から外れ、愛の首が自由になる。

「げほっ、げほっ——さ、佐久間！」

愛は息も絶え絶えに目の前の男を見上げた。だぶだぶのトレーナーと、だぶだぶのズボン穿いた若者、佐久間文人だ。騒ぎを聞いて下の階から上がってきたのだろうか。

「姉御、今のうちに逃げるんだ、ここは俺が何とかする！」

漫画の中で多様されるような臭いセリフを噛みながら吐き、佐久間は両腕にそれぞれ鉄パイプのようなものを握り締めた。気のせいか噛んだように聞こえた。

——さっきは姐さんって言ってたのに何で姉御？

どうでもいい突込みが浮かんだが、場違いなので愛はあえて聞かなかった。

「あんた一人じゃ無理よ！ それに安形さんをこの状態で放って置けない」

壁に手を付いて立ち上がり、佐久間の横に並ぶ。

「放って置けないって、こんな奴どうやって元に戻すんだよ。俺にはそんな余裕なんかねえぜ？」

安形の発する捕食者の雰囲気におおされた様子で、佐久間は苦笑

いた。

「だったら逃げればいいでしょ。私はやるわよ」

「――姉御を置いて逃げられるわけねーだろ！」

佐久間が言い終わると同時に安形は飛び出した。体全体を一つの弾丸のように押し出し、獲物の内臓を潰そうとする。

「ひゃああああ！？」

佐久間は女性のような高い悲鳴を上げながら片方の鉄パイプを投げ捨て、真横に飛びのけた。数秒前まで彼が居た場所の後ろの壁は、安形の肩が食い込み小さなクレーターを作っている。

「じよ、冗談じゃないぜ」

その威力にゾツとして後ずさった。

「ちよつと、何で武器を投げ捨てんのよ！」

呆れたように怒鳴りながら鉄パイプを拾うと、愛は安形の膝裏にそれを打ち込もうとした。しかし当然安形はそれをあつさりとかわし、強烈な蹴りを放った。素人が訓練をつんだ、しかも感染で強化された人間の動きに反応するのは至難の技だ。先ほどナイフが掠った場所をもろに押され、愛はレストランの中心まで吹き飛んだ。

「っ……ああああ……！」

激しい痛みに胃の中の物を吐き出し、天と地が反転する。とうとう愛は動けなくなった。

「姉御おおお！？」

急いで駆け寄る佐久間。メンタルが弱いのかその目は何もしていない、何も食らっていないにも関わらず湿っている。

「姉御おおおおお！」

何故か再び叫んだ。

「……あああああ……」

安形は先ほどと同じようにゆっくりと近付いてくる。愛は今度こそ負けを悟った。

「や、止める！ 姉御に手を出すな」

佐久間は震える足を大きく広げ、愛と安形の間に立った。しかし

安形がナイフを持ち上げると『ひっ』と短く叫んで縮こまった。

階段の真横に存在感を誇らしげに振りまいている、真っ黒な鉄の塊を毛深い手が掴んだ。その塊、銃を握り締め、南城は白濁したような目を上に向ける。

この一階から見えるわけが無いのだが、まるでどういう状態になっているか予想が付いているらしく、嘲るように歪んだ笑みをこぼした。

「銃を捨てるなんて馬鹿なことを……勝手に戦って勝手に死んでくれ。こつも簡単にあの男が感染するとはな。つたつく、期待はずれも甚だしい」

利用しようと思っていた人間の感染を目の辺りにしたため、抱いていた希望と信頼を一気に失い、がっかりしたように溜息を吐いた。「ん？」

二階上——三階の階段からガラスが無理やり割られたような甲高い音が聞こえた。

「な、何だ？ 狂人が侵入してきたのか！？」

咄嗟に銃のトリガーに指を当て、身構える。

足音は物凄い速さで遠のいていった。上に向かったらしい。

南城は階段の横の吹き抜けから上を覗き、僅かにその音を響かせた主の姿を目撃した。

「な！？ 何で、どういうことだ！？」
今見たばかりの光景が信じられず、自問自答する。
その間にその足音の主は驚異的な跳躍であつと言つ間に見えなくなつた。

白でも無い。黒でもない。純粹な光そのものの色である銀色の刃が視界を圧迫する。死そのものを象徴するように、その刃の発する光が佐久間の顔を照らし、目を焼き付けた。

佐久間は悟つた。自分は今この瞬間死ぬのだと。終わつてしまうのだと。

よく死の淵ではこれまでの人生の映像が走馬灯のように流れるというが、そんなことは全くなかった。ただ、どうでもいいことだけが浮かんだ。

——くそつ、こんなところで死ぬならもつと一杯遊んで、悪してナンパして楽しんどくべきだった！

毎日食料を探すだけで何の楽しみも得ていなかったため、快樂への渴望が沸き起こる。

富山大震災で家族を失つたあと、こんな場所に来ないで親戚の家にお世話になっていれば良かったと心から反省した。

——畜生、グッバイ俺の人生——！

刃が額に触れた瞬間、佐久間はこれから訪れるであろう激痛を恐れ、強く目を瞑つた。

「退け」

突然右に強く蹴り飛ばされた。

——何？ 退けだど！？ 俺よりも先に姉御を殺す気が！ こいつめ、何て奴だ！

佐久間は目を瞑ったまま安形の残虐さに怒りを抱いたが、今の言葉に疑問を持つ。

——ん？ 退け？ あれ——狂人って喋れたっけ？ それに今の声は聞いたことがあるような——

怯えた瞼を上げると、自分が蹴られる前の位置に見慣れた男が立っていた。

鋭だ。

「早く愛と一緒に下がれ！ 感染したいのか」

鋭はあろう事が、安形の黒柄ナイフを自分の腕で直接防ぎ、そう叫んだ。

「鋭！？ さつき落ちたのに——な、何で……」

「いいから下がれ！」

愛の言葉を強引に止め、鋭は怒ったように振り向いた。その顔を見て佐久間と愛は思わずゾツとそた。

「な、何だその目……お、お前？」

紫色に変色した鋭の瞳を目撃し、狂人を見るような視線を向ける佐久間。無意識の中に後ずさった。

鋭は先ほど安形に切り刻まれていた、五階から落下したにも拘らず、血の一滴も流さず平然としている。一応切り傷はあるのだが、そこから血は流れていなかった。

「……早く行け」

それだけ呟くと、鋭は腕に力を込め、黒柄ナイフを弾いた。

「あああああああああ！？」

躊躇ったように変な声を出す安形。

構うことなく鋭は安形の首を片手で掴み、ついさつき自分がやられたように片腕一本でその体を持ち上げた。

「さつさと正気に戻れ馬鹿野郎！」

そのままお互いの視線を交わらせる。安形はしゃがむに暴れて

いたが、鋭の腕は巨大な岩のようにビクとしなかった。

しばらくして安形の首からウネウネと動くものが現れ、鋭の手の平に食い込み出した。鋭はそれを複雑そうな表情で見つめると、自分の手に食い込んだままにも関わらず、一気に握りつぶした。

「……ああああ……あ……」

同時に安形の全身から力が抜け、床に倒れ込んだ。

「ふう」

鋭は小さく息を吐き、ミミズの死体を投げ捨てた。

「え、鋭……お前？」

恐る恐る佐久間が声を掛ける。怖いのか、腰が少し引いていた。

「佐久間、俺は……」

鋭は悲しそうな目で口を開こうとした。だが――

一発の銃声がそれを邪魔した。

「この化け物め！」

南城が煙を上げる銃口を向けたまま、階段の方向から歩いてきた。佐久間や愛と同じく恐怖を感じているような目を鋭に向けている。

「ぐっ――この……！」

鋭は撃たれたばかりの胸を押さえ、よろけながら南城に向かって一歩踏み出した。

「死ね！」

南城は立て続けに三発の銃弾を放った。そのどれもが確実に鋭の急所を貫く。

「がつ！？」

鋭は初めて口から人間にしては黒っぽい血を吐くと、大きくよろけ窓際に下がった。先ほど落ちたばかりの窓だ。

「おかしいと思っていただ。警察の者？ 家出？ 嘘はもう少し上手くつくんだな」

怯えと怒りの籠った表情を浮かべたまま、南城はさらに二発の銃弾を浴びせる。

衝撃に押され、鋭は窓際の壁に背を押し付けた。

「この……野郎……」

紫の瞳で食い殺すように南城を睨みつけながら、額から汗を流す。南城は無言で最後の一発を放つべくトリガーを引いた。

「ガチッ」と音が鳴り、スライドが止まった。弾切れだ。

「くそ、誰だ勝手に銃弾を使っていた奴は!？」

焦り、懷からマガジンを取り出す。

鋭はその隙を逃さなかった。南城を倒そうと窓から半分出ていた体を起こし、走り出そうとする。しかし、体を起こす前に目の前に二つの腕が突き出され、鋭は走りだそうとした勢いのまま横に押し倒された。

「このっ、化け物め——!」

それはずつと鋭を倒す機会を伺っていた武田の腕だった。

南城が留めの一撃を放つ直前、鋭は『これから起こるであろう出来事』を予期し、静かに辛そうに、悲しそうに目を伏せた。

目を覚ますと、安形は何故か両腕をロープで拘束されていた。レストラン中央の床に無造作に放られたような格好のまま首を挙げ、自分を見下ろすように立っている人物を見上げる。

「起きたか。気分はどうか？」

南城は安形の黒柄ナイフをくるくるとお手玉のように空中で回転させ、醜く笑った。

「……これはどうなってんだ？ 何で俺は拘束されている？」

わけが分からないといった様子で戸惑った視線を向ける安形。

「何でだと？ 決まっているだろ？ お前は危険人物だ。拘束するのは当然だろ」

「危険人物だと？」

「そうだ。もう大体予想はついている。お前らはテロリストだ。大方白居易の命を狙ってこの事件を起こしたんだろ？」

「何で俺がテロリストって事になるんだ？ 一体何があった？」

救いを求めるように、安形は南城の背後に立っている愛や佐久間に視線を向けた。だが、二人とも気まずどうに目を合わせない。

「よくもまあ、俺の町にこんなミミズどもをばら撒いてくれたものだ。落とし前はきっちりつけてもらうぞ？」

南城は爪きりを取り出した。それを見た瞬間、安形は相手の意図を悟り、さっと顔の血が引く。

自分の指に爪きりが当てがわれるのが分かった。冷たい感触がはつきりと肌から感じられる。

「まずは一本目だ」

一気に親指の爪が剥がされた。

「つぐああああああー！？」

あまりの痛みに安形は大声で叫んだ。指先の神経が悲鳴をあげ、びりびりと痺れる。

「さあ、本当の事を言え！ お前らは何者だ？」

南城は間を置くことなく今度は人差し指に爪きりを押し付ける。

「ちよつと、南城さん止めて！ 安形さんは私たちを守ろうとしてくれたのよ！」

目の前の痛々しい光景に顔を背けながら、見かねた愛は南城の腕を掴んだ。

「よせ、黙ってろ」

その腕を背後から武田が引き離す。知らない中に武田と南城には無言の協力関係のようなものが生まれ、安形が気絶している時から愛と佐久間の行動を封じていた。

「おい、姉御に手え出すんじゃないよ！」

佐久間は強すぎるくらい愛の腕を握り締めている武田の手を、それ以上の力で掴んだ。

「黙れ、こいつが見えないのか？」

南城は爪きりを握っている腕とは逆の手で銃をチラつかした。

それを見て、愛も佐久間も悔しそうに黙りこんでしまう。

「……鋭は……どうなった？ 何処にいるんだ？」

指の痛みに耐えながら、安形は姿の見えない依頼者のことを聞いた。直感的にこの自分への待遇の変化が鋭にあると思い部屋の中を見回す。

「あの化け物は死んだよ。向こうの方をしてみる。亡骸が見えるぜ」

武田が笑いながら答えた。

キツと武田を睨んだ後に何とか体を起こし、安形は部屋の奥に視線を向けた。だが、体が固定意されているため、うまく見えない。

「おい、手伝ってやれ」

南城が顎で佐久間に命令した。

佐久間の手を借りて右を向くと、確かにそこには鋭の死体があった。ゴミのように無造作に捨てられている。

「何てこった……！」

安形は愕然とした。

「もう一度聞くぞ？ お前らは何者だ？」

鋭の死体を見つめている安形に構わず、南城は二本目の爪も剥がした。

「がつ——あああ……！」

呻き声を上げ、歯を食いしばる安形。

「——強情な奴だ。ふん、さすがはテロリストだよ。拷問に対する訓練でも受けているのか？ だが、これはどうかな？」

南城は銃口を安形の股間に向けた。

「くつくく、今更性転換はしたくないだろ？」

安形を抱えたまま佐久間がびくくつと股を強く閉じ、痛々そうに

顔を曇らせた。

「はあ、はあ……！ よ、よせ……は、話すから——！」

流石に安形は恐怖に顔を引きつり、慌ててそういった。

——こいつに黒服のことを言っても、信用するとは思えない。こ
こは……俺がテロメンバーだって言っただ方が信憑性があるな……！
「お、俺は確かにテロのメンバーだ。だけど、今は違う。奴らの組
織から逃げてここに隠れていた。この町で起きたことにも関係して
いない。これは組織の人間が白居学を狙ってやったことだ」

「ふん、細菌兵器がばら撒かれる直前に怖くなって逃げたってこと
か？ 随分肝が小さいな」

南城は信じたようだ。見下すように上から安形を一瞥した。

「頼む、た、助けてくれ……俺はこんな所で死にたくない！」

油断させようとワザと哀れっぽい声で南城に訴え掛けた。しかし、
それは逆効果になってしまった。

「元だろうとどうせテロリストには変わらない。俺の町をこんな状
態にした付けを先にお前が払え」

銃のトリガーに掛けた指に力を込める。

訪れる痛みには恐怖し、安形は体を強張らせた。

ドガッアアアアン！

尋常ではない大きさの鈍い音がデパート中に響いた。

銃弾が安形の一部分を吹き飛ばした音ではない。正面扉が粉碎さ
れたのだ。

一階、二階とそれぞれ待機させられていた生存者たちから阿鼻叫

喚の聲が放たれた。

「今度は何だっ！？」

南城は眉間に皺を作りながら銃を階段に向け怒鳴った。

真下から聞こえる悲鳴や狂人の呻き声に混じって、笑い声のよう
なものまで聞こえる。

「に、逃げましょう！ 正面扉が狂人に破られたのよ」

愛は安形の腕を肩に回しながら叫んだ。

「待て、勝手に動くな！」

二人に銃を向け動きを制すると、南城は丁度階段の方から聞こえた足音に反応し、緊張した顔を向けた。複数の人間の影が見えてくる。

レストランの中まで来ると、その人間たちの姿がはっきりと見えた。警察特殊部隊の服と、カジュアルなジャケットを足して二で割ったような服装をしている。そう、今自分が銃口を向けている男と同じ格好だ。

「はっ——面白いことになっているな」

その内の一人、レゲエ頭の男が銃を突きつけられ、指から血を流している安形を楽しそうに見た。

「チェックメイトだ」

黒村がそう言っていると、背後に立っていた曽根、本田、高木はそれぞれ黒柄ナイフを一気に引き抜く。

銀色の光がレストラン中に煌いた。

<第六章>四面楚歌（後書き）

アンケートについてなんですが、対象人物を増やそうとしたら、内容変更するとこれまでの投票が消えてしまうと分かったので、とりあえず人物の増加はせず、このままで行きます。

尋獄4終了後にまた全ての人物を出した上で改めて第二回アンケートをやりたいと思いますので、そのときはまたご協力お願い致します。

それまでは今設置しているアンケートを継続して続けるので、是非ご投稿お願いします。

<第七章> 鋭の正体

<第七章> 鋭の正体

——不味い！

安形は自分の腕を拘束しているロープを何とか振りほどこうとしたが、かなりきつく結ばれているらしく、殆ど意味が無かった。

「安形和也だな？ お前はもう終わりだ。鋭を渡せ」

レゲエ頭を片手で撫でながら、黒村はナイフを安形たちに押し付けるように見せびらかした。

安形はその言葉に怪訝そうな表情を浮かべる。

「鋭？ 何言っているんだ？ 目の前に倒れていただろ」

安形は自分の横を顎で示した。

黒村はそこに倒れている鋭を見ると、一瞬驚いたような表情を浮かべたが、すぐに安形に向き直った。

「そうか……死んだか。どうやら、奇跡的に変化はしなかったようだな」

「変化？」

不可解な言葉に、安形は聞き返す。

黒村は「ふうっ」と溜息を吐くと、安形に向き直り、椅子へと歩み寄っていく。その纏っている雰囲気を押され、佐久間や南城らは慌てて横に避けた。

「……今の反応からすると、どうやらお前は鋭の正体を知らなかったみたいだな」

「正体？ どういう事だ？」

安形は緊張した様子で聞き返した。

「どうせあいつにここから脱出する手伝いをしろとでも頼まれてい

「たんだろ？ 残念だがあいつにそんなつもりなんて全くないぜ」

黒村はナイフを自分の肩に乗せ、哀れそうに安形を見つめた。そしてゆっくりと勿体ぶるように言葉を吐き出す。

「飛山鋭の目的は、『白居易の殺害』だ」

「なんだと？ どういうことだ！？」

安形は黒村の言っていることの意味が分からなかった。

「あいつはこの夢遊町で作られた実験体——歩く大量殺人兵器なんだよ」

「殺人兵器……？」

「黒服の大きな計画のためのモルモットとして人体改造を受けた化物だ。この町に蔓延っているミミズは全てあいつの命令通りに動くまあ、といっても人間を見つけたら殺せとか、簡単な命令だけだけだな」

「嘘をつくな！ だったら俺は何で依頼をされたんだ？ 鋭の目的が白居易の殺害なら、俺は何の必要もないだろ！」

「カモフラージュさ。お前に依頼をすることでこの夢遊町から、自分に出る意思があると示したかったんだろ。恐らくへりまでたどり着いたらそこでどこかに隠れて、お前と一緒にこの町から出た事にする気だったのかもな」

「何でそんなことを……」

「決まってるだろ？ 白居易を確実に殺すためだ。あいつは白居易邸で白居易の命令によって化物にされた。復讐したいんだろうぜ」

黒村は対して興味がなさそうに言った。

「ちよつと、嘘付くんじゃ無いわよ！ 鋭がミミズを操っていた？ 鋭はさっき私たちが狂人から助けてくれたのよ。ミミズを操れるんだったら、そんなことしないで命令すれば言いだけでしょ！？」

話をずっと聞いていた愛が鋭を庇うように黒村に反抗する。

「だから言ってるだろ。簡単な命令しか出来ないって。鋭は白居易この町から出さないために無差別に『人間を殺せ』って命令するしか無かったんだろ。ミミズに白居易だけを殺すなんて高度な真似はで

黒村が舌打ちし、その化物の名前を呼ぶ。

「鋭？ あれが鋭だっというのか！？」

黒村の放った単語が信じられず、安形は聞き返した。

「くそつ、ダメージが溜まった所為で暴走してやがる！ 本田、曾根、高木……やるぞ！」

「はい！」

黒服たちは慣れた動きでさっと鋭の周りを囲んだ。

「い、一体何だっというんだ！？」

武田は般若の恐ろしい顔を見て一目散に階段の方へ走り出した。

そのまま一気に下の階へ駆け下りたが、狂人たちの群れが眼前に飛び込んできたため、すぐに立ち止まった。黒服がここに侵入した際に同時に入ってきた感染者たちだ。

——逃げられない！

冷や汗を流し、武田は唾を飲み込んだ。

「どけえええええ！」

真後ろから発砲音が聞こえ、迫っていた狂人が無様に崩れ落ちた。南城が撃ったのだ。既に予備のマガジンを装填しているらしく、立て続けに撃ち続けている。

「今だ！」

狂人たちの包囲が割れた瞬間、二人は出口目掛けて一気に駆け出した。

「安形さん！」

愛は南城らがいなくなったのを確認すると、急いで安形に駆け寄り、落ちていた黒柄ナイフでその腕を拘束しているロープを切断した。

「は、早く逃げようぜ」

一足先に階段の前まで逃げていた佐久間が二人に向かって声を上げる。だが、安形は愛から黒柄ナイフを受け取ったままその場から動かなかった。

「安形さん？」

愛は怯えた顔のまま安形を振り返る。

「君たちは逃げてくれ。俺は鋭に真実を聞く必要がある」

「何言つてんだよ、もう分かっただろ？ 鋭は怪物だ！ あんたがいねえと俺らが逃げられない！ 頼むから一緒に来てくれよ！」

佐久間は泣き出しそうな顔で叫んだ。

自分が居なければ佐久間と愛が下の狂人たちに殺されることは目に見えている。

「くそっ……！」

安形は一瞬躊躇ったものの、仕方が無く愛の背を押して走り出した。

「黒村さん、安形が！」

本田が躊躇いがちに言う。

「放っておけ、今やあいつは俺たちの敵じゃない。それよりもこの化け物だ！ 油断するな、絶対に捕獲するぞ！」

「は、はい！」

本田は眉をぎゅっと結んだ。

「ああああああ……」

狂人たちの腕があちこちから伸びてくる。南城に多少減らされてはいたものの、その数は未だ多い。安形、愛、佐久間の三人は必死に狂人たちの合間を縫って一階へと走り続けた。

「邪魔だ！」

安形は二階の階段を塞いでいた数体の狂人に向かって、自分の体を全力で撃ち出した。まるで大砲の弾のように相手に衝突し、折り

重なるように一階の床へと転がり落ちていく。

「安形さん！」

愛と佐久間が同時に叫ぶ。

「——大丈夫だ！ 早く来い」

安形は狂人たちの喉を両腕で押さえたまま、力強く答えた。

二人が目の前を駆け抜けていくと、自分もすぐに立ち上がりその後を追う。

「ど、どこに逃げりやいいんだよ！ こんな調子じゃ直ぐに囲まれちまう」

正面入口の前までたどり着くと、付近のあまりの狂人の数に気おされ、佐久間が泣き言を漏らした。

「見て！ 南城と武田よ」

右斜め前の道路を走っていく二つの人影を見て、愛が叫んだ。

「——南城はこの町を知り尽くしている、安全な場所を他にも知っているのかもしれない。追うぞ！」

短くそういうと、安形は二人を見失わないように先頭に立ち再び走り出した。と同時にデパートの中や周囲の路地から次々と五百人近い狂人たちが出てくる。

「急げ！」

安形は必死に両腕を前後に振った。

紫色の瞳をレストラン中に走らせ、鋭——いや、般若は猫のようにその大きな体を縮めた。レストランの中にはもう黒服と般若の五人しか居ない。安形が気絶した後ここに居た生存者たちは下の階に

避難していたからだ。といつてもその殆どが黒村らの襲撃と共に侵入してきた狂人によつて殺されてしまったが。

「イグマ抑制剤の用意はいいか？」

黒村は正面に般若を捉えたまま、真横に立っている高木に聞いた。
「ああ、大丈夫だ。いつでも撃てる」

高木は右手に黒柄ナイフ、左手に注射器のような物を構え、落ちていた様子で答える。

「いいか。本田、曽根は前衛としてあいつの注意を引き付けろ。俺がここから中衛として状況を見ながら対応する。高木がイグマ抑制剤を撃てるような隙を作るんだ」

「簡単に言ってくれるぜ」

小さな声で本田は苦笑いした。それに黒村は目ざとく気づき、本田をにらめ付ける。

「何だ？」

「何でもないですよ」

そついうと、本田は一気に般若の目の前に走り出した。曽根もその後は無言で続く。

「ズオオオオオオオオー！」

近付いてくる小さな二人の生き物をその双眼で捕らえると、般若は一気に縮めていた体を開放し、巨大な体を獲物目掛けて覆いかぶさるように投げ出した。

南城と武田を追っていると、安形たちの前、道路の先に悪臭漂う広いゴミの世界が飛び込んできた。

「うへ、夢遊町のトイレかよ！」

それを見た途端、嫌そうに佐久間が吐く様な真似をする。

「嫌がつてる場合じゃないぞ、狂人たちとの距離がどんどん狭まってる。もう、どっち道あそこに逃げ込むしかない」

安形は顔をしかめている佐久間の肩をぐいっと引き、家々の隙間や道の後ろから追ってくる狂人たちの津波のような光景を見せた。

「ちくしょう……！」

佐久間は肩を落としながら仕方が無く足を速めた。

「南城たち、どこに向かっているんだ？ まさかあのゴミの山に自分たちの体をもぐり込ませる気じゃないだろうな」

安形はもう二十メートルもない距離に迫ったゴミの砂漠を見つめ、苦笑いした。その様子を見た愛が何かを思いついたように顔を上げる。

「白居邸——……そうか、白居邸よ！ ここから丁度真つ直ぐにこのゴミ捨て広場を抜ければ、白居邸がある。きっと南城はあそこを目指しているに違い無いわ！」

「白居邸？ 白居学が住んでいた屋敷の？ まだ無事に在ったのか……いや、黒村の話が真実なら無いほうがおかしいな」

「白居がまだ居るかはともかく、あそこは南城一派の活動の拠点になっているの。あいつが逃げ込む場所といったら、ここからならあそこしか考えられないわ」

「そうか、だったら急ごう。南城らが先に着けばきつと入れなくなる。何とかしてあの二人よりも早くたどり着かないとな。愛さん、案内お願いするよ」

安形が言い終わると同時に、ちょうど三人はゴミの広場、夢遊町のトイレへと足を踏み入れた。途端にむわつとした空気が鼻の中に侵入し、まるでここだけ別の別の星の気体で覆われているかと錯覚させられそうになる。どこを見渡しても分解された自転車や壊れたテレビ、放置された生ゴミなどが砂丘のような丘を形成し、数十メートル先の景色を隠している所為でゴミ以外は何も見えない。

「――想像以上のありさまだな」
安形は面倒臭そうに頬を指で掻きながら呟いた。

「しかし酷い臭いだな」

ゴミ山の合間、アフロ頭を左右に揺らして走りながら、南城は鼻を摘んだ。嫌悪感も露に丸めた雑巾のような表情を浮かべている。

「臭いなんてどうでもいいですよ。生き残れるなら」

それとは反対に、武田は一切このゴミだらけの空間を気にすることなく平然とした様子で言った。

「――なんか流れ的に一緒に逃げてきたが……武田、お前まだ俺に着いてくる気なのか？」

「当たり前じゃないですか、俺は生きてこの町から出たい。あんたと一緒に居るのが今は一番助かる可能性がある」

「そうか、それじゃあ精々俺の機嫌を損ねないように気をつけるんだな。白居邸には俺の部下がわんさかいる。あそこまでたどり着ければお前なんかないんだぜ？」

「……分かってますよ」

武田は青白い顔で小さく頷いた。

「ん？　今あそこに何かが見えなかったか？」

全力疾走していた足を止め、不意に南城は遠くのゴミ山を指差した。武田も直ぐに視線を向けたが何も見えなかった。

「何もみないけど……どうしたんです？」

前髪を掻き分け、目をゴミの山に向けたまま武田は聞く。

「いや、何か無数の大きなものがあの山を飛び跳ねているように見

えたんだが……気のせいかな」

「飛び跳ねる？ 蛙か何かを見間違えたんじゃないんですか？」

「かもな。行くぞ」

南城は首をかしげつつも再び歩き出した。

白居邸は丁度ここからあのゴミ山を通った先にある。どうせ近くに行けば何か分かるだろうと判断したのだ。

蛆虫の蔓延る生ゴミの草原を超え、鉄くずがよりそって生まれた短い橋の下を抜け、先ほどのゴミ山が近付いてくると、どこからともなく歌のような音が聞こえてきた。

聞いた事の無い、何語か分からない声が耳に流れ込み、気分を心地よくさせる。

「こんな場所で歌を歌っているなんて、随分のんきな奴がいるんだな」

南城は密入国の外国人の住民が場違いに自国の歌でも歌っているのだらうと思い、下らなそうに笑った。

「何か……この歌変ですよ？」

武田は歌を聞いているうちに異変を感じ、緊張した様子で言った。

「変？ 何がだ」

「な、何だか……か、体が……」

平衡感覚を突然制御出来なくなったらしく、武田はふらふらと左右によろけると、終いにはその場に倒れ込んでしまった。

「お、おい武田！？」

南城は武田に駆け寄ろうとしたが、自分自身の平衡感覚も急激に狂い出したため、まともに歩くことが出来ず、武田の隣に一緒に倒れてしまった。

「くそつ、視界がグルグルする？ 何なんだ……！？」

突然の体の異常が理解できずパニックを起こす。その間にも未だ耳に鳴り響き続ける歌はどんどん大きくなっていった。

「……ルルウルルルウウウ……」

声がかなり間近に迫ってくる。

流石にもう南城ももうこの声の主が外国人の住民だとは思ってはいなかった。立つことすら出来ない体にならって、目だけをその声の発声元へ何とか向ける。

「——何だこいつらは!？」

南城は思わずビクついた。

目の前に立っていたものはやはり外人の住民などではなかった。いや、人間ですらなかった。

無数の黒色斑点だらけの、色素が全て抜け落ちたかのような真っ白なつるつるの皮膚。水掻きのような膜が付いた手と、逆間接に曲がった足。ボロボロの服の先から伸びた鼻の無い、八の字形の瞳と顔の中心に真丸の口を持った奇妙な大きな頭。元々は人間だったのか所々人を思わせる形状をしているものの、その外見は異様そのものだった。

先ほど自分が、遠くから飛び跳ねているのを見た生き物だ。

> i 4 7 0 0 — 2 2 4 <

「ウウウウルルルウウルルル……」

総勢四匹のその蛙人間のような化物の集団は、ゆっくりと歌を歌いながら南城と武田に近付いていく。

「く、くそつたれがああ!」

南城は喚きながら必死に暴れたが、全く平衡感覚は戻らなかった。どうやら蛙人間たちの声から発せられる特殊な音波が平衡器官を麻痺させているらしい。あの歌を止めない限り、体の自由は戻りはしないようだ。

「こんな化け物まで——……妖怪を復活させる儀式でも誰かしたの

か!？」

武田はもつとんざりだと言つような、泣きそうな顔でそう叫んだ。

「くそー、何て奴だ！ イグマ抑制剤を打ち込まれてあれだけ動けるとは……」

台風が過ぎたかのように屋根の一部が吹き飛んだ、情けない姿のデパート最上階で、黒村が悔しそうに歯軋りした。

もう何処にも般若の姿は無く、傷だらけの黒服メンバー四人だけが疲れたようにこのレストランの床に座り込んでいる。といっても一人は死体だが。

「高木はやっぱりもう駄目か。曽根、本田、まだ動けるか？」

黒村は埃に塗れたレゲエ頭を左右に振ると、壁際に崩れ落ちている高木の死体を一瞥し、そう言った。

「だ、大丈夫です。自分は軽傷ですのぞ」

曽根がすぐに立ち上がり答える。

「俺も大丈夫つす。一発良いのを食らっちゃいましたが、これくらいで根を上げてたら高木さんに呪われますよ。俺の仇を討てつてね」
多少ふらついていたものの、本田も何とか立ち上がり元気そうにツンツン頭を掻いた。

「しかしこれだけ町中にミミズを生み出しておいて、さらに体から発生させられるなんて……とんでもない奴ですね。あのミミズの鎧を纏われたらこっちはどうしようも在りませんよ。イグマ抑制剤も効かないし……黒村さん、次はどうするんですか？」

「鋭は俺たちが、自分が安形を利用した理由に気がついていゝるとは

知らないはずだ。多分また安形と合流することを狙うはず。まずは安形を探そう。捕獲方法はそれまでに何か考えるしかない」

「はあ、面倒ですね。殺すのなら色々手はあるのに『捕獲』は難易度が高すぎる。まあ、今はとにかく行くしかないですけど」

本田はぶつぶつと文句を言いながら階段の方へ歩いた。同じように曽根と黒村も無言でその後に続く。

「大体草壁さんは不親切なんだよ、何でイグマ抑制剤を一本しか用意してくれないんだ？ あれが効かなかったらどうなるか考えなかったのかねえ」

階段を降りながらも本田は文句を言い続けていた。その愚痴を黒村も曽根も止めようとはしない。ただ黙って聞いている。

「誰もが自分みたいに何でも出来ると思いすぎなんだよあの人は」
「確かにその通りだな」

「は？」

突然前から声が聞こえ、思わず本田は足を踏み外しそうになった。ギリギリで体勢を整え、手すりを握り締める。

「誰だ！」

その間に曽根が黒柄ナイフを引き抜き、警戒した眼差しを階段の下へと向けた。しかし夕方が近付いてきたためか、電気が消えている所為か、真つ暗で相手の姿は何も見えない。

「――曽根、本田、行け」

黒村は自分もナイフを構えると、小声で二人に突撃を命じた。

すぐに二人は黒服の訓練で培った類稀な技術を活かし、下の階に居る人間にナイフを突き刺す。黒村の居る場所からは真つ暗でその様子は見えないが、長年の経験から相手の動きを無効化できたと確信した。

だが、聞こえてきたのは二人の悲鳴だった。

「ぐわっ！？」

「いてえっえ！？」

「どさっ」と地面に二人が倒れる音が聞こえる。

——まさか、倒されたのか？　あの一瞬で？　訓練を受けた黒服のメンバーが！？

黒村は全くこの結果を予期してはいなかった。動揺しながらも、今度は自分自身でナイフを構えたままゆっくりと下の階に降り立つ。元々洋服屋だったこの四階は、今は殆どの服がなくなり障害物になるようなものは無い。気配があれば、真っ直ぐに詰め寄り仕留める自信が黒村にはあった。

ジャリッ——

左の方向二メートルから微かにすり足の音が聞こえた。黒村は迷わずそちらに飛び出し、同時に疾風のような速度でナイフを突き出す。しかしその攻撃は命中することなく空を切った。

「甘いな」

突然真後ろからそんな声が聞こえたかと思うと、気がつけば黒村は天井を見上げ、床に背中を強打していた。

「ぐっ！？」

背骨をコンクリートに打ち付けた痛みと得体の知れない相手に対する恐怖で、ぶわっと汗が全身から噴出してくる。

すぐに起き上がるうとすると首筋に冷たい感触が走った。刃物だ。突然目の前が明るくなった。どうやら自分を床に叩き付けた相手が懐中電灯をかざしたらしい。その光で黒村は相手の正体を知った。

「お、お前は——……」

「クスクス、やあ黒村鉄心。助けに来たぞ」

西洋風のセミショートの緩やかな癖毛の黒髪に切れめの目、黒服上位三本の腕に入るといわれる実力者、通称キツネは貼り付けたような笑顔を浮かべ、黒村を見つめた。

<第七章> 鋭の正体（後書き）

何か主要登場人物以外のキャラってどれも皆同じような感じですよ
ね・・・・・・・・・・うんゝ登場人物の性格の幅を増やさなければ。

<第八章>蛙人間

<第八章>蛙人間ナルキッソス

数発の銃声がゴミ広場に響き渡る。

安形たちはすぐにそれが南城の所持している銃だと分かった。

「何だ？ 仲間割れでもしたってか」

横のゴミ山から突き出た木片を屈むようにして避けながら、佐久間が言った。

「もしかしたら、狂人がこの先にも居たんじゃない？」

先頭を歩いていた愛が足を止め安形に向き直る。安形は前を見据えたまま答えた。

「どっちにしても南城が銃を使ったのなら、誰かが必ず死んだってことだ。これ以上犠牲者が出る前にあいつを止めないと……罪の無い人がさらに死ぬことになる」

「でも、狂人が居るならこっちにとっては都合が良いわよ？ 南城を足止めしてくれている。先に白居易にたどり着ける可能性が上がるわ。態々（わざわざ）南城を追わないでこの隙に別の道から白居易を目指した方が良くんじゃない？」

「狂人は一時的に感染しているだけの一般人なんだぞ？ 彼らの死を黙って見ずこすなんて、俺には出来ないよ。このまま進もう」

「……仕方ないわね」

愛は溜息をついた。

前から分かっていたことだが、安形は糞がつくほど人が良い。それは自分たちを殺そうとする狂人に情を抱くほどだ。

任務達成を第一目標とする調査員としては大きな欠点とも言えるが、逆にそれが安形の良さであることに愛は気がついていてた。

「よっしゃー、南城を見つけたら顔面ぶん殴ってやろうぜ！ 安形

さんも爪剥がされてイラついてんだろ？ 俺があいつの根性叩すところ見とけよ」

佐久間は元氣を取り戻し、初めて安形が始めて会ったときのようなハイテンションでそう言った。

「ははは、そんなことはないさ。それよりも南城には白居という男について聞かないといけないな。さっき思い出したんだが、俺はあいつが言っていた白居学という名前を聞いたことがあるんだ」

「へえ、何処で？」

「黒服本部、ナグルファル第一支部だ。確か一度だけあそこに行った時に黒服の資金提供者として写真が掲げられていた。まあ、オルバックの変な気取ったオッサンの写真だったからそれ程じっくり見てはいないけどな」

「安形さんの組織の資金提供者？ 白居は確かに政治家で金を持っているけど、まさかそんなこともしてたなんてね……」

呆れるように愛は言った。

「黒服にとつてはかなり重要度の高い人間だからな。鋭の目的が本来に白居の暗殺なら、黒服が四人も雇われたのも当然だ。最悪、俺たちが会っていないだけでもっとこの町にメンバーが着ているかもしれないぞ」

「げえ、あんな奴等がまだ居る可能性があるのかよ」

佐久間は真横のゴミに背を付きながら舌を伸ばした。

「それに、白居にはもしかしたらただの資金提供者以上の秘密があるかもしれない」

安形は何かをふりかえるように呟く。

「どうということ？」

その表情がこれまでと違っていたので、愛は不思議そうに聞いた。「いや、俺の同僚に截ってやつが居るんだけどな。そいつが一ヶ月前に……こんな話をして分るわけないか——もう行こう、南城が何を撃ったにしろピンチらしいのは確かだからな。急がないと」

思い出したように先ほど銃声が鳴った方向に目を向けると、安形

は慌てて歩き出した。

「電話では詳しく聞けなかったが、何故お前が来たんだ？俺らは安形を鋭の捕獲のために利用していた。お前が責任を取る必要は無いはずだ」

デパートの真下、黒塗りの車の後部座席で黒村は真横に座っているキツネに聞いた。キツネは外を無表情で眺めていたが、その言葉を聞くと同時にクスクスと笑いながら振り向いた。

「安形の責任を取るっていうのはただの建前だ。本当は正当な依頼を受けてここに居る」

「依頼？草壁のか？」

「クスクス、あのイヌが僕に依頼を？あいつは僕を目の仇にしているんだぞ。依頼するくらいなら自分の足で動くさ」

「じゃあ、一体誰の依頼だって言うんだ？まさか黒服の総括からとか言うんじゃないだろうな？」

黒村はイライラした様子で自分の座席から身を乗り出した。だが、キツネは動揺することなく面白そうに黒村の顔を見つめ口を開いた。

「そのまさかさ」

「な、何！？」

「僕は直に頼まれた。鋭の捕獲と総括の保護をな」

「保護……？——総括はこの町に居るのか！？」

信じられないというように聞き返す黒村。黒服の総括は自身の安

全のためにその正体を黒服幹部にしか明かしていない。キツネほど信頼されている実力者なら知っている可能性もあるが、まさか幾らなんでも直に指令を出し、しかもこの町に居るとは思ってもいなかった。

「鋭がこの町の住民全ての命を犠牲にしてまで暗殺しようとしている。それがただの資金提供者の抹殺や復讐のためだけだと思うか？」
「ま、まさか……だが、あの男はイミューニティーの……」

黒村は自分の組織のボスの正体に気がつき、愕然とした。

真っ黒なスーツを着た長髪オールバックの中年の男が、身の丈以上はある大きな窓から外を眺めていた。

男の居る部屋は西洋と東洋の特徴をごちゃ混ぜしたような不思議な構図で、あちらこちらに絵や船などの模型が飾ってある。

今、その部屋の正面扉が突然開き、一人の執事のような三十代らしき男性が中に入ってきた。

「白居様、先ほどキツネから連絡があり、無事にこの町に入ったとの事です。間もなく脱出出来るかと。鋭もキツネが相手ではどうしようも無いでしょう」

男は部屋の中央まで進むと、窓際に立っているオールバックの男、白居学に向かって恭しく頭を下げそう言った。

白居はネクタイを直しながら執事を振り返る。

「——鋭を甘くみるな。あいつはこの私が命じて作ったものの中で、最高傑作の部類に入る。いくらキツネとて生身の間人である以上、まともにぶつかればどうなるかは分からない。いいか長谷川、勝負

は何時も運試しなのだよ。決められた結果は狙って起こすことなど出来はしない」

長谷川の居る中央まで歩くと、白居は円形のテーブルに置いてあったワイングラスを取り、その中身を味わいながら飲み干した。

「それに、キツネについては六角が言っていたこともある」

グラスを置くと同時に用心するような目を窓に向ける。この言葉が気になったのか、執事は恐る恐る尋ねた。

「イミユニティーイグマ部門総司令官が？ 一体何の話ですか？」

「——とにかく、キツネだけでは鋭を抑えきれない可能性があることは確かだ。この邸宅にも何かしらの備えをしていた方がいい。南城から買い取ったモルモットを利用しよう。奴らに新作の兵器細胞を使っただ。ちょうどいい実験にもなる」

「ですが、あれは制御出来ませんよ？ この邸宅の中で使用すればあなたも危険にさらされます」

「そのための君たちだろう。何だ？ 君らはたかが一種の感染者たちから私一人守ることも出来ないのか？ だったらすぐに全員用無しだな。君たちもモルモットの一員として貢献してもらおう」

「……分かりました。では白居様は地下に避難してもらいます。このシェルターなら感染者も鋭も入っては来れないはずですから」

「それでいい」

白居は満足そうにクスクスと笑った。

細いゴミのトンネルのようなものを過ぎたときから、安形は何か

歌のような音が自分の耳に流れ込んでくることに気がついていた。その音は足を進めることに大きくなっていく。

愛も気がついたようだ。不審そうに安形に聞いてきた。

「ねえ、さっきから何か聞こえない？」

「やっぱり愛さんにも聞こえてるか、一体何なんだろうなこれは……」

「どっかのお気楽野郎が自作の歌でも歌ってんじゃないのか？」

佐久間が軽い感じで言う。それを馬鹿にするように愛が叱った。

「あんたじゃあるまいし、そんなわけ無いでしょ」

「えー、姉御、俺をお気楽な人間だと思ってるのか？ 俺ほど真面目で冷静な人間は居ないぜ！」

「どこが真面目で冷静よ」

本気でそう思っているらしい佐久間を見て、愛は呆れたように大きな溜息を吐いた。

「……ん？」

安形は一瞬何かが左のゴミ山の隙間を通り過ぎたような気がした。気のせいだろうか。

「姉御、冷たすぎるぜ。俺は命の恩人だろ？ さっき助けてあげたじゃないか！」

「助けたって、すぐにパイプを投げ捨てて縮こまってたじゃない。あんなの助けたうちに入らないわ」

眉を寄せながら言う愛。

二人の痴話喧嘩のような会話を聞きながら、安形は謎の歌の音量がさらに大きくなっていることに気がついていた。歌の主に近付いてきたらしい。

フツと何かの影のようなものが安形の足元を走った。素早く右を向くと、一瞬人のような物体の頭がゴミ山の向こう側に見える。

——住民か——？ いや……あの形状は人間には見えなかった。まさか……

頭の中に黒服のデータベースで見た資料の生き物の姿が浮かぶ。

安形は急に緊張した顔を作り、腰に収めた黒柄ナイフに片手を当てた。

「——二人とも静かにするんだ。もしかしたら……狙われているかもしれないぞ」

「え、狙われてる？ 狂人か！？」

静かにしろと言われたばかりにも拘らず、大声で佐久間が聞き返した。

「うるせえって！——はあ、多分狂人じゃない。黒服の兵器だな。資料を見たことがある。特殊な音波で三半規管を刺激し、平衡感覚を麻痺させるんだ。さつきから聞こえている歌はこれだろう」

「それって……歌を聴いたら動けなくなるってこと？」

愛が聞く。

「まあ簡単に言えばそういうことだな」

安形は面倒くさそうに頭を掻いた。

「後ろは狂人たちが迫ってる。こうなったらもう白居邸まで突っ切るしかない。いいか、俺が合図したら耳を塞いで全力で走るんだぞ。絶対に手を耳から離すな」

「でも——耳を塞いだくらいじゃ完全に歌をシャットアウト出来ないと思うわよ？」

「それでもしないよりはマシさ」

安形は深呼吸し、しばらく周囲の様子を探ると大声で叫んだ。

「——今だ！」

愛と佐久間が同時に駆け出し、一直線にゴミに囲まれた狭い道を進んでいく。その途端左右のゴミ山の裏から二体の蛙人間が飛び跳ね、二人を追い抜こうとした。

——やっぱりこいつらか！

安形はすかさず小型ナイフを二体に向かって投げる。ナイフは寸分の狂いも無く蛙人間の足に命中した。

「ウウウウアアッ！？」

二体はそのまま銃で撃ち落されたようにゴミの上に落下してい

く。

安形の投ナイフ術は黒服内においても定評がある。キツネ直伝の訓練によってその命中率と威力は非常に高いレベルに達していた。攻撃を回避するという意味では同僚の截や翠の方が何倍も上だったが、こうした遠距離攻撃や止めを刺すための力任せの一撃を撃つことに関して、安形の右に出る者は居ない。威力だけに関して言えば、それはキツネすらも凌駕していた。

「——ウウウウウウオオオ……！」

倒れたまま蛙人間は歌を歌い出した。オペラのような美しく、ダイナミックでどこか気品が漂うような声だ。

「うおお！？」

景色のぐらつきを感じた安形は急いで懷からハンカチを取り出し、それを二つに千切り、唾を含ませて両の耳に詰めた。

「悪いな！ お前らのご自慢の歌を楽しむのはまた今度だ」

そう言つて走り出す。

二匹の蛙人間は追おうとしたが、足の痛みが邪魔しているのかとても安形に追いつけそうには無かった。

「あそこに隠れましょう！」

しばらく逃げたところで、道の右斜め横に古びた倉庫のようなものを見つけ、愛が佐久間の腕を引つ張った。耳を押さえているため佐久間は愛が何を言っているのか分からず、『ほげっ？』と間の抜けた声を出して引つ張られていく。

愛が後ろを確認すると安形の姿は無かった。きっと化け物と戦っているのかもしれない。

押し込むように佐久間を倉庫の中へ突き出し、自分も素早く中に入る。そして中がどうなっているのか確認もせずにスライド式の錠

を乱暴に閉めた。

「はあ、はあ、はあ——……佐久間、大丈夫？」

胸を上下させながら後ろを振り返る。佐久間が無傷なのは分かっていたが、自分を安心させるためにもそう言った。

「ピンピンしてるぜ」

荒々しい声が聞こえた。その声を聞いた瞬間、愛はこの倉庫に入ったことを後悔した。

目の前では南城が佐久間の首に腕を回し不快な笑みを浮かべており、その横には無表情で武田が立っていた。

「あ、姉御お……」

佐久間の情けない声が室内に満ちる。

「私たちは同じこの町の住民よ、佐久間を放して」

愛は出来るだけ動揺を見せずにそう言った。しかし、南城はまったく腕の力を緩めずに佐久間の首を拘束し続ける。

「住民だから何だってんだ？ この状況でそんなこと関係あるか。安形はどうした？ あいつもこっちに来てんのか？」

「来てるわよ。私たちを助けるためにね」

「ふん、テロリストが人助けね。まあ、そんなことはどうでもいい。お前らはここから今すぐに出ろ。ここは俺の場所だ」

「な、冗談でしょ？ 外は変な化け物だらけなのよ！ 今出て行ったら間違いない死んじゃうわ」

「このままここに居ても死ぬかも知れないぞ？」

南城は佐久間の首に回している腕とは逆の腕で銃を取り出し、それを佐久間に向けた。

「——この悪魔っ……！」

「違うな、俺はこの町の王だ。住民なら王の命令に逆らうな。いいか、三つ数える。それまでに出る。じゃないとこいつの脳天をぶち抜く」

「……っ！」

「一、二……」

南城はゆつくりと数を数え始める。愛は仕方がなく鍵を開け外に出て行こうとした。だが、そのとき突然倉庫のすぐ外で蛙人間の歌が響き渡った。

「ウウウウウウアアアア——」

「くっ!？」

南城は耳を押さえながら倒れ込む。愛も、佐久間も、武田も同様だ。

「ここに居る事が気づかれたのか!？」

怯えた表情を見せながら床に寝転んだまま武田が言った。

「くおおおおお!？」

南城が苦しみの声を上げる。

必死に立ち上がるうとするも、歌の所為で全く身動きが取れないようだ。その様子見て佐久間は南城の銃を奪いにかかった。

「この野郎お!」

自分も歌の所為で倒れているので、添い寝するような格好で南城の顔を殴りつける。グボツと鈍い音を響かせ相手の顔が歪む。だが南城も勿論黙ってはいない。すぐに殴り返し、顕微鏡で見る微生物のような動きで二人は激しいバトルを繰り広げた。

その様子を見ていた愛はあることに気がついた。

南城が銃を使わないのだ。

外に居る蛙人間がまだこの倉庫にいる自分たちに気がついていないと考え、銃声で気づかれないようにしているのかと思ったが、どうもそうでも無いらしい。

——もしかしたら——と愛は思った。

「佐久間、止めて! 騒げば蛙人間が私たちに気づく! 南城は銃を撃てないわ、弾がもう無いのよ!」

「何い!？ 弾がないい!？」

相変わらず大声で聞き返す佐久間。

南城は舌打ちした。愛の言うとおり先ほど蛙人間たちに襲われたとき、身を守るために銃弾は全て撃ち尽くしていた。もはや手に持

った鉄の塊はただのこけおどしでしかない。

「ウウウアアウウウ？」

物音や話し声が聞こえたのか、倉庫の前を歩いていた蛙人間は首を傾けながら扉に近付いてきた。その気配を察し南城と佐久間は殴り合いを止め、お互いの頬に拳を当てたまま固まる。

倉庫内の中心に倒れていた武田は、外から見えないようにハイハイ歩きで窓の真下に静かに移動した。

直後、蛙人間のハの字の目がヌウツと頭上のガラスに映る。

位置的に言えば南城、佐久間は倉庫の奥、愛と武田が窓や扉の目の前といった状態だ。

倉庫内の全員の顔に冷たい雫が流れ、無尽蔵に溢れてくる。しばらくすると汗や体温のおかげでむわっとした空気が室内に充満した。
「ウウウウウウ……」

何も居ないと判断したのだろうか。しばらくすると蛙人間は満足したように倉庫から離れていった。

「ふう……」

愛は安心したように大きく深呼吸した。

ほぼ同時に時間停止から開放されたかのように佐久間が止めていた拳を突き出そうとする。しかし、それが南城に命中する前に武田が拳を受け止めた。

「——もうよせ、そんなことをしても何の意も無いだろ？」

「うるせえ！ こいつは糞野郎だ！ ぶん殴らなきゃ気がすまねえんだよ！」

「殴りたきや後で好きなだけ殴れ。俺は生きてこの町から出たいんだよ。頼むから化物を引きつける様な騒ぎを起こすな」

「佐久間——！」

武田の言葉に同調するように愛が佐久間を見つめる。それを見た佐久間は仕方が無く拳を下ろした。

「いがみ合っているかもしれない、ここは協力しよう。少なくとも白居邸までは……」

武田は含みのあるような言葉を言った。

「いいけど、どうするの？」

愛が疑いの残った眼差しを向ける。

「この近くに居る蛙人間はさっきのやつだけみたいだった。あいつさえ倒せれば無事に白居邸まで行けるはずだ。何とかしてあいつを倒そう」

「どうやってだよ？」

急に場を仕切り出した武田に対し、不機嫌そうな表情で佐久間が聞いた。

「俺に考えがある」

安形は一番高く細いゴミ山の頂上に倒れていた。

佐久間と愛を逃がす為に囷となった安形だったが、想像していたよりも多くの蛙人間が現れ、逃げられなくなったためここに上ったのだ。

下の所々から聞こえる歌の所為でもはや立ち上がることは出来ず、黒柄ナイフを握り締めたままじっと横になっている。

「ウオオオオオオ……」

一匹の蛙人間が数メートル横のゴミの上まで飛び跳ねてきた。安形はすかさずナイフを振り、その蛙人間を斬撃で下に落とす。

「はあ、はあ……くそっ、友くんが居ればな」

三年前の事件を思い出し、ふと安形はそう呟いた。

事件当初行動を共にしていた友は、素人にも関わらず場の状態を読み命令するのが非常に上手かった。截を最高の前衛と見なすなら、友は最高の中衛だ。どんな状況でも、どんな場所でも活路を見出し大逆転の手を打つ。彼がここにいれば、こんな力任せの策を取る必要も無かつただろうと思った。

安形は追い詰められてこの細いゴミ山に登ったわけではない。ここのらば、例え『歌』の影響で立てなくなっても戦えると考えたからだ。細く高い位置にすることで蛙人間の攻撃を下からのみに制限させ、倒れたまま迎撃することが出来る。

だがこれはかなり強引で無理のある戦法だった。

いずれ追い詰められ殺されることは目に見えている。先ほど友がいればと考えたのも、それが分かっている故の願望だった。

「もう佐久間も愛さんも無事に逃げただろうな。そろそろ、潮時か」

幾ら打ち落とせるとはいえ、寝っ転がった体勢では何度斬ろうとも蛙人間に致命傷を与えることは出来ない。体力的にも精神的にも限界を感じ、安形は仰向けになり夕焼けを見つめた。

『いつか、必ず機会は来る。その時に俺たち二人で、このイカれた黒服やイミユニティーを潰すしてやろう。それまで堪えるんだ』

自分自身が黒服に入る前に言った言葉を思い出す。

「――そういえば、あの時も今と同じように真っ赤な空だったな。まあ、あれは朝日だけだ」

約束を守れなかったことで残念そうに目を細める。

下に集まっていた五、六匹の蛙人間は本能的に獲物が弱っているを感じたのか、我先にとこぞって大地を蹴った。

すぐに安形の周囲を囲むように空中に浮かぶ。

「悪いな、悟くん——……俺はここまでだ」

安形は夕焼けを目に焼き付けると、ゆっくりと目を閉じた。

一番近い蛙人間が歌いながらその円形の口を限界まで開き、安形の四肢にかぶりつこうとする。粘り気のあるドロドロした涎を撒き散らしながら、それは安形の黒服を貫き、奥にある強靱な筋肉を抉り血を啜り取る。安形は痛みに顔を歪めたが、もう完全に諦めたのか、歌の影響で体が動かないのか、足に食らいついている蛙人間を振りほどこうとはしなかった。他の蛙人間も次々に右腕、左足、左腕へと黄ばんだ歯を突き立てていく。

最後の一匹も安形の喉下に飛びかかり、盛大に血のシャワーを浴びようと首を伸ばした。

しかし、それは未遂に終わった。

突如真横から紫色の大きな腕が伸び、喉に噛み付こうとしていた蛙人間を吹き飛ばしたのだ。

「ウウウウウアア！」

蛙人間たちは怯えた眼差しでその腕の主を見た。

白目の中に浮かぶ水晶のように透き通った真紫の瞳。

自分たちの倍はある巨大な体躯。

銀色の長い髪を風になびかせながら、般若のような顔をしたそれは殺意の籠った目で蛙人間たちを捕らえ、高らかに叫んだ。

「ズオオオオオオオー！」

<第九章> 白居邸

<第九章>” 白居邸”

「考えた？」

酔っ払いのようにふらふらとした足取りで立ち上がると、南城は崩れたアフロヘアーを必死に整えながらそう聞いた。武田はようやく静かになった室内の面々を見渡し、丁寧に説明を始める。

「あいつらの武器はあの超音波みたいな声と高いジャンプ力だ。それさえ無効化できれば楽に倒せる」

「無効化って、具体的にどうする気なの？」

愛がさっぱり分からないといった様子で聞く。

「手っ取り早く言えば、この倉庫を利用するんだよ。ここなら高く飛べないからあの蛙人間も歩くしかない。超音波だつてずっと歌ってるわけじゃねえんだから、奴が歌い出す前に喉を潰せばいい」

「倉庫の利用はともかく、喉を潰すってどうやるのよ？ こっこの姿が見つかった瞬間に歌が始まるでしょ？ 大体、倉庫におびき出すのに姿を見せる必要があるんだからこんなの最初から不可能な策よ」

「最初に喉を潰すんだよ」

武田は自信タツプリに言った。

「遠距離攻撃で喉を攻撃することで、歌を封じると共にここにおびき寄せるのさ。そうすれば全て上手く行く」

「遠距離攻撃で喉を潰す？ 銃弾はもう無いんだぞ？ まさか投石するとか言っんじゃないだろうな！」

南城に対して同様、武田にもあまり良い感情を持ってはいない佐

久間は、かなり嫌味を含んだ聞き方をした。

「そんな命中率の低い真似はしないさ。――人が、喉を正常に使えなくなるのはどんな時だと思う？」

「首を絞められたり、何かが詰まったときとか？」

自信なさ気に愛が呟く。

「そうだよ。喉に何か異物が入り込むと誰もが咳き込み声を出せなくなる。それを引き起こすんだ。この倉庫には丁度石灰の詰まった袋や灰、砂なんかがある。それをぶちまければあの蛙人間の大きな丸い口なら、きっと簡単に呼吸困難になるだろうぜ」

武田は部屋の奥に積んである米入りの袋のような物に視線を向け、そう言った。

「なるほどな。リスクは高いが確かに効果はありそうだ。だが一体誰がそれを奴にぶちまける？」

石炭を確実に口内に侵入させるには少なくとも蛙人間まで二メートルか三メートルの距離に接近しなければならない。さらに気づかれずににそこまでの位置に移動し、かつ投撃後は相手をおびき出しつつ無事にこの倉庫まで逃げ延びる必要もある。この危険性にいち早く気づいた南城は責めるように武田を見つめた。

鉄屑に満たされた大地――ゴミ山に囲まれた谷のような場所で、安形は無数に転がっている蛙人間の死体を一望した。

「全滅か、凄いな。さすが、黒服の最重要兵器か？」

息を整えながら皮肉交じりに背後に立っている黒髪の青年を振り返る。

青年は大量の汗を流しながら膝を崩した。

「どうした!？」

あまりに疲労している相手の様子が心配になり、安形は思わず駆け寄った。

「はあ、はあ……黒服の連中に、何か妙な注射を打たれた。多分……イグマ細胞を抑制する薬か何かだろう」

鋭はかなり悪い顔色で声を絞り出した。

「……——鋭……やっぱり本当にお前は化物だったんだな」

「騙して悪かった。だけど……白居の注意を削ぐにはどうしてもお前の存在が必要だった」

「俺の存在ねえ……一緒にこの町から出たことにしたかったんだろ？ 敵さんは全部見抜いていたみたいだけどな」

「——いや、それは予測ずみだ。黒服はこんな策に引かかるほど甘くはない。俺の本当の狙いは別にある」

「本当の狙い？ 何の事だ」

安形は詰問するように聞いた。しかし鋭は答えない。

「おい、俺を巻き込んでおいて今更秘密も何も無いだろ！ 本当なら今ここでお前をぶっ飛ばしてもいいんだぞ？ 罪も無い一般市民を何人も狂人化させやがって」

ギリギリと強く拳を握り込む安形。

「殴りたいなら殴ればいい。いくら痛めつけられようとそれだけは言えない。それを言えば——俺とあいつの全てが無駄になる」

「あいつ?」

「白居の存在を快く思っていない男だよ。俺の研究所脱出に協力し、お前への依頼を提案したのもそいつだ」

「一体誰だ?」

「それも言えない」

鋭は口を真一文字に結んで顔を僅かに逸らした。

「はあ、だったら俺はもう帰るぞ？ お前からの依頼は偽証だらけだ。こんな仕事やってられるか」

「虚勢は止める。短い間だけど俺はお前の性格を理解しているつもりだ。愛や佐久間、その他の人間をこのままいしていく気か？ そんな真似出来ないだろ？」

安形は言葉を返すことが出来なかった。

「悪いようにはしない。たった一つだけ仕事をしてくれ。それさえ終わらせれば、この町のミミズは全て解除する」

「今ここでお前を倒した方が早いさ」

怒気を含んだ表情で安形は鋭を睨んだ。

「俺を倒してもミミズは行動停止なんかしないさ。寧ろ命令が消えてこの感染範囲をこの町以外にも広げるようになる。今お前が選べる道は二つだけだ。ここで俺や他の人間を見捨てて黒服支部に帰るか、依頼を続行するかどっちかだ」

佐久間や愛を見捨てて帰れるわけが無い。安形の中では最初から答えは決まっていた。鋭から情報を引き出すためにワザと話を長引かせていたが、もうこれ以上迫っても何も得られそうには無い。盛大に溜息を吐くと、面倒くさそうに攻撃態勢を解いた。

「……仕事って何だ？」

鋭はほっとしたようにニヤリと笑うと、汗の滴る顔を上げた。

「そもそもお前を雇ったのは俺の目的が白居の暗殺だと黒服の連中に思い込ませることだった。それが成功した今、もうお前の役目は終わったとも言える。連中も真実を伝えられたお前が俺に協力するとは考えないはずだ。——そこを利用する」

「言っとくが、幾らなんでも自分の組織のボスを暗殺することは御免だからな？」

「ふ、安心しろ。勿論そんなことはさせないさ。お前にやって欲しいことはもつと簡単なことだ」

鋭は軽く笑った。

「白居邸まで俺を連れて行って欲しい。イグマ抑制剤の所為で体が

思うように動かないんだ。しばらくはさっきの姿にもなれないだろうな」

「それじゃあ、黒村たちの思うまんまじゃないのか？」

「それが狙いなんだよ。奴らに俺がお前に捕まったと思い込ませるんだ。お前は素直に俺を引き渡せばいい。重要なのは、黒服にも俺が白居の暗殺に失敗し抵抗する意思が無いと確信させることなんだからな」

「一体白居邸で何する気なんだ？」

「俺は……黒服の計画を止めたいんだ。俺のこの体の技術を利用すれば、とんでもない兵器が生まれてしまう。白居邸にはその実験レポートや資料が山ほどある。取りあえずは、それを全て消すためだと思っていてくれ」

鋭は含みのある言い方をした。

「いくら聞いてももう無駄みたいだな。分かった。取りあえずお前を白居邸まで届けてやる。向こうに着いてからまた仕事をして欲しいとか言うなよ？」

安形は面倒くさそうに言うと、鋭の腕を肩に担ぎ、歩き出そうとした。だが、その前に耳元で鋭が呟いた。

「実は、もう一つだけ頼みたいことがある」

「い、いいか？ い、行くぞ！？」

佐久間は倉庫の扉を握り締め、自分の役目の危険性とプレッシャーで足をチェンソーのように細かく、高速で振動させながら背後の

三人の顔を見回した。その表情は恐怖を感じすぎて一部が固まり、逆に笑っているように見える。

「早く行け腰抜け」

南城は無表情でそんな佐久間の尻を蹴飛ばした。

「ガンッ」と扉に自分の頭が当たった音にビクつきながらも、その蹴りで覚悟が決まったのか、佐久間は肩に担いだ石灰入りの袋を握り締めると、ゆっくりとノブを回した。

冷やかな風が全身を包み込み、数メートル先でこちらに背を向けたまま立っている蛙人間の姿が視界を圧迫してくる。恋する乙女のように何度もまばたきしながらその後姿を見つめ、忍び足でこそと相手との距離を詰めていく。

——死ぬ、死ぬ、これ死ぬってマジで！

目を血走らせ、頭の中で悲鳴を上げながら、それでも高速振動する足を前に進める。今ならこの足で鉄でも斬れそうだ。

佐久間は自分の運の無さを激しく後悔した。

先ほど誰が石灰を撒くかで論争になった面々は、結局くじ引きという方法を取り、見事佐久間が当たりを引いてしまったのだ。武田側のくじなら安全だろうと勝手に良く分らない考えを抱き、自分に一番近いくじを引かなかったのが間違이었다。だが今更いくら後悔しようとももう遅い。既に自分は石灰を抱えて蛙人間に向って歩いているのだから。

——前を向いてろよ……振り向くな……頼むぞマジで……！

滝のような汗を鉄の臭いがする地面に垂らしつつ、佐久間はとうとう蛙人間から三メートル以内の場所まで辿りついた。

「アウウウウ……」

遠くの方から聞こえる激しい戦闘音に注意を引きつられているらしく、蛙人間はただじつと道の先を眺めている。これなら作戦を成功させる事ができるはずだ。

——よ、よし、行くぞ、な、投げるぞ！ こっち向くなよ……！抱えた袋の紐を解き腰元に構えると、佐久間は一気に投げようと

した。

「アウ？」

蛙人間が服の擦れる音に反応し振り向いた。ピッタリと佐久間の血走った目と視線が合う。

「あう!？」

佐久間は氷づけになったようにそのまま固まった。

突如真後ろに現れた存在に対し、蛙人間は驚いたようにその顔を見つめ飛び退こうとした。

「佐久間っ！」

このままでは作戦どころか佐久間の身が危ない。愛は咄嗟に倉庫から身を乗り立たせ叫んだ。

[illegible]

恐怖で頭がおかしくなったのか、佐久間は突如不気味な叫び声を放つと一気に袋を振りぬぎ、その中身の石灰を撒き散らした。油断していた蛙人間は頭からそれを被る。

「よし、いいぞ逃げろ！」

愛を強引に倉庫の中に引きこみながら武田が怒鳴った。

「つえお おお おお おおー！」

その声で我に帰った佐久間は腕を前後に振り乱し、超高速で今来た道を戻っていく。

「ウウウアツ、ウアツツ、アアア!？」

狙い通り気管に石灰の粉が侵入したらしい。蛙人間は歌う事が出来ず、咳き込むような鳴き方をしながら倉庫へ飛び跳ねた。

佐久間が倉庫の中に飛び込むとほぼ同時に蛙人間もその扉の前に降り立つ。だが部屋の中に踏み込むとすぐに、何かに足を取られ床に倒れ込んだ。南城が扉の死角から足を引っ掛けたのだ。

起き上がろうと踏ん張るものの後頭部を愛のブラックジャック、砂を込めた袋で強打され、再び地面に額を一体化させる。

その隙に、ガラスの破片に布やガムテープを巻いたナイフを持った武田が背中を滅多刺しにした。何度も何度も体を貫き花火のよう

な血が舞い上がる。

「アウウウウッ——！」

蛙人間は無理やり声を出そうと最後の力で顔を上げるも、その瞬間喉を掻き切られあっさりと絶命した。

眼前の光景の残酷さに佐久間と愛が顔を伏せる。だが、全身を血に染めた武田はそんな事などお構い無しに酷く低い声で唸った。

「はぁ、はぁ……今のうちに行くぞ」

その表情はもはや到底人間のものには見えなかった。

倉庫からおっかなびつくり屑鉄だらけの道を進み『夢遊町のトイレ』を抜けると、目の前に和洋中を混ぜたような何とも表現のしよりの無い大きな屋敷が踏ん反り返っていた。ボロボロの荒廃した建物が多いこの夢遊町の中で、唯一この屋敷だけが清潔さを携えている。

「こんなに近くまで来るのは初めてだけど……改めて見ると不気味な屋敷ね」

ゲームに出てくる魔王城のような圧倒的威圧感を感じ、愛は若干引いた。

「一応、住人は居ないことになっているからな。正面扉は開かない。着いて来い」

そう言いつつ南城は正面にある二メートル近い門を通り過ぎ右へ進む。門の前には廃車や車の残骸などが散乱しており、若干歩き難そうだ。

「——ここだ」

「二十メートルほど進んだ所にある小さな金属製の扉の前で南城は

止まった。

「いいか？ 言つとくが俺の恩恵があるからお前らはここに入れるんだぞ。そのことを忘れるなよ？」

「うるせえ、いいから早く開けるよ」

ぐだぐだと自分の権力を誇示されることに腹を立てた佐久間が、本当にうざったそうに急かす。南城はそんな態度を許すのは今のうちだけだ、とよくある脅し文句を述べながら扉の鍵を開けた。「ギー」と高い金属の摩擦音を鳴り響かせ屋内の光景が見えてくる。

「むん？」

中は真つ暗だった。

本来ならば真つ白な壁に挟まれた、絵などが飾つてある短い廊下が現れるはずだったが、闇が支配したかのように一面暗黒に包まれている。

「電気を切っているのか？」

普段とは大分異なつた光景に幾分の警戒心を抱きながらも、南城は足を踏み出した。

「お、おい……！ もしかしてここも狂人たちにやられたんじゃないかねか？」

「最後尾は嫌！」と四人の間に割り込みながら、佐久間が一番可能性の高い要因を提示する。

「ここには多くの俺の仲間や白居候の部下が居たんだぞ！ きつと電力節約とかでスイッチを切ってるだけだ」

南城は強い態度で言葉を吐いたものの、動揺しているのは誰の目にも明らかだった。

廊下を進むと暗がりの中に二つの扉が浮かんできた。一つはそのまま正面に、もう一つは左側に付いている。

正面のは屋敷の反対側や非常階段へと通じている廊下に出るだけだ。南城は大広間へと繋がっている左の扉のノブを握った。

「もし本当に狂人か、さっきの蛙人間がいたらどうする？」

ノブを回そうとした瞬間、耳元で武田が囁いた。服に染み込んで

いるのか強い血の臭いが鼻につく。

「そんなときは……気づかれずに進むか、この廊下に立て込もるしかないさ。まあ、この扉は見ての通り見かけに気を使い直ぎてあまり丈夫じゃねえから……どっちみち逃げるはめになると思うがな」

つまり、もしこの向こうに敵がいた場合、一度扉を開ければもう後戻りは出来なくなる。南城の言葉に一同の顔色が変わった。

「よし、開けるぞ」

南城は出来るだけ物音を立てないように慎重に扉を開けた。冷房が入っているのか異常に冷ややかな空気が肌を撫ぜる。

そして同時に、武田の服から発せられている臭いとは比べ物にならないほどの強い血の臭いが一気に嗅覚を占領した。

「ここが白居邸か？」

東洋と西洋の文化が混じったような異様な屋敷を前にし、安形は自分が肩を担いでいる相手である鋭に聞いた。鋭は薄く瞼を開けながら肯定する。

「そうだ……右に回れ。正面は開かないはずだから……」

「大丈夫か？ 何かどんどん顔色が悪くなっているぞ？」

「心配ない。ただの……薬の一時的な抑制作用だ。時間が経てば元に戻る」

鋭はそう言ったが、安形にはかなり深刻そうな状態に見えた。体も痙攣しているしどう考えてもまともな反応じゃない。なるべく急

いだ方が良さそうだと思わずにはいらなかった。

「ん？」

足元に振動を感じ、安形は視線を屋敷から移した。何やら車のエンジン音のような音が聞こえてくる。

——黒村らか！？

咄嗟に隠れかけたが鋭を渡す事が今の目的だと思い出し、その場に留まった。

屋敷と平行するように並んでいる道路の先から一台の黒い車が姿を現した。車についてはよく知らないため車種は言えないが高級そうだということだけは分かる。その車は屋敷の正面扉の前、安形と鋭の目と鼻の先で止まった。

「ほう、律儀に出迎えか？」

予想通り、その中から黒村や曽根、本田が出てきた。自分たちの姿を見ても安形が逃げ出さないことからナイフは抜かず、笑みを浮かべて歩み寄ってくる。

「——……鋭を捕まえた。お前らに渡す。ちゃんと報酬は貰えるんだろうな？」

安形は事前に鋭と打ち合わせた通りの言葉を述べた。

「まさか本気でこちら側に付くとはな……まあいい。ちゃんと報酬はくれてやる。曽根、本田、鋭を受け取れ」

黒村が顎を上げると同時に、ハリネズミ頭の本田と、顔の全面を毛が一周しているような曽根が安形の肩から鋭を引き離れた。それを確認すると、自分の部下に対して命令するように言葉を続ける。

「これでお前は自由だ。帰るなり散歩するなり好きにしろ」

「あんたらはどうするんだ？」

「俺たちは鋭を一端白居邸の中に連れ戻し、身体拘束を行う。しばらくはここに留まることになるだろうな」

「俺も一緒に居ていいか？ 一応こいつに騙されて頭にきてたんだ。最後まで見届けたい」

「見届けるも何も別に殺すわけじゃない。拘束し、再調整するだけ

だ」

「いや、正直に言つと白居邸の中に興味があつたんだ。上司のキツネから色々と聞いていてな、ちよつとくらい見学してもいいだろう？」

キツネは黒服上部直属工作員のようなものだ。キツネならばこの白居邸が黒服ボスの物であると知つていてもおかしくは無い。鋭から聞いたとあつては情報漏えいを阻止するために殺される危険もあったが、キツネから聞いたとあれば黒村らも下手に処分は下せないだろう。安形は自分の境遇と上司の高名を上手く利用した。

「キツネに？ 本当か？」

何故か黒村は驚いたような表情をした。

「本当だ。後で本人に聞いてみればいい」

どうせその頃には自分が鋭に頼まれた最後の仕事は終わっている。安形はそれが分かつているから余裕タツプリに答えた。そう、次の一言を聞くまでは。

「いや、いい。今本人に聞く」

「は？」

予想外の言葉に安形は間の抜けた声を上げた。

黒村は自分の背後にある真っ黒な車に向き直ると、まるで誰かがそこに乗っているかのように扉を開け横にズレる。

——— ということだ？ まさか！？

安形が目を見開き見つめる中で、その男は車から降り立った。寝ていたのか眠そうに片目を擦っている。

「な……… そんな………！」

思わず一歩退く安形を他所に、その男はこちらを向くと楽しそうに笑った。

「クスクス……… やあ、安形さん。二週間ぶりかな？」

安形は鋭の計画の全てが初っ端から破綻したことを悟り、呆然とした。

< 第十章 > 最終手段

< 第十章 > 最終手段

「な、何でお前がここにいるんだ!？」

口元を引きつらせて安形は驚愕した。キツネは終始笑みを浮かべたまま距離を潰してくる。

「安形さんが裏切り者の依頼なんかを受けるからだろ? まったく受けるべきと受けないべき仕事の判断も出来ないのか?」

「……黒服メンバーが仕事を受けるのは、そのメンバーの任意に任されている。お前が呼ばれる理由なんてないはずだぞ」

「それは通常の任務の話だ。この場合は違う。今回の事件は黒服の存続にも関わってくる。——安形さん、お前がやった事は反逆罪に等しい」

「勝手なっ——」

「口答えはするな。僕は早く帰りたいんだ。それ以上何かを喋るなら容赦はしないぞ?」

「……っ……!」

安形は自分とキツネの実力差を嫌なほど知っている。何しろ相手は自分と截、翠を鍛えた本人なのだ。争っても勝てないことは目に見えていた。

安形が大人しくなったのを満足げに見ると、キツネは黒村に顔を向けた。

「さあ、行こう。あ、安形さんには後でお仕置きするから一緒に連れて行くぞ。文句はないな?」

黒村は黙って頷いた。

——くそ、キツネの前じゃ下手に動けない……どうすればいいん

だ……！？

安形は必死に考えを巡らせたが、何の妙案も浮かばなかった。

鋭から頼まれたもう一つの仕事は白居邸内の鋭に関する全ての資料や施設を抹消する手伝いだった。

イグマ抑制剤で極限まで弱っていた鋭を見れば、黒服の面々は誰もが油断するだろう。それを上手く利用し、意識を保ったまま鋭が研究室や実験室に入るときに、安形が事前に渡されたイグマ活性剤を鋭に注射することで鋭の体を本調子に戻す。そして自分の協力を隠したまま鋭に全ての資料や実験施設を破壊させるという計画だった。少々胡散臭い面もあるがそれが鋭が一度白居邸を脱走し、ミミズたちをばら撒き、自分呼んだ全ての目的となっている。

実験室脱走当初は感染者も少なく白居邸内の警備も嚴重であり、何より強引に体を動かしたためとても破壊活動など出来る状態ではなかった。だから鋭は体の回復を待ち、狂人たちを増殖させ念入りの作戦を考えた。

普通に自分が白居邸を強行突破しても、防犯機能や黒服の実力者たちが立ちふさがる事は明らかのため、ワザと自分はここから離れようとしていると示し、黒服の一構成員である安形に依頼を送ったのだ。安形と合流してからは逃げようとする素振りを見せつつ、白居学の暗殺をほのめかした。そうすれば白居邸内の戦力を削ぎ、感染者を増やす時間稼ぎにもなるし、運がよければ本当に白居を殺せる可能性も上る。そして何より自分の真の目的が資料や設備の破壊だということを隠し、相手に警戒を抱かせない状態での白居邸侵入を可能にさせる。つまり、白居の暗殺が目的だと黒服らが勘違いしていれば、破壊活動がかなり楽になるのだ。

だが、キツネが登場したことでそれは不可能になってしまった。キツネの前でこっそり鋭にイグマ活性剤を打つなど見逃されるわけがないし、少しでも怪しい動きをすれば殺されてしまうだろう。安形は自分が截とは違い、キツネの気まぐれで黒服に入ったことをよく自覚している。元々超感覚者でもなんでもないので。自分程度

の実力者なら黒服内には数多く存在するし、幾らでも補充は利く。
だから何も出来なかった。

「……諦めるな」

表情から考えを読んだのか、鋭は肩を組んだまま青白い顔で軽く安形の肩を叩いた。

安形は一体どこからその自信がくるのか理解に苦しんだが、鋭の事だから何か他にも考えがあるのだろうと信じ、取りあえず先ほどからこちらを睨んでいる曽根と本田に鋭の身柄を渡した。

大広間に足を踏み出し、血の臭いに顔をしかめながらも、南城は冷静に指示を出した。

「ここから数メートル進むと右に小さな階段があつて、登っていくと二階に大きな両面扉がある。俺の仲間らが立て籠っているとしたらそこしかねえ。そこを目指すぞ」

「この臭いから考えるととてもお仲間が生きているとは思えないけどね……」

歩くたびにピチャピチャと何か生ぬるいものが足にまとまりつく。それが赤い色で無いことを祈りながら愛は苦笑いした。どうでもいいが、先ほどから腕を握り締めている佐久間の荒い息と、伝わってくる微振動が物凄く煩わしい。だが無理に振りほどけば絶対に佐久間が騒ぐことは予想が付くため、愛は我慢してそのままだった。あ

とでぶん殴つてやろうと心に秘めながら。

壁に手を付きながら進んでいくと突然その壁が無くなった。どうやら階段までたどり着けたらしい。南城はほっとした。

「待て、何か聞こえる……！」

上に上がろうとした南城だったが、背後から武田に引つ張られ壁際に押し付けられた。その直後、階段の上から誰かが降りてくるような足音が聞こえた。

もし狂人や蛙人間ならば絶対に見つかるわけにはいかない。愛と佐久間もすぐに壁にへばり付き、息を潜めた。

「ヒタ」、「ヒタ」、つと明らかに靴の音ではない異質な足音が段々と近付いてくる。

『それ』は階段を降り切ると、のそつと広間に全身を現した。

広間の中央は窓から夕焼けの光が入り、僅かに明るくなっている。愛たちは中央まで進み目視出来るようになった『それ』の姿を見て、今日何度目になるか分からない冷や汗を流した。

どう表現すればいいのだろうか。

楕円形の頭にはピエロのような笑顔が張り付き、それが基本の表情らしく、ずっと維持されている。首は通常の三倍か四倍の長さに伸び、頭と一緒に常に右左に揺れ動いている。まるで振り子のような動きだ。体も人間とはかけ離れ、肌は全て鮫肌のようなもので覆われ茶色く濁り、腕も長く肘が胸側に屈折し、手の平は象の足^{ふともも}ほどもあり鋭い爪が伸びている。大きな指が二本しかない足の太腿は極度の太股のように、間に円を描き、一種のハートマークを作っていた。

「何だあのボーリングのピンみたいな奴は……？」

ヒヨコヒヨコと左右に揺れている『それ』の頭を物珍しげに眺めながら、佐久間は身震いした。

「ど、どうやら一匹だけじゃないらしいな。見ろよ、さっきまでは気づかなかったがそこら中にいるぞ」

目が慣れたことで広間の中がよく見えるようになった武田が、部屋の奥や反対側の壁際を指指す。するとここまで会わずにこれたことが奇跡だとしか言えないほどの無数の振り子人間が広間中を徘徊していた。

「さ、幸いまだ気づかれてない。い、今のうちに階段を上がりました」

腰が抜けそうになるほどの恐怖を感じながら、愛が固まっている面々に呼びかけた。その言葉で我を取り戻した他の三人はこれまでに以上に慎重になり、階段を上り始める。上から別の振り子人間が降りてくれば終わりなのだが、それは運良く起こらなかった。

二階に着いても振り子人間の姿はあった。廊下の先の通路を横切っていく姿が微かに佐久間の目に映る。

「早く隠れようぜえ、両面扉つてどこだよ！」

目を潤ませながら佐久間は必死に頭を動かした。すると階段のすぐ左に大きな茶色い両面扉が陣取っている姿が見える。

「ここか！」

一目散に走り扉のノブに手を回す。南城は「鍵を掛けているに決まってるだろ」と佐久間の肩を掴んだが、全く聞く耳を持たれない。だが予想に反し鍵はかかっていたらしく、佐久間は扉をあつさりとは開け放った。

「助けっ……………！？」

——閉めた。

何か変なものがいっぱい中に居た。

茶色いボーリングのピンみたいな、ついさっき見たような何かが

うじゃうじゃ居た。

「何で閉めるのよ！」

愛がいつ襲われるか気が気でない様子で袖を引つ張ってきたが、絶対に開けるわけにはいかない。開けたら地獄を尋ねることになる。
「開けなさいって！」

ほつぺたを鷲掴みみされつねられたけど必死に我慢した。

「な、中にボーリングがああ！」

「はあああ？」

「だ、だから中にピンつがああああ……！」

「ああもうウザい！」

涙を浮かべて扉のノブにしがみ付く佐久間を押し飛ばし、愛は扉を開けた。

「一体何言つて……………へ……………？」

——閉めた。

もう、もの凄い速度で閉めた。光の速さで閉めた。

「ななななっ、何でここにもいんのよ！？　どうなってるの！？」

一気に顔の血液を首の下に落下させながら南城を睨みつける。

南城は扉の向こう側の様子を見てはいなかったが、二人の反応から状況を理解した。

「そんなまさかつ、ここまで侵入してるなんて…………」

ここは事件前によく白居候と食事や対談、仕事の交渉などをした会食場だ。自分の仲間たちもよくここでたむろし、設備や強度から考えてもここ以上の安全地帯は無い。そんな場所の中が化物だらけということとはつまり仲間は全滅したことになる。

「他に隠られる場所は無いのか？」

ショックを受けている間もなく、大声を出した佐久間と愛に黒いオラーを見せ付けながら、武田が聞いてきた。

「お、俺がこの屋敷の中を自由に移動できるのは一階と二階だけだ。ここはその中でももっとも頑丈で食料も蓄えられている部屋だった。ここが駄目ならもう隠れられる場所なんて…………」

「くそ、散々えばつといてこんなオチかよ！」

佐久間が怒り心頭の様子で怒鳴る。

「大声を出すな！」

その声が余りに大きかったため、武田は咄嗟に佐久間の首へナイフを当てた。自分の首にちくりと痛みを感じた佐久間は思わず言葉を飲む。

——こ、こいつ……本気だ！！

武田から伝わってくる殺気は明らかにただの脅しではない。これ以上自分が騒げば本気で殺そうとしていることをひしひしと感じた。武田の一喝も虚しく、扉の向こう側や階段の下が急に騒がしくなった。やはり大声でこちらに気がついたらしい。

「くそ、生き残れる可能性があったから俺はここまで来たんだ！よくもこんな目に追い込んでくれたな」

「着いて来たのはあんたの勝手じゃない！」

憎憎しげに自分たちの顔を見下す武田の八つ当たりにも、愛はかっとなった。

「煩い！ 安全地帯が無くなった以上、お前らと協力する筋合いは無い。——ここでお別れだな」

突然武田は佐久間の体を階段目掛けて蹴り飛ばした。唾液を吐き出しながら佐久間は階段の手すりに背を打ち付ける。

「っ何するのよ！？」

「精々奴らから時間を稼いでくれ」

愛の怒号を何吹く風とさらりとかわし、武田は走り出した。呆然とする一同を他所にその後姿はほとんど離れ、廊下の影に消えた。

「あの糞ガキめ——！ 走るぞ、さっきの奴等が来る！」

武田に囷に使われたことに気づき、怒りで顔を真っ赤にしながら南城が叫んだ。愛は急いでふらふらと揺れている佐久間の襟元を引っ張り立たせる。

手すりから下を覗くと、丁度三体の振り子人間が駆け上ってきているところだった。

「きゃあつ、来たあああつ！」

真横の両面扉も盛大に開き、同じ化物が溢れて皆一様に笑顔で頭を左右に振り迫ってくる。

あまりの気味の悪さに、愛と佐久間は絶叫しながら走り出した。南城は先に逃げたのか既に消えている。

——これならまだ狂人に追われる方がマシだった！

幾ら後悔しようとももう遅い。

無事に脱出できるかなんてもう二の次だ。「生きたい」、今はその一言に尽きる。

愛は目じりに涙を浮かべながら足を動かし続けた。

「何か下が煩いですね」

本田は目にかかった自分の跳ねまくっている髪を手で退かすと、怪しむように二階を見下した。しかし非常階段の真つ只中であるため勿論階段の腹しか見えない。

「ふん、大方生き残ってここに駆け込んできた奴等が騒いでいるんだろ。総括のことだ、鋭の武器である感染者が邸内に出たか、鋭がここに向っていると知った時点で何かしらの生物兵器をこの敷地内にばら撒いたのかもな」

黒村が事実を言い当てる。

「非常階段を通って正解だったぜ。もし一般階段を上っていれば今頃俺たちも一緒に叫んでいたはずだ」

「なるほど、さすが黒村さん。伊達に長い間黒服で働いているわけじゃないんですね。俺のキャリアを舐めんじゃないやねえってな。——あ、

三階に着きましたよ」

本田は黒村に賛辞の言葉を送りながら非常用扉を開けた。

白居邸は水憐島や紀行園などのレジャー施設とは違って一般市民が中に入ることはない。邸内に来る人間は殆どが黒服の関係者か、白居が個人的に関係を持つている人間だ。そのため通常は地下にある事が多い実験室や研究室も三階という高い位置にあり、自由に研究者たちに利用されている。だからこうして扉を開けるとすぐに真っ白な廊下が目に入り、その左右にはガラス張りの実験室が幾つも連なっている光景が見えた。

「セキュリティーガードは解除されているんだろうな？」

黒村は非常出口と廊下の間にある特殊強化ガラス張りの扉とその横の壁に付いてている機器をしかめ面で眺めた。

「電話で聞いたけど狂人に管理室を襲撃された影響で素通り出来るらしいぞ。普通に取っ手を引けば開くはずだ」

本田が何か言おうとしたが、その前にキツネが笑顔で答えた。
すると今までずっと黙っていた曾根が扉に近付き、無造作にガラス張りの扉を開けた。

「……開きました」

生まれつきなのだろうがむすつとした表情で振り向く。

「よし、研究室はすぐそこだ。科学者どもは白居総括といっしょに地下に避難しているらしいから、俺が直接護衛をしながら連れて来る。本田、曾根、お前らはキツネと一緒に鋭と安形の監視を頼んだぞ」

「——了解」

曾根と本田は既に任務達成に等しい状況にも関わらず、全く油断する気配を見せることなく真剣な顔つきで頷いた。

黒村が消えると同時に、安形はキツネの目を見はかりながら、本田に拘束されている鋭に視線を向けた。だが鋭はじつと黙想をするように瞼を硬く閉ざしている。

——このままだと本当に終わりなんだがな。どうする気なんだ？

やっぱり俺をまだ頼っているのか……？

もし鋭が、安形が何とかイグマ活性剤を自分に打つことを期待しているならば、残念ながらそれはとても叶いそうにはない。

キツネは車から降りたときからずっと眠そうにしているが、ああ見えて一度も安形を視界の外に出しては居ない。絶えず自分の見える位置に起き、さりげなく監視しているのだ。安形はまるで自分がガラス張りの部屋の中に閉じ込められているような気分を味わっていた。部屋の外には無数のキツネがニコニコ顔でクスクス笑いながら自分を見ている——そんな超絶不快な感覚。

瞬きの一つすら察知されていそうで、とてもじゃないが注射を打つことなんか出来そうにはなかった。

「どうした、安形さん。さっきからそわそわして……何か気になることでもあるのか？」

「……いや、総括の私設研究所である白居邸ですら、これほどのバイオハザードが起きると機能しなくなるんだな、と思うと何だか心配になってな」

「クスクス、それは当然だ。どんなに嚴重な施設だろうと、セキユリティーの高い屋敷だろうと物量攻撃には耐えられない。この夢遊町の住民の殆どが感染者となったんだ。一ヶ月前の二大事件の結果を考えれば職員の多くが地下に避難できている分マシだと思っけど？」

「マシね……被害者の数で言えば圧倒的にこの町の方が多いいけどな」
「何かを成し遂げるには何かを犠牲にすることが必要だ。鋭を捕まえるための生贄と考えればこの町の住民の命なんて易いものさ。少なくとも白居学にはな」

——物量攻撃……犠牲……。

キツネの言葉から鋭は自分の頭の中で何かが花開くを感じた。本田の腕の中で瞑想を続けたまま策を練ると、答えはすぐに出た。間もなく黒村が研究者たちを引き連れて戻ってくる。時間は無い。奴等がここに到着すれば、自分のこれまでの努力は全て水の泡だ。

現状を打破する方法はたった一つだけだった。だがこの方法は安形やここに逃げ込んだ愛と佐久間まで巻き添えにになってしまう。

『何かを成し遂げるには何かを犠牲にすることが必要だ』

キツネの言葉が脳内を駆け巡る。

——そうだ、俺はこの黒服の、白居の計画を阻止するために全てを犠牲にしてきた。個人の命よりも、多数の命、町ひとつの命よりも国の命だ。……安形たちには悪いが、全ては未来のためなんだ。俺の体の技術を利用した『あの計画』が成就すれば、もうこの国は終わる。……——やるしか、ない。

鋭はキツと目を見開くと、何かを決心したような強い眼差しで顔を上げた。その動きに気づき、安形は横目で鋭に視線を移す。鋭は安形の瞳を見つめると、立ったまま声を出さずに口元を動かした。

『注射を打て』

——え、この状態でどうやって!?

と安形は疑問の眼差しを返したが、鋭が答えるまでもなく理解する羽目になった。

突然幾つも窓ガラスが割れる音が聞こえた。

そしてその直後に無数の唸り声が屋敷中から響き渡る。そう、狂人たちの声だ。

「な、鋭！ お前!？」

安形は鋭が狂人たちをこの屋敷へ呼んだことに気づき、大いに驚いた。

「こ、この野郎！ この期に及んでまだそんな力がつ——」

本田は鋭を床に押し倒すと、曾根と顔を見合わせた。「どどどどつ」と地鳴りのような足音が聞こえてくる。

「ちくしょおお、来るぞ！」

左右の扉が激しく開け放たれ、狂人たちが実験室に囲まれたこの廊下の中へ飛び込んで来た。

「あああああああつ！」

操られているだけだと迷っている暇は無い。殺さなければ殺され

てしまう。本田と曾根の二人は必死にナイフを振った。

「何て真似を——愛や佐久間を殺す気なのか!？」

騒ぎに紛れて鋭の横に膝を着くと、安形はその首元を掴んだ。

「お前が俺に注射を打つまでの時間稼ぎだ! 早く活性剤を打て」

「……………つくそ!」

今ならキツネも狂人たちに気を取られている。安形は怒りを感じながらも小型注射器を取り出し、鋭の腕に打ち込んだ。

「ぐっ!」

鋭は体中を駆け巡る刺激に小さな悲鳴を上げた。

「さあ、早く狂人たちを外に追い出せ!」

階下の生存者たちが心配でしようがない安形は鋭を揺さぶりながら、血走った目で怒鳴る。だが鋭は立ち上がると同時に安形を突き飛ばした。

「悪いな安形、俺は狂人を呼ぶことは出来ても遠ざけることは出来ない」

「なっ!?!」

「全ては白居の計画を止めるためだ。理解してくれ」

「鋭!」

安形は渾身の力を込めて殴りかかったが、瞳を紫色にした鋭はあっさりとそれをかわした。

「お前には本当に悪いと思ってる。もし……………生きてまた会えたら必ず償いをする。——じゃあな」

「ま、待て!」

鋭を追おうとしたものの、直ぐに狂人たちに立ちふさがれ邪魔されてしまう。その間に鋭の姿は闇の中へ消えた。

「な、何で急に狂人たちが!？」

地下のシェルターから白居学の許可を取り、研究者たちと共に一階の廊下まで上った途端、黒村の目の前に無数の狂人がガラスを突き破って飛び込んできた。

研究者たちはそれぞれ野太い悲鳴を上げながら蟻の子が散るように逃げ惑う。

「おい、勝手に離れるんじゃない！」

黒村が幾ら叫んでも、恐怖に支配された彼らの耳には届かない。すぐに皆白居邸の中へ散り散りになってしまった。

「くそ、腰抜けどもが！」

舌打ちしながら背後から肩に食いつこうとした一体の狂人の腕を掴み、引くと同時にその首の動脈を切り裂く。狂人は血のシャワーを黒村に浴びせながら床に体を墜落させた。

「鋭の仕業だな!？」

真っ赤に染まった顔で次々に狂人を捌きながら後退し、狂人が大量発生した原因に思いを馳せる。

するとその言葉を待っていたかのように狂人たちの奥から紫色の瞳を輝かせた鋭が現れた。

「科学者たちは逃げたのか……まあいい。どうせすぐに全滅する」

「お前……抑制剤の効果で動けなかったはずだ。その元気な姿はどういうことだ？」

「俺を甘く見すぎだな。仮にもお前の組織の最重要兵器なんだぞ。ただの抑制剤なんかでくたばってたまるか」

「……本田たちはどうした？」

「全員殺したって言ったらどうするんだ？」

鋭はニヤリと笑った。

「……本田はともかくキツネがお前を見逃すはずがねえ。まさか、お前ら……」

黒村が全てを言い終わる前に鋭は床を蹴った。

壁の上を大地のように跳ね、一気に黒村の背後に降り立つ。

「ぐおお!？」

真横の壁が爆発したように碎かれる。無意識のうちに屈まなければ黒村の首は根こそぎ吹き飛んでいたかもしれない。

ホツと一息つく間もなく鋭は続けざまに蹴りを繰り返してきた。

そのどれもが一撃で壁を粉碎するような威力だ。黒村は一発、一発を避ける度に背筋に冷たいものが走るのを感じた。避けきれない攻撃は狂人を盾に使い何とか実を守るも、このままではいずれ追い詰められるのは明白だ。体中を汗でびっしょりにしながらも必死に反撃を試みた。

「この糞ガキめっ!」

鋭の拳が盾にした一体の狂人の胸を貫くと同時にその狂人の体をひねり、鋭の腕を固定しつつナイフを前方に走らせた。だが鋭はその攻撃をもう片方の腕で受け止め、鼻で笑いながら黒村の腹を蹴る。「があっ!？」

黒村は勢いを殺しきれず見事に廊下の壁に背をめり込ませた。

「流石の黒服も一人だと大したことはないな」

余裕タツプリの笑みを浮かべると床に落ちていた黒村のナイフを拾い、握り締める。

「――舐めるなああ!」

壁から体を起こし立ち上がると、黒村は身を低くして水面蹴りを放った。しかしその足は鋭に命中することはなく空を切った。天井すれすれまで飛び上がった鋭は黒村のナイフを逆手に持ち、重力に任せて振り下ろす。

「終わりだ」

紫色の瞳が静かに相手の最後を告げた。

<第十一章>錯綜する思い

<第十一章>錯綜する思い

白居邸三階、実験室。

安形、キツネ、本田、曾根の四人は左右から迫り来る狂人の群れを必死に薙ぎ払っていた。

もつともキツネだけは笑顔で余裕たつぷりの様子だったが。

「切りがないつすよ!? どうします?」

廊下の道を曾根と共に塞ぐように立ち、背後の安形と背中を合わせながら、本田は頼るようにキツネに助けを求めた。

「クスクス、倒して進むしか無いだろ? このままだと白居さんが殺されるかもしれない。鋭の目的は白居さんの殺害ということになっているからな」

「倒すって——これ以上は捌き切れませんよ! あんたと違って俺は天才でも、英才教育を受けたわけでもないんだ」

「……—ふう、仕様がないな、安形さん」

キツネはワザとらしく溜息を吐くと、真横で次々に狂人を殴り飛ばし気絶させている部下の名前を呼んだ。

「はあ、はあ、何だ、今手一杯なんだけど!」

「バキッ」と一体の狂人の顎をアップパーカットで打ち上げながら、安形は息も絶え絶えに答える。黒柄ナイフを使わないのはミミズに感染してしまった被害者のことを気遣っているからなのだろう。

「特攻してくれ」

「は?」

「いや、だから突っ込んでくれ」

「何言っているんだ——?」

「あ、心配ないぞ？ お前の犠牲は無駄にしない。必ず俺たちで鋭を捕まえるから」

「いや、そういうことじゃなくて……」

「早く行けって」

キツネは何の前触れもなく安形の背を蹴った。それも思いつきり。「ぐはあっ!？」

つんのめるように前方の狂人たちの真っ只中へと足を踏み出す。

——ま、まずい!

安形は咄嗟に前足に力を込めると、キツネに蹴られた勢いのまま数時間前のデパートでの行進同様、タツクルを繰り出した。猛牛のようなその一撃に、一番近くに居た狂人が吹き飛ばされる。

前傾姿勢になっているためこのままでは倒れてしまう。安形は仕方がなしに片足を前に進め、自然とさらに狂人たちの中に踏み込む羽目になってしまった。

「おお、やる気満々だな」

何を勘違いしたのかその様子を見て嬉しそうに微笑むキツネ。安形は内心涙を飲みながら馬鹿のように必死にタツクルを続けた。

「狂人たちの包囲が割れた! 曽根、行くぞ」

安形の特攻によって一時的に狂人たちの輪が開いたことを見計り、本田が走り出した。だが、安形が動きを止めたためすぐに止まらざる終えなくなった。

「もう無理っ!」

数度の狂人たちとの激突で勢いを失ったらしく、安形が悔しそうに歯を噛み締めた。その目の前には実験用の計測機器を振り上げている一体の狂人が居る。安形が傷を負うのを覚悟しそれを素手で防ごうとした瞬間、突然真後ろから無数の黒い影が飛来し、目の前の狂人を貫いた。

「最近は何距離戦が多かったから……これを使うのは久しぶりだ」キツネは崩れ落ちた狂人の体に刺さっているものと同様の小型ナイフを構え、先ほどの特攻によって体勢を崩された狂人たちに向っ

て躊躇なくそれを連投する。しかも自分の背ろから襲いかかってくる狂人たちをかわしながらとその動きは神業に近い。

安形、曾根、本田の三人はキツネの援護によって何とか実験室の出口へとたどり着く事が出来た。ここは先ほど上がってきた非常用階段がある扉とは廊下を挟んで逆の位置に存在し、資料室へと続いている。

「キツネ——！」

無事に扉を開け資料室へと入り込むと、安形はキツネを振り返った。キツネはまだナイフを投げ続けている。

こちらに来るように促そうとしたのだが、扉に向って先ほど退けた狂人たちの生き残りが迫ってきたため本田が安形を無視し、強引に扉を閉め鍵を掛けた。

「お、おいまだキツネが——！」

「相手は悪魔じゃないんだし、あいつなら大丈夫だろ。化物並みの強さだからな。……それより鋭を探すぞ。お前、こっちの見方でないだよな？」

こっちとは勿論黒服側のことだ。

「——……ああ」

「よし、じゃあ手分けして探すぜ。いいか、見つけたら殺す気だから。何がなんでもあの蛇野郎を捕まえるんだ」

返事を待たず颯爽と二人はその場を離れた。白居の身を心配しているのか、任務失敗の咎が恐ろしいのか。恐らくは後者だろうが。

「……俺も二人を探さないと……」

鋭が呼び込んだ狂人はこの三階に居たものだけではないはずだ。

佐久間と愛の身が心配になり、安形は脇目も振らず駆け出した。

「ん？」

振り子人間から逃げ、非常階段を使って一階に下りてきた武田は、廊下に出たところで床に倒れている一人の男を見つけた。

警察特殊部隊の服とカジュアルなジャケットを足して二で割ったような、普通は中々無い服装——黒服を纏った男、黒村鉄心だ。

その腹部には自身の物であろう黒柄ナイフが深々と刺さり、微かに赤い花を服の上に咲かせていた。

「あんたはた確か……」

——安形と鋭を追っていた男。

武田が狂人化しているのかどうか不安げに見つめていると、黒村はゆっくりとこちらを向いた。

「——……………デパートに居た生存者か」

荒い息遣いで言葉を吐く。

「まさかこれだけ狂人が襲来しているのにまだ生き残っていたとはな。生存力の高い奴だ」

「狂人が襲来？ 何の話だ？」

「ふん、まだ遭遇すらしていないのか……本当に運がいい。おい、お前、頼みを……聞いてくれるか？」

「……頼み？」

「俺はこの通りまともに動けない状態だ。もう、長くない。……変わりにやって欲しいことがある」

そこで黒村は僅かに血を吐く。

「悪いけど俺は自分の事で精一杯なんだ。あんたに構うことなんか出来ない。他を当たってくれ。二階にいい感じの偽善者が二人ほど居るぜ」

武田は瀕死の黒村を前にしても冷静に自分の利を取った。そのことを理解した黒村はこの前に居る男が限りなく自分たちに近い存在であると見抜いた。

「ふ、勿論タダでは言わねえよ。お前……この夢遊町から脱出して生きていく当てはあるのか？ いや……その前にここから脱出出来る自信があるのか？」

「何が言いたいんだよ？」

「今俺が言ったことを全て叶えてやる。お前が協力するのならな。」

——まあ、社会的に死を迎えることにはなるが」

これは事実上黒村からの黒服へのスカウトだった。脱出とその後の生活を保障する代わりに自分の頼みを聞き、黒服の仕事をしてくれ。簡単に言えばそういう意味だ。

「あんたらの仲間になれってことか？」

「どう捉えてもいい。イエスか、ノーかだけ答えろ。俺が意識を保っていられる時間には限りがある」

武田は黙り込んだ。

この案に乗れば脱出も生活も保障されるらしい。勿論都合よく利用され捨てられる可能性も無きにしも非ずだが、男の口調からだとも本気で提案しているようだ。自力でこの町を脱出するのは今では困難を極める。即座に了承しても良かったのだが、『生きる』ことを最大の目標としている武田にとって、仕事で常に命の危険を伴うらしき黒服への参入は一考を必要とした。

その考えを読んだのか、黒村は血の滲んだ口で甘い言葉を囁く。

「心配するな。脱出後は事務職に着くことも医務職に着く事も出来る。何処に配属するかはお前の自由だ」

別にこれは嘘ではない。確かに黒服に入ったメンバーは自分の立ち位置を選ぶ事が出来る。もともと殆どのメンバーは最初から専門の部署を目指して訓練を受けたり、スカウトされているため、暗黙の了解でそれ以外の部署を選ぶ事は無いのだが。それに使えない人間ならば直ぐに実験材料として処分される。黒村としては武田のその後など正直どうでもいい。今、この場でやらなければならぬことを成し遂げることさえ出来ればそれで十分なのだ。

「……分かった。それで頼みってなんだよ？」

現状では生き残るためにはこの案に乗るしかない。例え男の言っていることが事実でなくとも話を聞くだけなら損はないし、その仕事の内容によつては本当に請け負つてもいい。武田はざる賢く頭を回転させながら黒村の頼みを聞いた。

「安形と……他の生存者たちを殺せ。あいつらは鋭と手を組んでいる可能性がある」

イグマ抑制剤で動きを封じた感染者が短時間で動き出すことなど有り得ない。これまでのことから考えると鋭の復活にはほぼ間違はなく安形が関係しているはずだ。復活直後の鋭を取り逃がしたキツネもかなり怪しいのだが、武田にキツネを倒させることは酷な話である。僅かでも鋭の仲間を削ぎ、白居学に対する脅威を減らすために黒村は彼らを殺すことを選んだ。例え証拠も何も無くても関係ない。もし本当は安形たちが白だとしてもそんな事はどうでもいい。怪しいければ潰す。それが黒服の、白居の安全に繋がるのだから。

「あいつらを……殺すのか」

「何だ？ 一時的とはいえ、一緒に行動していた人間を傷つけるのは抵抗があるか？ それとも自分の身の安全よりも仲間が大切か？」

黒村は直感的に武田が鋭に協力していないと見抜いていたが、相手を焚きつけるためにワザとそう言った。

「まさか、俺は心から好きだった恋人を殺した男だぞ？ ——……いいぜ、殺つてやる。それで俺の安全は保障されるんだな？」

「ああ、こいつを持って行け。白居候か、黒服の人間に見せれば信用するはずだ。それに……もし信用しなくてもそれを持っているということは俺を殺して手に入れた実力者だとも考えられる。きっと素直にお前は黒服へ入れるさ。勿論、その場合は他の生存者らを殺したつていう事実がある上での話だがな」

黒村は複雑そうな表情を浮かべながら自分の腹部に刺さっている黒柄ナイフを指差した。

「もう腕に力が入らない。お前が……抜いてくれ」

最後にそう言うと目を瞑り血の気の無い青白い顔を天井へ向ける。

「何でそこまでその黒服とかいう組織に尽くすんだ？」

黒村の腹に刺さったままの黒柄ナイフを握り、不思議そうに武田は尋ねた。崇高な理想でも、信念でもあるのかと思ったのだが、帰ってきた言葉はいたく単純なものだった。

「家族が……人質に取られているんだ。俺がヘマをすればあいつらが悲惨な目に合う。お前が仕事を手伝うことで俺の失敗の影響が少なくなるんだよ。運良く鋭を倒してくれたらもっと良いんだけどな」

「……そうか」

武田は一気にナイフを引き抜いた。途端に無数の血液が飛び出し、両腕と黒村の腹部を濡らす。

——あばよ、晴香、啓二。

内臓を引きずりナイフが抜かれる痛みを意識が飛びかける。

黒村は事切れる直前に武田の声を聞いた。

「俺にはもう誰も居ない。俺を縛ることなんて不可能だ」

それはどこか自嘲のような、悲しい響きを含んだ言葉だった。

武田がしばらくその場にたたずんでいると、何時の間に来ていたのか南城が背後から声をかけてきた。

「殺したのか？」

「……介錯をしたただだよ。南城、あんた俺の後を追ってきたのか？」

自分はもう南城や佐久間たちに何の価値も意味も見出してはいない。あの時その意思表示はしっかりとしたはず。武田は何故南城がこうして自分を追ってきたのか分からなかった。

「まあな。あの騒音二人組みと居るよりは、お前と一緒に居た方が生き残れる可能性は高い。武田あ、俺はお前のことが気に入ってるんだ。俺の部下にならねえか？」

「は、冗談だろ？」

「冗談なんかじゃねえよ。お前の機転や考え方は役に立つ。なあ、俺はこの夢遊町以外にも色々と伝手や仲間が居るんだ。脱出後は幹部として迎えてやるよ。どうだ？」

猫なで声で聞く南城。若くて美しい女性が出すならともかく、アフロの中年オヤジが出しているため不気味でしかない。

『論外だ』と武田は思った。

例え黒村から黒服への勧誘を受ける前だとしてもこんな提案には乗らなかつただろう。まず第一にこちらにメリットが何も無い。脱出させてくれるわけでも、それに繋がる足してくれるわけでも、安全な場所を知っているわけでもない。南城自身はお得な提案だと思っているらしい幹部への勧誘にしたって、武田からすれば迷惑な話だ。何で折角脱出したのにわざわざそんな裏の、しかも不安定な組織に入らなければならぬのか。逆に大金を積まれても入るのは御免だ。がここでそのまま自分の考えを伝えるのは宜しくない。武田は南城の提案を受け取るような素振りを見せつつ、そつと黒柄ナイフを握った右腕を背に隠した。

無数の感染者が追って来る。

ボーリングのピンのような体型をした化物が頭と首を左右に規則正しく揺らし、追って来る。

満面の笑顔を振りまきながら。

その光景は正直気持ち悪すぎた。

愛は廊下を一直線に突き進みながら、なるべく後ろを見ないよう

に徹した。佐久間も同様に真つすぐ前だけを見ている。

「あ、姉御お——俺、も、もう息が……」

「頑張つてよつ、追いつかれちゃうでしょ！」

ぜえぜえと過呼吸しながら足を止めかけた佐久間の手を握り締め、愛は尚も必死に走り続けた。これまで朝からずつとこの町の中を逃げてきたため体力は限界に近かったのだが、当然止まる事など出来ない。それは死と直結している。

「一階はさっきの感じだと、あの振り子人間たちが居るから逃げられない。上に行くしか無いわね」

「でもそれってますます追い詰められるんじゃない？」

「しょうがないでしょ、他に行き場が無いんだから。最悪、隣の家に飛び移ってやるわ」

「この屋敷の隣つて一階までしかなかったけど……」

「う、煩い！ とにかく上に行くの！」

呆れるような佐久間の目から視線をそらし、愛は階段を探した。

今二人が居る場所は先ほど武田と別れた廊下から幾つかの扉を抜けた先にある別の廊下だ。二人は追ってくる振り子人間を振り切つても、すぐにまた別の振り子人間に遭遇してしまうという因果を繰り返し、何とかここまで逃げ続けていた。

「在った！」

曲がり角を曲がった途端、目の前に三階への階段が飛び込んできた。あれを上れば三階へ行く事が出来る。愛は嬉しそうに、佐久間の腕をより一層強い力で引っ張った。

「ん？ ちょっとストップ姉御！ ま、前見ろお」

「何よ？」

佐久間が階段の方を指差して何やら顔を青ざめたため、愛は怪訝そうに顔の向きを変えた。

「な！？」

斜め下、一階から無数の狂人たちが競うように階段を駆け上がって来ていた。それもかなりの数だ。

「どうやって中に!？」

裏口はしっかりと鍵を掛けたし、正面扉もちゃんと塞がれていた。中に狂人が入ることなど出来るはずが無い。

「あの傷、きつとガラスを突き破って来たんだ、さっき見た感じだとこの一階のガラスは普通の家庭で使われるものと同じみたいだったし」

「ああううあああつ！」

狂人たちはとうとう階段を上り切り、廊下にその身を乗り出した。と、とにかく逃げるぞ！」

先ほどとは逆に佐久間が愛を引っ張り来た道を戻り出す。だが、その逃避行はすぐに終わりを迎えた。正面から笑顔の振り子人間たちが走って来たのだ。

「こつちもかあああ!？」

——もう駄目だ！

二人は自然と抱き合うように身を伏せしやがみこんだ。すぐに身に降りかかるであろう苦痛を予想し、恐怖に体を震わせる。振り子人間の足音が、狂人の鳴き声が迫ってくる。瞼を硬く閉じ、最後の瞬間に備えた。

だが次の瞬間、何故か狂人と振り子人間たちは激しい殺し合いを始めた。

「ああうあああううああああつ！」

「チャアアアアアツ！」

お互いに威嚇の雄叫びを上げ、相手の肉を引き継ぎ、喉を切り裂く。その動きには何の躊躇もない。

「——どうなってるの!？」

佐久間と抱き合いながら愛が心底不思議そうに呟いた。

「愛さん、佐久間——！」

突如どこからか安形の声が聞こえた。

振り向くと、三階から駆け下りてくる筋肉隆々の男の姿が見える。
「早く逃げるんだ！」

安形は狂人と振り子人間の騒乱の中に飛び込み、二人の前まで来ると、その肩を掴んで立ち上がらせた。

「安形さん、これは一体――？」

すぐに走り出した安形を追いながら、愛が混乱した目を向ける。

「鋭が狂人を呼び寄せたんだ。もうこの邸宅中に徘徊している」

「な、何であいつがそんなことするんだよ？」

鋭と友情を育み、一緒に脱出することを願っていた佐久間は、安形の言葉が信じられなかった。

「複雑な事情があるんだ。後で詳しく話すから今はとにかく走れ」

「何だよ複雑な事情って……」

納得がいかないように下を向く佐久間。その様子を見た安形は胸を痛めた。

鋭は自分たちの命よりも復讐を取った。ただそれだけだ。黒服に籍を置いている安形にとって、それはすぐに受け入れる事ができた事実だったが、一般人の、しかも鋭と友情を結んでいた佐久間がその事を知れば大きなショックを受けることは目に見えている。だから安形はあえて説明をしなかった。

「ところで何であいつら同士討ち始めてるの？」

三階への廊下の前まで来ると、愛が一旦背後の二種類の化物たちの争いを指差して尋ねた。

「――……狂人は鋭に自分たち以外の全ての生き物を抹殺しろと命令されている。対してあの振り子みたいな茶色の化物は純粋に本能に従っただけだろうな」

「本能？」

「さっきの蛙人間もそうだけど、イグマ細胞の保有者は安定した細胞を求めて純粋な人間や動物を襲うっていう特性がある。狂人はただ体に乗っ取られただけの『人間』。比率的にはイグマ細胞の割合は一割もない。振り子人間たちにとって狂人はきつと人間と変わらないんだろう」

「ってことはどっち道私たちにとっても危険なのね」

僅かな望みを期待した愛はその事実にがっかりした。

「つまずい、何体か追って来たぞ！」

こちらに三人のご馳走が居る事に気づいたらしき三体の振り子人間が、物凄い速さで接近していた。安形たちは慌てて階段を駆け上りだす。

その時、ほぼ同時に一階から別の振り子人間に追われた武田が現れた。また狂人を殺したのか腕周りの服の色がさらに赤くなっている。

「あ、この野郎っ！」

階段の上と一緒に駆け上がる武田に佐久間がガンを飛ばしたが、全く相手にされなかった。

「安形、あんたも無事だったのか」

「ああ、まあなんとかな。南城はどうしたんだ？ お前と一緒に先に逃げたって聞いたんだけど」

「さあな、気がついたら居なくなってたよ」

「……そうか」

安形は少しだけ悲しそうに眉を歪めた。

三階に上がるとすぐ目の前に資料室があり、安形たちはそこに飛び込むと素早く鍵を掛けた。ここは実験室と直列に繋がっており、つい先ほど安形と本田たちがキツネを囿に逃げ込んだ場所だ。中は資料室と言っただけあって、まるで部屋を囲むように無数の本棚が立ち並んでいた。

「はあ、はあ、これでひとまずは大丈夫だろう」

息を整えながら安形は本棚の前に置いてある椅子に座り込む。

「ドンドン」っと扉が激しく叩かれた。振り子人間たちが追いついたらしい。

「ここも長持ちしそうにないな……そっちの扉から逃げられそうか？」

実験室の方を眺めて佐久間が呟いた。

安形は静かになっっている実験室の中が気になり、椅子から立ち上

がると扉に耳を当てた。

「……物音はしないな。ついさっきここで俺の組織の人間が一人残ったはずなんだけど……」

ゆっくりと鍵を開ける。

「おい、何するんだ？」

安形の行動が理解出来ず、怒りの表情を浮かべながら武田が身を構えた。

「大丈夫だ。誰も居ない」

慎重に部屋の中を見渡しながら安形が呟く。緊張した表情を浮かべていた一同は溜息を吐き、体の力を抜いた。

——キツネはやっぱりもう居ないか。

ひよつとしたらキツネがまだここに居るのではと一瞬思った安形は、がっかりとも、安心とも区別のつかない複雑な感情を抱いた。

部屋の中の景観は先ほどとは打って変わっていた。無数の狂人たちの死体が床や壁の上に無造作に連なり、高価で貴重な無数の実験機器は戦いに巻き込まれたのか、狂人に破壊されたのか全てガラクタ同然の状態になっていた。これではもう二度と使用することは出来ないだろう。

「その階段から逃げられそうじゃね？」

佐久間が奥の非常階段を見て若干表情を和らげた。だが安形はこの階段を利用することを否定した。

「あその階段は一階に繋がってるだけだ。今や夢遊町中が狂人で埋め尽くされているんだぞ？ この白居邸から出るのは危険ではない」

「ここも十分危険だろ」

「勿論それは分かってる。だがこんな状態の町中を逃げ切る自信なんて俺にはないんだ。事態を解決するには方法は一つしかない」

安形は悔しそうに顔を歪めた。

その表情から安形の考えを悟ったのか、暗い顔で愛が呟く。

「……鋭を殺すのね」

「……もう鋭の目的は殆ど達成された。これだけの大騒ぎを起こしたんだ。イミュニティーにもディエス・イレにも黒服が独自の兵器を研究していた事は知れ渡っているだろう。騒ぎが治まればこの町も白居学も監視されるようになる。実験機器が完全な状態ならまだ運び込むことも出来ただろうが、この感じだと邸内の殆どの研究施設が破壊されたみたいだ。研究や機器の情報を他の組織に渡さないために、黒服はこの町に留まるしなくなる。そうすれば自ずと研究内容も漏れ出し、黒服の立場は悪くなるはずだ」

「だったら殺す必要なんて無いんじゃないの？」

「勿論、俺だって話し合いで済むなら、鋭が狂人の解除を素直にやってくれるなら何もしないさ。だけど……あいつの正確からしてこれで終わると思えない。これ以上多くの人間を犠牲にすることになるのなら俺はあいつを止めなきゃならない」

愛と佐久間はうつむいた。

鋭はデパートで自分たちの命を救ってくれた。例えその危機の原因が鋭自身にあるとしても、あの時自分たちを助けようとした気持ちや思いに偽りはないはずだ。

鋭は精神異常者でも、殺人狂でも、己の欲望のままに生きるエゴリストでもない。黒服という組織の危険性を見抜き、その計画を止めるため、破る為に心を鬼にしてこの事件を引き起こした一、被害者。殺したくはない。しかし殺さなければならぬ。

その葛藤が二人に沈黙という行動を生ませた。

「そんなに悩むのなら何もしなければいいだろ？」

突然扉の鍵が閉まる音と共に武田の声が響いた。

「お、お前何してんだよ!？」

実験室の中にはまだ安形が一人だけ残っている。それを見た佐久間は怒鳴りかけたが、相手の懐から取り出された真つ黒なナイフを目撃した瞬間、口を閉じざる終えなかった。

「武田!？ それは――黒柄ナイフか？ 何でお前がそれを持っている」

安形は慌ててノブをガチャガチャと揺らし、ガラス窓から武田の顔を驚きに溢れる目で見つめた。

「何でつて頼まれたんだよ。お前らを殺せつてな」

「頼まれた？　——っ……黒村か！　何で俺たちを……」

「鋭の仲間かも知れないから念の為に消しとこうつてことらしい。ま、今となつてはこつちに協力してくれそうだったけど」

「話を聞いていたでしょ、安形さんを解放してよ！」

「無理だ。俺が黒服に信頼されるためにはお前らの死が必要だ。そう、『鋭の仲間』の死がな」

「こいつ——！」

佐久間が拳を握り締める。

「止めるよ。このナイフの切れ味は半端じゃないぜ？　南城なんかハムみたいにスパスパ切れた」

「な、南城を殺したのか？」

「ああ、俺の生存力をうまく利用しようとかホモみたいに擦りよつてきたからな。ウザったくて背中から一撃入れてやったよ。今頃は化物どものエサになつてんじゃないか？」

「何でそんなに平気で人を殺せるのよ！　あんた頭おかしいんじゃない！？」

武田は自分たちと同じただの一般人。ここの住民だったはずだ。いくらスラム街の中とはいえ、ここまで簡単に人を殺せるようになる理由が愛には分からなかった。

「愛さん、佐久間、鍵を開けるんだ——早く！」

このままでは目の前で二人が殺されてしまう。悲劇を恐れた安形は必死に扉に体当たりし、叫んだ。

「させるわけ無いだろ」

武田はナイフを引き、自分の顔の横に構える。ここは部屋の隅、しかも鍵の閉じた開かない扉の目の前だ。佐久間と愛がナイフをかわす隙間など無い。武田が本気で二人を殺そうとしているのならば、数分もかからず二人とも死んでしまうだろう。

——くそつ、どうすれば……——！！？

非常用階段を降りて資料室の正面入口へ回っても、結局向こうも鍵を掛けられている以上、何も変わらない。安形に出来るのはただこの分厚い扉を攻撃することだけだった。

「ん？ どうやら騒ぎすぎたようだな。安形、その非常用階段の扉に鍵が無かったことを後悔しとけ」

「何？」

足音にいち早く気づいた武田がそういうと、安形の背後にある非常用階段への扉が激しく開け放たれた。間を置かずに三体の振り子人間が一気になだれ込んでくる。

「三体も！？ あれじゃいくら安形さんでも——」

「愛さん、お前は自分の身を心配するんだな」

扉の向こう側で起きた安形の大ピンチを心配し、視線を自分から反らした愛に向って武田は躊躇なくナイフを突き出した。

「見つけたぜ」

既に太陽は沈み、月の光だけが明かりとなった白居邸の屋上。三つ在る屋根の間で柵に囲まれた二百平方メートルほどの広い場所。その中心に立っている乞食姿の男に向って、本田が冷ややかな笑みを浮かべた。

「何で俺がここに居ると分かった？」

屋上の入口から出てきた二人の黒服メンバーを一瞥し、鋭は静かにその紫の瞳を細めた。

「かなりの数の狂人たちを呼び込んだみたいだったからな。お前な

らきつと俺たちの処理は奴らに任せて、安全な場所に隠れていると思っただよ。鼠みたいにつてな。――案の定、一番地下から遠いここに居やがったか」

「終わりだ、鋭。どうやって抑制剤の効果を無効化したのかは知らないが、黒服から逃れることなど出来はしない。大人しく身を差し出せ」

珍しく曽根が威圧的な声を出す。

「お前らに俺を捕まえることが出来ると思っているのか？」

「出来るさ、昼には遅れをとったが、今度はあの時のようにはいかない。きつともうすぐ黒村さんもここに来る。三人でお前をとつちめてやるぜ」

本田は黒柄ナイフの切っ先を鋭に向けた。

「黒村か――確かにあいつの実力は高かった。だけど……」

鋭はもったいぶるように口を開く。

「あいつはもう俺が殺したよ」

そう言つて右手に持った漆黒の布切れを空高く掲げた。血に塗れた、黒村の服の一部を。

「なっ――……！」

言葉だけならまだしも、鋭が掲げた布切れは確かに黒服だった。

対刃、対衝撃に特化しているナグルファルの制服。

その証拠に布の端から鋼色の繊維が飛び出し、風に揺らされている。

「この野郎……！」

本田と曽根にとつて黒村の生死などどうでもいい。逆に早く死んで、その分の報酬が自分たちに回ることを願っていたほどだ。

だが、それはあくまで昼間までの話だった。キツネや白居学が出てきたことで、言われなくても自分たちの報酬がかなりの高額になった事が分かった。それはもはや仲間の死によつて得られる分配などどうでもいいほどの量だと。

だから鋭という強敵を前にした今、黒村の存在は必要だった。大きかった。

「三人だと勝てるんだったな。じゃあ二人だとどうなんだ？」
そう言つと、鋭は一気に床を蹴った。
真っ直ぐに——真っ直ぐに黒服の二人を目指して。

<第十二章>誰が為にそこに立つ

<第十二章>誰が為にそこに立つ

ほの暗い廊下の床上。アフロ頭の中年男が手足の捻れた無様な格好で寝ていた。

背には大きな刺し傷があり、まだ暖かい命の雫がこびり付いている。男の息は既に無く、見開かれた目は白濁し焦点が定まっていなかった。

ジャリッ――

元の名を南城と言ったその男の顔の横を、闇よりも暗い色の靴が踏み抜いた。

靴の主は自分の足が南城の血で汚れることなど全く意に介さず、何もその場に無いかのように平然と通り過ぎていく。

武田が去ってから先ほどまで無数の狂人がここを訪れていたはずなのだが、今はどういいうわけかただの一匹もその姿を見せなかった。何故ならば男の通った道に、全員ゴミ屑のように転がっていたのだから。

「そろそろクライマックスか」

その西洋風の緩い癖毛を風に揺らし、男は確信気に呟いた。

まるで自分が作成したゲームのシナリオを確認するかのように。

一度読んだ小説の内容を思い出すかのように。

クスクスと妙齡の女性のような笑い声を上げながら、男は満足そうに、釣りあがったその漆黒の瞳を天井に向けた。

鋭は全速力で曾根と本田に迫った。

屋上の荒い地面を両足で交互に蹴り飛ばし、相手が息つく暇もないくらい素早くその眼前に躍り出る。

いくら一般人よりも強かろうと、イミューニティーやディエス・イレ以上の武闘派集団だろうとも、黒服メンバーは所詮人間に過ぎない。自分のこの弄^{いじ}られ尽くした怪物じみた身体能力には決して適い
はしないと心の中で思っていた。

だが――

「ちっ！」

一瞬で勝負をつけるために放たれた鋭の入魂の一蹴りを、二人は
お互いを押し合うことでかわした。そしてそのまま屋上の左右に広がるように転がり、鋭を挟み込む。

「――黒服は傭兵集団だ。仲間が死ぬのはいつものこと。あまり俺
たちを甘く見るなよ！」

本田は余裕があるとは言えないが、かなり落ち着いた表情でそう
叫んだ。

――さすがに軽く見すぎたか……さつき黒村を楽に倒せたのも、
狂人集団の存在や狭い廊下ってことが大きかったからな。

「コキッ」と首を鳴らす。

同時に左から曾根が、右から本田がそれぞれ黒柄ナイフを構えて
飛び出してきた。いくら鋭でもまともにこのナイフの斬撃を防ぎき
ることは出来ない。デパートで感染した安形の一撃を防ぐ事ができ
たのは安形の意識が無かったからだ。もしあれが感染していない本
来の安形の一撃だったのなら、今頃は片腕を抱えて戦っていたかも
しれない。

鋭は両手の掌でそれぞれのナイフを反らすと、その手で二人の腕

を掴み、それぞれの進行方向に思いっきり引ぱった。

「ぬおっ!？」

曽根は間拔けな声を出して倒れてくれたが、本田は辛うじて踏みとどまり、反転し、こちらに再び踏み込んでくる。

「しつこいな。本当にお前らは……」

鋭は地面、屋上の入口と、飛び跳ねて本田の左横に移動し、そのまま肘打ちを浴びせようとした。だが本田もそれを予想していたように、首をいなすように鋭の肘をかわすとその先にある腕を掴み捻り上げた。しかし鋭は痛みに顔を歪めることなく、その捻られた動きと合わせるように宙返りし、捻られる前の状態で元の場所に再び降り立ち、本田の腹に膝を突き入れた。

「ぐふっ!？」

本田は大量の唾液を吐き出し、後方に吹き飛んだ。肩を屋上の柵に激しくぶつけ、腹の痛みに悶絶してる。

「化物じみた動きだろ？ 俺をこんな体にしたのはお前らだ。お前らが俺を怪物にした」

鋭は悪意のある視線を倒れている本田に向けた。

「……おいおい、げほっ、げほっ……俺たちに、八つ当たりすんなよ。鋭……お前をそんなにしたのは白居候と黒服本部の科学者たちだろ？」

「お前らも同罪だ。いや……もうすぐ同罪になる」

「はあ、はあ……あ？ どういう意味だよ？」

「白居がやろうとしていることが成功すれば、お前ら黒服メンバーは嫌でも人間の敵となる。そうなる前に俺が殺してやる」

「人間の敵？ 白居候が？ はっ、意味が分からないな。頭がおかしくなったんじゃないのか？ 狂人の親だけに」

「お前ら下っ端が知らないだけだ。興味があるのなら白居が草壁、キツネに聞いてみる。……当然、俺を倒せたらの話だが」

鋭はあからさまな殺気を放出しながら、本田に止めを刺そうと屋上の端へ向おうとした。しかし丁度自分の背後で倒れていた曽根が

起き上がりナイフを突き出してきたため、仕方が無くその歩みを止めた。

その隙に本田は何とか立ち上がる。

——まともにやってたら埒があかねえな。何か使えそうなものはないか……？

鋭が本田の攻撃を捌いている光景を横目に屋上のあちらこちらを見渡す。すぐに役にたちそうなのが二つ見つかった。大型の竿状アンテナとガスタンクだ。

「ガスタンクか……普通は貯水タンクがあることが多いけど、この場合は儲けだな。あれを使えば鋭を……」

頭の中で算段を企てていると、鋭に蹴り飛ばされた曽根が真横に吹き飛んできた。

「お、お前何普通に戦闘放棄してるんだ！？」

曽根は血で濡れた口でぜえぜえと息を吐きながら本田を睨む。

「悪い悪い、でもいい案が浮かんだぜ。もしかしたら鋭を上手く痛めつけられるかも」

「……どんな案だ？」

本田はこちらに近付いてくる鋭に注意をしつつ、簡単に説明を始めた。

「武田——くそっ！」

向こうの部屋の状況がかなり気になるところだが、安形は彼らに構うことは出来なかった。何故ならば狭い実験室の廊下で、三体の振り子人間が飛び掛ってきている真つ最中だったからだ。

振り子人間たちは満面の笑顔を右、左、右、左、とリズムに乗って揺らしながら、安形に爪や拳を突き出してきた。

「このっ——！」

先ほどのように己の拳で迎撃しようとしても、狂人と振り子人間とはその体の頑丈さも動きも大きく違う。安形がいくら殴打を加えても、全く苦しむ様子もなく平然と襲いかかってくる。

『悪魔』とは純粋なイグマ細胞に感染した人間の総称。その細胞の本能のままに人を襲い、他者の肉体を食らい尽くす。だが、今ここで目にしている振り子人間は違う。『悪魔』を、イグマ細胞を、殺人目的で改造し、生まれた黒服の兵器。身体能力こそ純粋な悪魔に劣るものの、その知能は高く、動きも統率が取れていた。

——こいつら、隣の資料室に張ってあったレポートで見た……黒服の最新実験体か！ たしか正式名称は『ソムヌス』だったか？

安形は隣の部屋に居た時に見た資料の写真とその内容を思い出し、舌打ちした。

黒服の腹部を振り子人間の大きな爪が裂いていった。そして糸を引くように僅かな血が跳ねる。

「チャアアアアアッ！」

「うわああああっ！？」

腹部の痛みに顔を歪めた瞬間、他の二体の振り子人間が背中にくっつくを浴びせてきた。避けることが出来ずに安形は体を床に投げ出してしまふ。

——不味い！

咄嗟に横に転がろうとしたが、生憎ここは廊下だ。転がって避けるスペースなどない。この状態では真正面から迎え撃つことしか方法が無かった。

振り子人間の爪をギリギリ黒柄ナイフで防ごうとしたが、予想よりも遥かに相手の力が強かったため爪を防ぐことは出来たものの、ナイフは後方——非常用階段の方へ吹き飛ばされてしまった。こうなればもはや己の肉体のみで何とかするしかない。直ぐに立ち上が

ろうと試みたが、状況をさらに悪化させる事態が起きた。

「な、何だ急に眠気が……！？」

突如頭に靄もやが掛かったように感じ、自分の体が思うように動かないことに気がついた。

——まさかこいつら……爪に麻酔液が！？

迫り来る振り子人間たちから仰向けのまま遠ざかりつつ、自分の傷と相手の爪に視線を走らせる。振り子人間たちの爪からは僅かに水のような液体が垂れていた。

獲物を弱らせてから食するのは野生世界の常識だが、この振り子人間の場合はかなり質たちが悪い。まるで蜘蛛のような手口だ。対象の動きを封じ、自由を奪ったあとに思うがまま、欲望のままに生きた生の相手を貪くちる。

考えるだけでも恐ろしい。

安形は唇を血が出るまで噛み何とか意識を保たせると、必死に黒柄ナイフの飛ばされた場所まで仰向けのまま後退しようとした。だが狂人たちの死体が無数に転がっているため、中々上手く進めない立ち上がればすぐに取りに行けるのだろうが、そんな隙など振り子人間たちは見せてはくれなかった。

「くそっ……！」

仕方が無く所持していた残りの小型ナイフ三本の中、二本を取り出し左右の手で握りしめる。黒柄ナイフと比べれば強度も長さも、切れ味も大分落ちるものの、そこら辺の包丁よりは対感染者戦に適している黒服専用の特注ナイフだ。先ほどキツネがホイホイと放り投げていたのも勿論これである。

「チャアー！」

先頭の一匹が突撃してきた。安形はその瞬間右手に持っていたナイフを今出せる最大の力で前方に放り投げ、その振り子人間の喉下に命中させた。振り子人間は苦しみ顔を歪めたのだが、ダメージはあまり無いようで、他の二体の背後まで後退すると再び攻撃態勢を取った。

所詮小型ナイフは威嚇と注意を引きつけるための物に過ぎないのだ。キツネのように無数のナイフを同時に投げつけるならともかく、安形は残り二本しか所持していない。あつと言う間に全てを使い切り、仕方が無く付近に転がっていた、恐らくは狂人が使用していたであろう金槌を拾った。

——どうすればいい？ どうすれば！？

自分の三年間の経験を思い出し何か良い手は無いかと探るが、考えれば考えるほどにこの危機を乗り越える方法が分からなくなってしまう。

自分の専門は後衛。前衛を援護したり、中衛の指示のもと前衛に引きつけられた獲物に止めを刺す役目。他の役割よりは乱戦に慣れている。だがそれも所詮は相手を罠に嵌めたあと、不意をついた状態などあからさまにこちらに有利な場合での話だ。真っ向から感染者の集団を打ち負かすなんてどんな黒服メンバーでも不可能だろう。もし出来る人間が居るとすれば、それは鋭のような『人間を止めた人間』だけだ。

一匹が頭上を飛び越え背後に移った。これで黒柄ナイフを取るにはこの振り子人間を倒すしかなくなった。

安形は前後どちらの相手にも対応出来るように体を半身にし、丁度壁を見るような体勢で左右に振り子人間が来るようにした。

資料室のほうからは何も聞こえない。ガラス窓もこの体勢では覗くことが出来ない。今頃二人がどうなったのか物凄く心配になる。

——早くこいつらを倒して武田を止めないと……！

まぶた
瞼が重い。

頭が霞む。

これ以上あの爪を受ければもう意識を保っていることは不可能だ。この戦いに勝利するには一撃も貰わず、かつ速やかに三体もの振り子人間を仕留めなければならぬ。

——絶望的だな。

安形は気が遠くなる思いがした。

「チャアア……」

振り子人間たちの包囲が狭まってきた。死の臭いが、気配が、空気が自分を包み込むを感じる。どう考えてもこの現状を乗り越えるのは不可能だ。荒い呼吸をつきながら、親友である截が助けに来てくれることを願った。

安形もキツネが現れた時点で何となく截が動きを封じられたことには気づいている。しかしこれほどの窮地にあつてはその在りもしない奇跡に^{すが}縋るしかなかった。

截、友、亜紀、そして自分。

あるとき生き残った四人の中で一番生存力が強かった截。彼が居れば今頃はこんな状況にはなっていなかっただろう。彼は誰よりも冷静で、誰よりも強く、誰よりも心に闇を持っていた。

だからこそキツネは彼に興味をもった。彼を仲間に引き入れた。

彼に自分の技術を教え込んだ。

自分に似ていたから。

才能があつたから。

闇を持つ者は絶望の中でも生きていくことが出来るから。

自分は何故黒服に入れたのか？ と考えることはよくある。その答えはいつも同じだ。

あの時、截の心は復讐という名の煉獄に沈み込もうとしていた。完全に『向こう側』の人間になりかけていた。キツネはそれを止めるために、截、いや——悟が完全に闇に落ちるのを防ぐために、自分という存在を利用したのだ。

自分が居れば截は人間でいられる。

闇に沈み込まなくて済む。

希望を持っていられる。

一人じゃないと思える。

もし自分が居なければ截は全ての人間としての感情、思い、心を捨ててまで復讐に走っていたはずだ。そう、まるでキツネのように常に作つたような表情をした人形、生きた殺人兵器になつて——。

——ここで死んだら截はキツネになつてしまふ……そんなのは御免だ。あんな気味の悪い男は二人もいない。

安形は截のことを考えると意識がはつきりしてくるのを感じた。

——俺はあいつから離れるわけにはいない。あいつを人間でいさせるためにも、俺とあいつの約束を果たすためにも。

自然と腕に力が籠る。

激しい興奮によつてアドレナリンが作用したのか、眠気が僅かに吹き飛んだ。

仁王のような表情を作り、左右の振り子人間に備える。

「死んで堪るかああ！」

安形は腹の底から叫ぶと隙が生まれることも構わず立ち上がった。当然、左から二体の振り子人間が、右から一体の振り子人間がその隙を突こうと一気に爪を突き出してくる。だがその爪は空を切り、振り子人間たちは互いの爪と爪をぶつけ合った。

安形は体を起こすと同時にガラス張りの廊下を生身で突き破り、廊下に隣接している無数の実験用小部屋の一つに飛び込んだのだ。

「ぐううつつ！」

腕、足、肩……体中にガラスの破片が刺さり、または皮を裂き、拷問器具に包まれたような痛みを感じる。しかしそんなものに苦しんでいる暇は無い。真後ろから凶暴な三匹の怪物が追ってきているのだ。

「らあああつ！」

続けざまに飛び込んできた振り子人間の顔面を、ホームランを打つように、振り返ると同時にハンマーで殴り飛ばす。ぐぼつ、と鈍い音を響かせながら飛んでいくその可哀想な被害者からすぐに視線を反らし、二体目にも同様にに殴りかかる。今度は簡単に避けられてしまったが、構わずその勢いのまま相手の頭上のガラスを砕いた。「チュアウアア!？」

いきなり真上から無数の透明な刃が降り注ぎ、振り子人間は一瞬注意をそちらに取られる。その機を逃すことなく安形はハンマーを

振り下ろし、相手の頭が下がるのに合わせて今度は膝でその顎を打ち上げた。さらにクラクラと揺れる振り子人間に止めのストレートパンチを浴びせ、廊下に吹き飛ばす。

「俺は死なない！ お前らなんかには殺されない！」

咆哮のような雄叫びを上げて元の廊下に飛び出す。今吹き飛ばしたばかりの振り子人間に馬乗りになり、その頭部に何度も何度もハンマーを振り下ろした。麻酔付きの爪で引っかかれようともお構い無しだ。

最後の一撃を相手の肉の見た頭蓋にめり込ませると、別の単体の攻撃を避けるためにそこから飛び離れる。

「くっ——？」

一瞬睡眠欲に負けそうになったが、自分の片腕をナイフで軽く切り、その痛みで持ち直した。

二体になった振り子人間はこれまでのように積極的に攻撃しようとはせず、様子を伺うように安形から数メートル離れた位置に移動した。相変わらずの笑顔だったが、少しだけその表情が歪こわになっていくようにも見える。

「どうしたああ！？ 来いっ！」

もはや安形は何を言うにも叫んでいた。そうして興奮を保っていなければすぐに麻酔の効果で倒れてしまいそうだったからだ。

二体の振り子人間は頭を揺らしながら同時に駆けて来る。それを見た安形は小部屋から見つけたアルコール瓶を足元に投げつけ、ポケットから取り出したライターで火をつけた。

今まさに獲物に覆い被さろうとしていた振り子人間たちはいきなり目の前に炎の壁が生じ、急ブレーキを足に掛ける。

安形は自分の服にも火が移っているにも関わらず、全く構うことなくそのまま動きを止めた眼前の敵に突撃した。

燃えながら突っ込んでくる決死の男に振り子人間たちは恐怖を覚えた。しかし逃げようとしても背後は資料室へと繋がる鍵の掛かった扉しかない。

「うおおおおおおおおつ！」

安形はアルコールによって赤い光を放っている黒服を脱ぎ、それを前方に投げつけた。視界を火の服で塞がれた振り子人間は、何もすることが出来ずにただ悲鳴に似た泣き声を出す。

その服を剥ぎ取った時にはもう遅かった。既に安形は懷に飛び込み、死を表すその暗色のナイフを振り子人間の腹に刺していた。

「チャアアアッ!？」

ナイフから逃れようと爪を伸ばしたが、その腕はハンマーで弾かれ無残にもガラスの壁を貫き、隣の小部屋と廊下を繋げただけで終わる。

そのうち爪に巻きついた黒服から火が移ってきた。イグマ細胞はたださえ火に弱いという特性があるのに、服にこびり付いたアルコールが垂れてきた所為でそれが回るのがかなり早い。着ていた人間だった時の服にも炎が感染し、あつと言つ間に全身を赤い殺し屋が包み込んだ。

安形は黒柄ナイフを抜き、その火達磨となった敵を横の小部屋に蹴り飛ばすと、煙と血に塗れた体で最後の一体を見つめた。

既に息は激しく切れ、体中が火やガラス、爪痕で傷ついている。眠気も限界に近いし、これ以上動ける時間は数えるほどしかない。

安形は自分の体に鞭を打ち、残る全ての力を使って足を踏み出した。

息を止め真つ直ぐに黒柄ナイフを突き出す。それがかわされるとすぐに大きな手の平と爪が飛んできたので、屈みながらハンマーで相手の腕を反らした。

死と隣り合わせの状況に何度も、何度も考えていた言葉が頭に甦る。

——何のために生を選び、黒服に入った？

遠い記憶もそれに追従する。

——何のために警察に入った？

振り子人間はすぐに腕を引き、次の攻撃を放つために力を溜めた。

―何のために今この場に立っている？

安形は両腕の武器を前方に構えそれに用心する。

全てはただ一つの理由。

自分の力を役に立てるため。

悲しむ人を見たくなかったから。

例え僅かでも己が犠牲になることで誰かの命が救われるのなら、それを可能にするために自分はこの場に立っている。

「チャアアア！」

連続して二本の爪が迫ってくる。

自分には特殊な感覚も優れた技術も、経験も何も無い。だけど、それでも誰かを助けることが出来るのなら――誰かを救うことが出来るのなら。

防ごうとした黒柄無ナイフが弾かれ、握ったハンマーの柄にひびが入る。

「――俺は決して諦めない！」

振り子人間の胸にはまだ小型ナイフが刺さったままだった。安形はそれを右手で掴み、固定すると、柄にひびの入ったハンマーをそこに打ちつけた。

ガアンッ！

「チャアアアアアッ！？」

打ち込むと同時に、耳元で銃声が轟いたような悲鳴が鳴り響く。

ガンッ！

「ツアアアアアアッ！！？」

声はどんどん大きくなっていく。

ガンッ！

激しく抵抗してくる体を全身を使って押さえ込み、さらに小型ナイフをハンマーで相手の体内に減り込ませる。

ガンッ！

ガン、ガン、ガン、ガンガンガンガンガン——

生きるとは自分で目的を決め、それに向って突き進む事。満足出来る死を迎えられるように励むこと。自分はまだ満足してはいない。ここで死んだら悔いだけが残る。

そんな死は。

そんな人生は。

そんな『生』は御免だ。

安形は思いを、気持ちちを、決意を持って、渾身の一撃を打ち込んだ。

「くたばれええええええええええ！」

ガンッ——……！

『そうか、ゆうちゃんは誰かの役にたつ大人になりたいのね？ それじゃあ、ゆうちゃん、もしお姉ちゃんに何かがあつたら、助けてくれる？』

『うん、分かった！ 俺大きくなったら警察になって、悪い人を一杯捕まえてやるよ。僕が姉さんたちを守るんだ！ 僕がいる限り誰も悲しい目には合わせないよ！』

遠い、遠い記憶。

自分を死んだと思い込んでいる大切な家族の言葉が甦る。

——苦しんでいる人を助けることが俺の目的なんだ。生きる意味なんだ。そのために俺は警察官になり、黒服に入った。……確かに時には誰かの命を犠牲にすることも必要だろう。でもそれはあくまで助けられない場合のみでの話だ。助けられるのに、まだ救えるのにそれを犠牲にすることは間違っている。

振り子人間は動きを止め、力なく壁にその体を打ちつけられたまま鳴き声を途切れさせた。だらーっと壁に血の滝が流れる。

「そうだろ？ 鋭——」

安形はそのまま振り子人間の横の壁に寄りかかった。
ずっと迷っていた。

ずっと分からなかった。

鋭がやるうとしていいことは本当に正しいのか。

自分の考えは甘いのか。

でもここに来て、死の恐怖から自分がこの場に立っている意味を
思い出して、今やっと決心が、その答えが見つかった気がする。

「鋭、俺が……お前を必ず止める。例えどんな結末になろうとも」
そう改めて決意した。

「二人は……どうなったんだ？」

体が重い。足が進まない。

まるで床に倒れている元狂人たちが纏わり付いているかのようだ。
もはや起きているのか寝ているのか自分では判断が付かず、これ
は夢なのかという疑念すら湧く。

しかしそれでも安形は扉に向って歩き続けた。

まだ二人が死んだとは決まっていない。必死に自分の助けを待っ
ている可能性もあるから。

「はあ、はあ、はあ……」

皮膚がひりひりと痛み、風が当たるたびにヤスリで擦られている
ような錯覚を覚える。

「佐久間……愛さん……」

覚束ない足取りで扉の前まで来ると、震える腕でそのノブを掴み、
顔をガラス窓へ近づけていく。

『何言つてんだよ、もう分かっただろ？ 鋭は怪物だ！ あんたがいねえと俺らが逃げられない！ 頼むから一緒に来てくれよ！』

『当然でしょ。あんたたちが助けたんだから最後まで責任持ちなさいよ』

二人の言葉が山彦のように耳の奥で鳴る。

——生きてくれ……！

心の中で叫んだ。

自分が守ると約束した。

生きてこの町から出すと。

そう確かに誓った。

誰かを助けたくて、富山樹海のような悲劇を生みたくなくて、敢えて黒服に入ったのに、ここで誰も守れなければ自分の三年間は、努力は何の意味も無くなってしまう。

これ以上自分の力不足で誰かが死ぬ姿は見たくない。

救えたはずの人間が救えないなんてもう御免だ。

「頼むから……生きてくれ……」

安形は心の底からそう願い、ガラス窓の反対側を覗いた。

バツバツバツバツバ——

一機の漆黒のヘリが、それ以上に暗い空の中を飛んでいた。

コックピットからは夢遊町の全体が見え、その大きさは徐々に大

きくなっていく。

乗員はパイロットを含み三人居たが、三人ともヘリと同じように真っ黒な服を纏い、まるで死神か悪魔と魂の取引を行った人間のように見えた。

何かに気がついたのか、後部座席に座っていた一人の男がパイロットに指示を出した。するとパイロットは一瞬驚いたようだったが、その指示の通りにヘリの操縦桿を動かした。

周囲の形式が茶色く濁り、次第に荒廃した町の中へと入っていく。何故か、どういうわけか、ヘリは真っ直ぐにある場所へ向っていた。

地獄の始まりの場所。

憎しみと悲しみの原点。

白居邸へと――。

資料室の中には誰の姿も無かった。

安形は安心とも不安とも区別の付かない大きな溜息を吐いた。

「はあ、死体が無いってことはまだ死んではないよな……？」

体中の緊張と力が僅かに抜ける。その所為か、押さえ込んでいた眠気がどつと舞い戻って来た。

瞼を擦りながら何とか扉を開けようと試みてみたが、やはり開かない。

「武田……お前は一体何のためにそこまでして生きようとしているんだ？」

黒村と取引したとはいえ、こんな異常な状況だとは言え、武田の生に対する執着心は尋常ではない。精神に異常をきたしているなら

ともかく、先ほど見たところかなり冷静で安定しているようだった。
「お前にも……生きる意味が、信念があるのか？」

自分と比べてそう考えたが、武田の心を支えているものが一体何かまでは分からなかった。

「う——？」

ぐらりと膝が折れた。

太股から下が綺麗さっぱり消えてしまったかのように自然に床に倒れ込む。

「——くそ！？ まだ、こんな所で寝てるわけには……！」

いくら精神力で我慢していても、もう体は限界だったらしい。度重なる戦いのダメージも相成って、安形はこれまでで最大の眠気に襲われていた。

必死の抵抗も意味が無く、瞼は段々と閉じ、視界が暗くなっていく。

——駄目だ、まだ俺は……！

そして一気にブラックアウトした。

<第十二章>誰が為にそこに立つ（後書き）

アンケートを増設致しました。

興味を持った方は是非御覧下さい。

<第十三章> 狂心変異

<第十三章> 狂心変異

安形と振り子人間が戦闘していた時と同時刻。

おびただ

夥しいファイルや本がズラリと並んだ資料室の中で、武田が黒村から引き継いだ黒柄ナイフを愛に向って真っ直ぐに突き出していた。愛は自分の瞳に映る禍々しい刃を恐怖に引きつった表情で見ると、悲鳴を上げながらそれを防ごうとする。だが武田の突きは素人とは思えないほど早く、愛の腕がナイフの前に到達する前に心臓の目の前まで来ていた。

——駄目っ！

刺される！ そう愛が思ったときだった。

「姉御おおお！」

愛の胸とナイフの間に、横から一本の腕が差し込まれた。佐久間の腕だ。

黒柄ナイフはそのまま佐久間の肉を穿ち、骨の一步手前というところで侵入を止めた。

「邪魔を……！」

舌打ち。

武田は不機嫌気味な目を佐久間に向けると、ナイフを抜いて刃に付着した血を振り払った。

「うがぁあっ！？ この大馬鹿野郎！」

「馬鹿はお前だ。ここでお前がいくらこの女を庇っても、どうせ二人とも死ぬんだぞ？ 何のつもりだよ」

「死なねえよ！ お前なんかに殺されて堪るか！ 例えどんな傷を負っても俺たちは生きてこの町から出てやる」

腕の焼きつくような痛みを憤怒の表情で耐え、佐久間は心の底か

ら怒鳴る。

「……はあ、お前ホント無意味に声がデカイな。そんなに大声を出すなよ。扉の前から感染者たちがいつまでたっても消えないだろ」

片手で耳を押さえながら溜息を吐く武田。

「武田、私たちを殺した後、あなたはどうする気なの？ この部屋の外にはどっちの扉を通っても振り子人間が居るでしょ。結局、あなたも助からないじゃない」

「そう思うか？」

「……どういう意味？」

「あの振り子人間たちはここで作られた生物兵器。この職員ならあれをばら撒いた時点で何らかの防衛作を自分たちに行くことは当然のこと。俺は黒服の死体から特殊な香水を貰ってね。それのおかげで百パーセントじゃないが、あれの注意を自分から反らすことが出来るんだよ。さっきだって俺を追ってたのは狂人だけだっただろ？」

「こ、香水？ そんなものが……」

「だから安心して死ね。俺も好きで人殺しをしたいわけじゃない。全てが終わったら、お前らの墓くらいは作ってやる」

じりつと足を前に進める。

「姉御、ビビんなよ。だったらあいつからその香水を奪えば、俺たちだってここから逃げられるってことだろ？」

殺気を振りまいてこちらを睨む武田を前に肩を震わせた愛を、佐久間が元氣付けた。相手が化物でなく人間ならばいつもの弱腰にはならないらしい。

「お前のその自信を受けて立つのもいいけど、生憎俺は結果優先主義なんでね。そっちがその気ならもっと確実にお前らを殺せる方法を取らせてもらう」

「はあ？ 何だって？」

「俺はケンカも頭脳も大したことはない。だけど一つだけ得意なことがあるんだ。一体、何だと思う？」

「知るかよ、他人に媚を売ることか？」

「空気を読むことだよ。周囲の、周りの、人間やその場の空気を読み、一番己に被害が出ない、自分の手を煩わせないで済む最善の方法を見つけることが大得意なのさ」

周りの物をうまく武器にすることも、感染者と真つ向から打ち勝つ力も、すばしっこく逃げ続ける事も出来ない。しかし他者の考えを読み、人々の心の流れを感じ、それを裏から導きコントロールする。それが、自分の、武田忠信の最大の能力であり、この町で生き残れた力、生存力だ。

「はっ？ だから何だつてんだよ！ 今はそんなもの何の関係もないだろ？」

「関係あるさ。このまま俺がナイフを持って突っ込んでも、振り返りに会う可能性も無くはないからな。だから、こうさせてもらう」

武田は冷笑を浮かべながら二人を見ると、後ろ手でそつと廊下側の扉の鍵を掴んだ。

「あつ、お前まさかつ！？」

「閉じ籠つてないで外に出て行きたかつたんだろ？ だったら自由に出て行けよ。この地獄の中、たった二人でな」

「や、やめて！」

愛が絶望に歪んだ声を上げた。しかし、無常にも武田は鍵をくると一回点させ扉を解放させた。

狂人、振り子人間、人間を殺し、その細胞を嚼^することを目的とした人外の化物、怪物、殺人鬼、鬼、悪魔。それらが蔓延るこの邸宅の中唯一の安全地帯と言ってもよかった資料室の扉が、開け放たれる。

「生きて外まで辿り着けたらの話だけだな」

何の感情も籠らない声で、武田が冷ややかに呟いた。

白居邸屋上。

二人の黒服メンバーを相手に稲妻のごとく立ち回る男がいた。

彼は化物。

彼は怪物。

彼は兵器。

彼は地の底で生まれた細胞を体に宿す者であり、障害物を越えて対象を感じることの出来る超感覚者であり、ナグルファル最高的大量殺人兵器でもある。

彼の両親は二人とも既に死んでいた。デイエス・イレメンバーの父とイミュニティーメンバーの母。母は正体を知った父に殺され、父は己の行為に耐え切れず自らその命を落とした。

たった一人だった彼は白居学に目を付けられた。

彼は超感覚を持つから選ばれた。

超感覚とイグマ細胞の併用が可能なのか調べる為に。

人間全ての常識を覆す計画の為に。

体を開かれ、弄^{いじ}られ、構造を変えられ、地獄のような痛みと苦しみを味わいながら。

彼は憎んだ。

白居学を。

黒服を。

人間を。

自分以外の全ての存在を。

だが、それでも彼は完全に闇に落ちはしなかった。
覚えていたから。

母の愛を。

父の思いを。

人間だった時の暖かさを。

彼はある日、自分がとある計画を行うためのモルモットだと知った。

生きた人間をそのものの意思に関係なく自由に操り、行動を縛る。自分の体が持つている力はその計画を完成させるために作られたのだと。

それを知った途端、彼はどうしても止めなければと思った。

個人の意思も思考も、夢も喜びも苦しみも愛も理想も欲望も怒りすらも感じることの出来ない全てが制御、統制された、完成された、それ自体で完結した世界を生み出す計画。

『オルオウン
ALL OWN計画』

あの最悪の計画を実行させてはならないと。

そのために考えに考えて白居邸を脱した。逃げた。

自分の実験に関わった全ての存在を消すため。滅ぼすために。

既に白居邸内の殆どの実験機器や施設は破壊した。狂人の感染拡大も草壁国広が隠し切れないほどに大きくなっている。

もう十分だろうか？

もう計画は防げただろうか？

いや——……まだ足りない。

まだ不十分だ。

これではすぐに計画は再開される。

もっと破壊しなければ、もっと感染者を増やさなければ。

二度と黒服がこの悪趣味な計画を考えられなくなるくらいに。

二度と自分のような怪物を作り出さないために。

この国自体に多大な影響を与えるくらい破壊し、地獄を呼び、自分や狂人の存在を誇示しなければ。

そうしなければ白居は止まらない。黒服は止まらない。また何度

でもあの計画を再考しようとする。

実験の集大成である自分の命もいずれは消さなければならない。
だがそれは先だ。今は死ぬわけにはいかない。

もつと、被害を。

もつと死者を。

もつと悪夢を。

自決するのは黒服が崩壊するほどのダメージを生み出してからだ。
だから――

――だから……今は――

「邪魔をするなああ！」

鋭は圧倒的な速さで本田の背に回り、その首を掴み持ち上げると
激しく地面に叩き付けた。

「がはあっ!？」

コンクリートに激突した肋骨が鈍い悲鳴をあげ、口からは血が逃げ出す。

本田は陸に上がった魚のようにメチャクチャにもがきながら己の
身の異変を悟った。

――くそっ、骨が数本持ってかれやがった!

「もう諦める。お前らじゃ俺には勝てない」

鋭は本田の背を踏み、言う事を聞かない子供に言い聞かせるように
声をかけた。

「俺は黒服にとって核兵器のようなもの。奥の手であり、パンドラの
箱であり、白居の生涯をかけた計画の第一歩だ。たかが人間のお
前らがいくら頑張っても傷一つ負わすことは出来ないさ」

「本田!」

腹を押さえながら鋭に突っ込んでくる曾根。だが鋭はその場から
動く事は無く手でそれを制した。

「やめろ。勝ち目が無いのは分かっているはずだ。金のために死ぬ
気か？」

「同情のつもりか? お前が何を言おうと俺たちは戦闘を止めない

ぞ。退けば組織に殺される。俺たちは前に進んで死ぬか、後ろに戻って死ぬかしかないんだ。それが、人生を、本当の自分を殺してこの組織に入った黒服メンバーの運命」

鋭をその茶色い双眼で睨みつけ、曽根ははつきりとそう言った。自分たちは社会から消された存在。

正式には地球上のどこにも居ないはずの人間。

使えなければ、役に立たなければ簡単に切り捨てられ処分される。自らそれを覚悟してこの道を歩んできたのだから。

「そうか…… お前らも俺と同じ白居の道具でしかないんだっとな。

——… 分かった。俺もお前らも退くことは出来ない。殺すか、殺されるか、倒すか、倒されるか。…… 黒服のやり方で決着を付けよう」

血と深海のほの暗い色が混じった瞳をゆっくりと細める。

周囲の空気が鋭のその一言で一変した。

これは正義と悪の戦いでも、聖者と悪人の戦いでもない。

白居は己の計画のために、鋭はその計画を破壊させるために。それぞれがそれぞれの目的のためにお互いの命を削ろうと切磋琢磨する。何が正しいか、何が間違っているか、そんなものは全く関係ない。ただ、自分の信念、断固たる決意を満足させる為に二者は牙を向け合った。

「うおおらあああああ！」

曽根は真っ直ぐに突撃した。鋭は失笑し、それを相手の肩を掴み、支点にして飛び上がることで簡単にかわす。

「後衛に就いている人間っていうのは本当に猛牛のように突っ込むしか脳がないんだな。そんな攻撃が当たるわけ無いだろ」

「俺は前衛だ。油断していると痛い目を見るぞ！」

刺突が掠りもしなかったにも関わらず、曽根は全く気にすることなくそう言っただけで左腕を引いた。そこには細いワイヤーが握られており、鋭の背後のアンテナへと繋がっている。

——っ…… ロングワイヤーアンテナか！

曾根が何を狙っているのかを感覚による背面視で瞬時に理解した鋭だったが、既にワイヤーは引かれた後だったため、避けきることは出来なかった。もの凄い速度で曾根の手の平から小型ナイフが飛んでくる。ワイヤーが引かれた反動を利用した簡易投撃装置だ。

「ぐっ!？」

鋭の右胸、心臓の真横に深々と刺さる小型ナイフ。鋭はその衝突の力で大きく仰け反った。

「今だ!」

既に立ち上がっていた本田が黒柄ナイフを持って叫び、曾根と同時に一目散に鋭に向って走り出す。

「——しまった!？」

肺は呼吸を司る臓器。生の要^{かなめ}。心臓に非常に近い場所に大きな衝撃を受けた鋭は、一瞬体の動きを停止させてしまった。その所為で本来ならば絶対に無い懐への二人の接近を簡単に許してしまう。

「終わりだ、鋭!」

怒号を上げる本田。

二人の鋭い黒柄ナイフが体を貫く。鋭はその状態のまま、二人に押される形で背後のガスタンクに打ち付けられた。

曾根と本田は自分の黒柄ナイフを抜き取ると、一瞬にしてその場から屋上の中央まで離れる。

「こ、れは……!？」

鋭は背後のガスタンクから「シュー」、「シュー」っと何かが漏れているような音を聞いた。

「二人じゃどうなんだ? は、二人でも何も変わらねえよ」

冷たく笑いながら本田は火をつけたライターを投げつける。それは先ほどの黒柄ナイフの刺突によって大きな穴を開けられていたガスタンクの前に優雅に飛んだ。

「——ちよついと時間がかかるだけさ」

最後に本田がそう呟くと、同時に辺り一面が激しい光に包まれる。まるで太陽が屋上の上に落ちたかのような物凄い爆発の中、鋭は己

の身が焼かれる苦しみに大声をあげたが、それは空気を引き裂くような爆発の衝撃音に掻き消された。

追って来る。

執拗に、貪欲に、狡猾に、激しく、鋭く。

いくら足を酷使しようとも、奴らは離れない。諦めない。

己の欲を満たすため、本能を満足させるため、意思も感情も何も無い、生まれた存在意義のまま、ただ追って来る。

奴らは自分たちが何故獲物を追うのかも分かってはいない。ただ、『そう作られた』、『そういう存在』だから追って来るのだ。

「もう嫌——……」

筋肉が撓たわむ。

骨が軋む。

全身から氷のような冷たい汗が噴きあがる。

空気が足りない。

息が苦しい。

頭が熱い。

愛は自分の体が限界を超えているのを感じていた。

三日前から殆ど休むことなくずっと逃げ惑っていた。デパートで食料を補給できたとはいえ、たかが非常食。栄養も量もそれほど多くは無い。

もう限界だ。

もう無理だ。

愛はとうとう廊下のだ真ん中で倒れ込んでしまった。壁に掲げら

れた周囲の絵画の顔が見下すようにその疲れきった女性に冷ややかな視線を向ける。

「姉御!?!」

先を走っていた佐久間が慌てて戻ってくる。

「何してんだよ!?! 早く立てって! あいつらに追いつかれるぞ!?!」

「ごめん……佐久間。私、もう足が動かないの。もう無理だよ……佐久間だけでもなんとか逃げて……」

「姉御がそんな弱いセリフ言ってるじゃねえよ! 立てよ! 立てって!!」

「お願い、早く行って……」

「――姉御!」

「チャアアアアアッ!」

廊下の奥に複数の振り子人間の姿が現れる。あと数秒でここに辿り着くだろう。

「くそつ、姉御、姉御が立たないなら俺もここで一緒に死ぬぞ! それでもいいんだな!?!」

「何言ってるの? 馬鹿なこと言っていないで早く逃げてよ!」

「俺は――……姉御が好きなんだ! 姉御が死んだら耐えられない。お願いだから、立ってくれ!」

「佐久間……」

振り子人間は二人と三メートルの距離まで来ていた。

「姉御!」

「――っ!」

愛は佐久間の手を掴み、体を引き起こした。その直後に頭が置かれていた床を振り子人間の鋭い大きな爪が割る。

「走れええ! 諦めるな!」

佐久間は愛を抱えるような形で死ぬ気で走った。既に体力の状態は愛と大差は無い。もういつ倒れてもおかしくはないのだが、火事場の糞力か、愛への思いのためか、足の爪に血を滲ませながら走り

続けた。

その様子を振り子人間たちの後ろから見ていた武田は舌打ちした。しかし直後に一瞬、とある光景を思い出す。

『忠信……！』

『何だよ、泣いてたのか？ 可愛いところあんじゃん』

『ふざけないでよ馬鹿！ 心配したんだから』

それは少しだけ前の、まだ幸せだったときの記憶。まだ自分が自分でいられた、他人の命を優先していた頃の甘く、切ない思い出。

「……木枝……」

自然に口から声が出る。

——何で今更木枝の顔を……？

武田は頭を左右に大きく振り、浮かんだ映像を振り払った。

「はあ、……あいつ等のイチヤイチヤぶりに当てられたかな。俺もまだまだまともな感情が残ってたか」

誰かが問い詰めているわけでも無いのに、一人そう言い訳のように呟く。

「……逃がさないぜ、佐久間、愛」

たった今自分が抱いた思い、感情を強引に否定するように言うと、武田は振り子人間たちの後を追って走り出した。

——予想していた通り、資料室を開け放つても振り子人間たちは俺を襲わずに二人だけを狙った。これならば香水が切れない限りは安全に歩くことが出来る。狂人たちが現れたって、総合的な能力で勝る振り子人間たちが居る。……大丈夫だ。俺の案にミスは無い。

前に進みながら策と考えを確認し、無理やり笑った。

それは自分の策に対する自信の表れなのか、それとも微かに残った人間の心に対する後悔を紛らわすためなのか、武田自信にも分らなかった。

「姉御、どうする！？ どっちに逃げる！？」

廊下の終わりに差し掛かり、佐久間が困ったような声を出した。ここからの逃走ルートは三つ。屋上への階段をあがるか、二階へ降りるか、真横のトイレに立て籠もるか。

——屋上に行ってもどうせ行き止まりだし、二階は化物だらけだった。トイレなんて論外。すぐに突破されてしまう。

これではどのルートを選んでも危険には変わらない。愛はその問いの答えを選ぶことは出来なかった。

「他に道は無いの……！？」

「壁をぶち抜けば出来るぜ！」

「こんな時にふざけんじゃないわよ！」

「もうこうなったら一か八か逆走して武田に体当たりするか？ 香水さえ取ればこっちも襲われなくなるんだし……」

「そんな無茶な……いや、待って。香水——そうか、香水よ！ 香水を無効化させれば良いんだわ！ 無効化させれば奴らに一番近い武田に攻撃対象が変わるはず」

「はあ？ どうやって無効化するんだよ、二人で屁をこきながら突っ込むのか？」

「……あんたの親の顔が見てみたいわ」

「え？ もう両親に会うこと考えてんの？」
照れくさそうに佐久間はにやける。

「……はあ、マジで疲れる。違うわよ、スプリンクラーを使うの！ あれで香水の臭いを武田から落とすのよ、こんな施設なんだから液体に匂いの強い消毒成分とかも入ってるかもしれないでしょ！」

「スプリンクラーって、火事とかで作動するあのシャワーみたいな？」

「そう、それ。今は引き離れたけどまたすぐに追いつかれるわ。今のうちに作動させないと……あんた、ちょっと台になって」

ぼうつと突っ立っている佐久間を強引に四つんばいにさせると、愛はその背を思い切り踏みつけながら天井に手を伸ばした。その先には円形の小さな蓋ふたのようなものがへばり付いているのが見える。

「ライターとか持つてる？」

「タバコ用のお気に入りがあるぜ」

愛は佐久間から鬼の絵が入った趣味の悪いライターを受け取ると、火を灯し、円形の物体に近づけた。

「あ、姉御！ 奴らまた追いついて来たぞ」

「ドドドド」っと地鳴りのような音を立てながら迫ってくる振り子人間たち。二人との間の距離はすぐに狭まっていく。

「姉御、時間切れだ！ 逃げよう」

「もう少し、もう少しのはずなの！ お願い、点いてっ」

四つんばいの体勢では逃げるのに遅れる。佐久間は恐怖から怯えた声を出したのだが、愛はその背から退く事なくライターの火を揺らし続けた。

「姉御おお！ 来てるうってえっ！」

「チャアアアアアア！」

先頭の振り子人間が嬉しそうに、元々笑った状態の顔をさらに不器用に歪める。

「あああっあ！ 死ぬううう！」

佐久間は目を閉じ体を伏せた。

バシャアアアアアアア！

豪雨が巻き起こった。

一瞬にして周囲の全てが水に包まれる。

——やった！ センサーが反応してくれた！

愛は佐久間の背から飛び降りながら、スプリングラーの始動に喜んだ。

「な、何だいきなり！？」

武田は突如天井から大量の水が落ちてきたことに戸惑いを隠すことが出来なかった。濡れたことで視界を妨害する長い前髪を横にずらしながら、何とか状況を把握しようとする。だが次の瞬間、すぐに前を向いたことを後悔した。

「ん？ こ、これは……！」

先ほどまで自分に目もくれてなかった振り子人間たちが一斉にこちらを見つめ、今にも襲い掛かるうとしていた。明らかに香水の効果が消えている。

——やられた！ まさかこんな方法を……！

顔が思いつき引きつる。

「ザマ見ろ、前方ロン毛！」

佐久間が嬉しそうに叫んだ。

——ここで逆走しても、逃げ切る事は出来ない、だったら——！

武田は黒柄ナイフを構え、振り子人間たちの中へ突っ込んだ。水の所為で動きや視界に影響を受けていた振り子人間たちは僅かに反応が遅れる。

「俺は死なない、死にはしない！ 死ぬのはお前らだ！ お前らが死ねええ！」

死にたくない。

死にたくない。

死にたくない。

自分は全てを失った。

家族を捨て、友人を捨て、恋人とこの町に逃げ込んだ。

その恋人も自分の手で殺した。

もったった一人。

誰も助けてはくれないし、誰に助けを求めることもできない。

——ならば何故生きたい？

本能のため？

痛みが恐ろしいから？

死が怖いから？

違う。

それはただの意地のため。

全てを捨てて恋人とこの町に来た。この町から新しい人生を始めるつもりだった。

心から愛した、最愛の女性と一緒に。

自分の意思で自由を勝ち取るはずだった。これからそうなるはずだった。

だから許せない。

この事件を起こした犯人が。

自分の計画を妨害した相手が。

この運命が。

ここで死ぬのはその運命に負けたことを意味する。運命の思い通りになる。

——嫌だ。俺と木枝は幸せになるはずだったんだ。それが破壊された。踏み潰された。もうこれ以上お前の、運命の思いどおりになつて堪るか！ 醜くとも、嫌らしくとも、卑怯でも、冷酷でもなんでも俺は生きて、生きて、行き続けてやる！ 生きてお前の筋書きを打ち砕いてやる！

そのためには、絶対にここで死ぬわけにはいかない。

ここで殺されるわけにはいかない。

何がなんでも生き延びる。

これはくだらないただの意地。

だけでもう自分にはこれしかない。これがなければ生きる意味が何も無い。木枝を殺してまでここにいる理由が無い。だからそれを邪魔するものは全て排除する。そのためには例え相手が普通の人間だろうと殺す。

男だろうと、女だろうと、子供だろうと、この意地を邪魔するものは全て——

「殺す！」

背後に振り子人間たちを引き連れながら武田は一気にナイフを突

き出した。

「くそつ、姉御！ さがれえ！」

「きやあつ！？」

迫り来る黒柄ナイフの光を見た愛が絶叫を上げる。

——俺は鋭と約束したんだ！ 姉御と一緒にこの町を出るんだ！
こんなところでは死なない、死んでやらない。俺は絶対に生きる！
生きて生き延びて、死ぬまで苦しみ抜いてやる！

「——武田あああつ！」

「死ねええ！」

二人の距離がゼロになる。その瞬間、愛が大声で叫んだ。

「佐久間あつ！」

武田と佐久間の体が交差した。どつと鈍い音が響き、両者の体が傾く。赤い火花が散り、黒と銀色の刃が肉を断つ。

一瞬の間の後に、武田が驚きの声を漏らした。

「——っお前——！？」

「一度刺された腕だ！ 死ぬくらいだったらこんな物、お前にくれてやるよ！」

佐久間は二度目の斬撃が食い込んだ腕をそのまま武田側に押し戻す。

人間の腕は構造上内側よりは外側の方が頑丈に出来ている。奇跡的にも佐久間は真っ向から武田の斬撃を防いだことで、黒柄ナイフの侵入を骨の前で止めていた。

弾かれる黒柄ナイフ。佐久間はその動作に連続し、逆の右手で渾身の拳を振り上げた。

「がつ！？」

顎がもげたかのような衝撃が体に走る。武田は舌一杯に鉄の味を感じながら、佐久間から仰け反るように離れた。

「チャアアアア——！」

その武田を見事に全身で受け止める振り子人間。

「佐久間っ——こつち！」

愛は黒柄ナイフを二度も受けボロボロになった佐久間の腕を引く張ると、何も考えず屋上への階段を駆け上がった。

武田に気を取られ、振り子人間たちは途中から追うのをやめる。

武田は自分の周囲を取り囲む化物たちを見て、パニックを起こした。

「や、つ止める！ 俺は死にたくない！ 死にたくないんだ！」

——誰か助けてくれ！ 南城、佐久間、愛、安形、鋭——木枝えつ……！

『忠信。やっと一緒になれたね？ もう絶対に離れないよ。ずっと一緒、ずっと二人。二人で力を合わせて、二人で——幸せに生きようね』

——木枝、どこにいるんだ！？ 木枝！ 木枝！

「うぐがあああああああつ！？」

服が裂け、肌が割れる。肉が飛び散り、赤い光が輝く。

世界で一番大切な人間の姿を思いながら、武田は動物のような何とも表現のしようのない絶叫を響かせた。

屋上の入口まで一気に駆け上がった二人はそのまま屋外に出ることとはせず、階段の上に倒れるように座り込んだ。

「はあ、はあつ……追ってきていないか？」

「——大丈夫、何も居ない」

そこで会話が止まる。

佐久間は仰向けに横になると、血が大量に湧き出ている自分の左腕を眺めた。

「ちよつ、あんたそれメチャクチャバい怪我じゃない！ 何で普通に眺めてんの！？」

何気なく横を向いてまともにその悲惨な腕を見た愛は、顔を真つ青にして手当てを始めた。

慌しい手つきでデパートで入手した包帯をぐるぐると佐久間の腕に巻きつけ、近くに落ちていた雑誌と合わせて固定する。佐久間は激痛に耐えているのか歯を噛み締め、終始涙を流していた。

「一応包帯は巻いたけどすぐに正規の手当てをしないと、あんたマジでヤバいわよ」

愛の腕は作業の最中から佐久間の血で真つ赤に染まっていた。その影響か忠告する声がかなり震えている。

佐久間はそうか、つと一言頷くのみで、特に自分の怪我のことは感心を示さなかった。

「ねえ、聞いてんの！？」

自分の出血量の多さを分かっていないような佐久間の態度に、愛は頬を膨らませた。

しかし佐久間は僅かに聞こえた武田の断末魔が耳から離れないらしく、愛の言葉を無視してなにやら感慨げに話を始めた。

「……姉御。あいつは——……もしかしたら、ただ恋人の死を受け止めることが出来なかったただけなのかもしれない」

「はあ？ いきなり何の話？」

「武田だよ。デパートであいつに聞いた言葉を思い出したんだ。自分の手で恋人を殺してしまっただけ。あいつはそれを実感することが出来なかったんだ。だからあれほど『生』に執着していた。生きていればまた恋人に会えるような気がするから……」

「何でそう思うの？」

「あいつ、最後に叫んでただろ？ 木枝、木枝——って。まるで彼女の姿を探しているみたいだった。だから……」

「どんな理由があるうと他人に迷惑をかけるようになったらお終いよ。武田は狂気に飲まれた。己の欲望に負けた。ただそれだけ。あんたが今更同情しようが、あいつの死に罪悪感を感じようが、もう何も変わらない。全て終わったのよ。いつまでも気にしないで。それより今はやる必要があるでしょ？」

「……ああ、そうだな。安形さんを助けないといけないんだっただな」
ゆつくりと佐久間は体を起こした。暗い笑顔を浮かべながら。
人が狂う方法はいくつかある。

憎しみ、絶望、孤独、執着、恐怖。

憎しみは罪を己に容認させ自己完結した勝手な正義を生み出し、絶望は生きる意志を消し去り理性のタガを飛ばした自己嫌悪を引き起こす。孤独は他者との競争、対比から外れたことで独りよがりな思考のズレや異常性を生み、執着は自分の周りのものを視界から隠す。そして恐怖は精神に亀裂を作り他の四つの感情へと繋がる。

武田は木枝という恋人に執着することで他人のことを考えられなくなり、その死に絶望することで人殺しに対する罪悪感を無くし、また他者に対する恐怖から誰も信じれず孤独になり自分こそが正しいという勝手な思いを抱いた。

——もし、俺も誰にも会わないで一人で逃げていたら……きっと武田となんら変わらない状態になっていたかもな。

佐久間は運良くデパートに近い場所で事件に巻き込まれたことを思い出し、苦笑いする。

自分は多くの生存者たちと一緒にいたから、鋭や安形、愛を信じる事が出来たから狂いはしなかった。最初に彼らに会わなければとつくにおかしくなっていただろうと確信できる。

「……あいつは、ついてなかったのかな……」

全ては偶然、運命としかいいようがない。武田が狂人の感染方法について知らなかったことも、その所為で自ら愛する女性を刺し殺

したことも、一緒にいた生存者たちが全滅したことも、必然ではなくその場その場の流れで起きた。

もし安形と早い段階で会っていれば、もし木枝が感染しなければ、もしあの時デパートに南城が居なければ……考えれば考えるほど多くの別れ道が浮かぶ。

だが、いくら考えても愛の言うとおり全ては終わってしまった。武田は死に、こうして自分たちは生きている。

今となっては何を考えても遅い。佐久間は短く、重い溜息を吐くと、気持ちを切り替え立ち上がった。

「……行こう、姉御。武田の遺体にはまだ振り子人間避けの香水があるはずだ。奴等が居なくなったらそれを使って安形さんのところへ戻ろう。もう大分時間が経ってるけど、あの人のことだ。……そう簡単に死ぬわけではないって」

「そうね——……安形さんならきつとあんな化物なんか全滅させるわよ。絶対に死ぬはずはないわ。絶対に……」

安形の死という不安を打ち消すように、愛はそう自分に言い聞かせた。

二人は足音を立てないように一步一步慎重に階段を降り始める。愛が二段目に足を伸ばした時、黒い影が突然前に現れた。はっと顔を上げると見慣れない若い男が立っている。

「あれ？ お前たち、町の生存者か。クスクス、まだ生きてたのか。ソムヌスが居るのに凄いな」

その男は心の底から凍りつくような冷たい瞳をこちらに向け、作ったような笑みを浮かべた。

相手が黒服を着ていることから愛と佐久間は咄嗟に階段の上まで飛びのいた。先ほど武田が自分たちを殺そうとした理由を思い出したからだ。しかし、下がった理由はそれではなかった。男の視線はこれまで二人が見たこともないほどの恐怖を心に侵入させたのだ。憎しみ、怒り、絶望、苦痛、狂気、様々な負の感情が入り混じったようなあまりに複雑なその視線は、とてもまともな人間のもの

とは思えなかった。

「おいおい、人の顔を見て逃げるなんて酷いな。僕は顔立ちは整った方のはずなんだけど」

肩をすくめる男。

「な、何だお前？ あの鋭を追っている連中の仲間か！？」

相手が人間であるにも関わらず、佐久間は怯えた声でそう聞いた。
「ああ、黒村らのことか？ ただの同僚だよ。と言っても僕の仕事はもう終わってるからあいづらとは何の関係もないけどな。まあ、今の僕はただの傍観者ってところだ」

「傍観者？」

愛が不審者を見るような目を男に向ける。男はその視線を受け流しながら、日常会話を行うような調子で次のような言葉を言い放った。

「でもまあ、一応白居さんの私邸内でもあるし、目の前に侵入者がいたら流石に駆除しないと駄目か。——悪いな、お前ら。面倒くさいけど死ね」

『殺す』でも、『死んでもらう』でもなく『死ね』。それはまるで決定事項を示すかのような言い方だった。

「えっ……！？」

何の前触れも無かった。愛が気がついたときにはもう遅かった。男が喋り終わると同時にいきなり激痛が走り、腹部に短いナイフが刺さっていた。

「愛！？」

思わず名前を叫びながら、佐久間は愛の体を後ろから支える。傷は深くは無いものの、愛の服からは既に血が滲み出していた。

「あれ、階段の所為で狙いが外れたか？ 仕方ないな」

男は緩やかな癖毛を揺らしながら再びナイフを手に持つ。

——こいつヤバすぎる！

「姉御、上だ！」

佐久間は大きく肩で息をしている愛の腰を抱くと、一目散に屋上

目掛けて走り出した。

「クスクス、そっちに行くのか？ やめた方がいいと思うけどな」

男のそんな呟きも耳に入らない。

自由な方の、傷だらけの左腕でドアを開け放ち、倒れ込むように屋上に躍り出る。と、同時に目の前で大きな爆発が起こった。

——カツ！

オレンジ色の光が辺り一面を覆い、一瞬目の機能を全て奪う。

「うわあっ！？」

「きゃああ！？」

直後に爆風が体を押し、二人はその勢いに吹き飛ばされないように必死に地面にしがみ付いた。

風が止み、視界と聴覚がある程度戻った頃、屋根に囲まれたこの屋上の中から一度聞いたことのある声が聞こえた。

「へ、これなら流石に鋭も生きちゃいないだろ」

本田は風に飛ばされた黒柄ナイフを拾うと、燃えて半分が吹き飛んだガスタンクと、その中心で倒れている黒い影を見下しそう呟いた。

「ああ、お前らっ！」

黙ってればいいものを、不必要なほどの大声で佐久間が叫ぶ。本田と曽根はその声で佐久間と愛が屋上に來ていたことを知った。

「何だ、あのときの生存者か。まだ生きてたとはな。随分運がいいみたいだ。他の奴は全員死んだのか？」

一仕事終えたあとの大工のような雰囲気、本田は二人に話しかけた。

「鋭が死んだってどういうことだ！ お前ら鋭に何をした！？」

「見ての通り、爆発を食らわせてやったんだよ。っていうかお前、あいつの正体をデパートで教えてやっただろ？ 何でまだあんな化物のことを心配する？」

「煩い！ お前らよくも鋭を殺したな！」

「化物を殺すのが仕事なんだぜ？ ふざけたこと言ってる人間だろうとお前も殺すからな」

ギロリと佐久間を睨む本田。その時愛が腹部の痛みに濁った声を漏らした。

「……………」

「あ、姉御——！」

見るとにじみ出ている血の量が増えている。爆風から身を守った時にナイフがさらに深く刺さってしまったようだ。

「……………どうやら、完全に無事ってわけじゃないらしいな」

本田は二人の様子を見て何の同情も見せず、そう冷静に言った。

「へえ、黒村が居ないのに鋭を倒したのか。お前ら思っていたよりもやるじゃないか」

不意に、屋上の扉からキツネが現れた。勿論先ほど愛を刺したのもこの男だ。

「あんた今まで何処に居たんだ？ あんたが居ればもっと早く終わってたのに……………」

その姿を見て曾根が怪しむように溜息を吐く。

「僕の仕事は白居さんを守ることだけだからな。お前らどうだろうと、鋭が死のうとそんなことはどうでもいい。ま、結果として勝ったんだから良かったじゃないか。でもお前たちの任務内容は鋭の『捕獲』じゃなかったか？」

「『出来れば』捕獲さ。大体、リーダーの黒村さんが死んだ時点で捕獲は無理なんだ。殺さないところちがやられてた」

「そつか。そっちがそれでいいなら僕は何も言わない。関係無いことだからな」

キツネはクスクスと笑う。

——このままここに居たら殺される！ 後ろはこのヤバいニコニコ野郎に塞がれてるし、前には二人の黒服がいる。どうすればいいんだ？ 安形さん、まだ振り子人間と戦っているのか？ 無事だっ

たら来てくれ、助けてくれ！

先ほどから殆ど声を出さず次第に顔色が悪くなっていく愛の状態を不安げに見詰めながら、佐久間は心の中で悲鳴を上げた。

「さて、お前たちは活かしても邪魔になるだけだ。特に気を引く才能も何も無いし、一瞬で終わらせてやる」

キツネが自身の黒柄ナイフを引き抜く。

——ヤバい、ヤバい、ヤバい、ヤバいつ！？

「た、頼む！ 姉御だけでも助けてくれ！ 俺たちはどうせただのホームレス、誰もまともに話しなんて聞かねえよ！」

「例えどんな人間だろうと黒服の情報を喉から手が出るほど欲しがつてる連中は多くいる。お前がいくら命乞いをしようと、僕は意思を変えることはない。生かしてもこっちは損にしかないからな」

鈍いナイフの光が月明かりに照らされて光る。まるでそれ自体に命があるようだ。

——だ、誰か来てくれ！ 助けてくれ！ 誰か、誰か、安形さん

——！

「鋭——！」

キツネがナイフを振り下ろす、その瞬間だった。

佐久間の鋭という叫びにあわせるように、周囲一体を吹き飛ばすような、地鳴りのような大きな雄叫びが屋上の上に爆発した。

「ヴオオオオオオオオオッ！」

「何！？」

思わず、曽根と本田が身構える。

『それ』は今だ燃え続けているガスタンクの残骸の間から立ち上がった。全身を酷い火傷で覆われた『それ』は、こちらを睨みつけると徐々に姿を変えていく。

最初は若い男の大きさに、次に大男へと、どんどん体の大きさを

増やす。

「馬鹿な！ 東郷でもあるまいし、あれだけのダメージを受けてまだ動けるのか！？」

そんな曽根の疑問に答えるように、『それ』はタンクの残骸から体を出した。

灰色の鬣を^{たてがみ}靡かせた般若のように歪んだ恐ろしい顔。ティラノサウルスのように前傾姿勢になった二メートル近い紫の巨体、その胸にはしっかりと三本のナイフの痕が残っており、皮膚のあちこちからは爆発の影響で赤く^{ただ}爛れていた。

「貴様らあああああつ！」

『それ』は太い、怪獣の鳴き声のような轟音で叫んだ。

「何故分らない！ 何故、俺の邪魔をする！？」

「あ、あれは不味いな。暴走しかけている」

鋭の姿を見て、溜息を吐くようにキツネが呟く。その言葉の通りに次第に鋭の声は人間とはかけ離れて言った。

「何故、なんだ！ ぐっ……何故え……——うつう……！？」

——俺がここまで言っているのに、ここまで犠牲を生み出したのに、なぜ誰もあいつの思うがまま動くんのだ！ 何故……。

「——……ヴオ、オオオオオオオオオオオッ！」

「鋭！？ どうしたんだ！？ 鋭！」

佐久間が鋭の異変に気がつき、泣きそうな顔で声を張り上げる。しかしその声が鋭に届くことは無かった。

「さ、くま……」

愛が今にも鋭に向って走り出しそんな佐久間の腕を引いた。愛の青白い顔を見た佐久間は何とか我に帰る。

——そうだ！ 俺は姉御を助けなきゃいけないんだ！ このままここにいたら姉御は……！

「姉御——」

背中に乗れ！ そう、言おうとした時だった。

「オオオオオオオオオオオ！！」

涎を撒き散らし、体中からネルガル——ミミズを吐き出しながら、鋭が走り出した。

一直線に、人が密集しているこの場所を目指して。

「……オオオオオオ……」

恐ろしい声が聞こえ、安形は目を覚ました。飛び起きるように床から離れると、頭を振って痛む体を引きずりながら、壁に手を付き立ち上がる。

——くそ、気絶してたのか！？ どれくらい経ったんだ？ 今の大声は何だ……？

再び天井の向こうから建物を震わせるような轟音が聞こえた。

「ヴオオオオオオオオ！」

「この声は……」

——鋭、か——！

安形は床から黒柄ナイフを拾い握りしめると、まだふらつく体を酷使して資料室に繋がっている扉の前まで移動した。

「一階まで戻ってる暇は無いんだ、開けよ！ 開いてくれ！」

本能的に急がなければ取り返し of つかないことが起きるような気がすると感じる。安形は何度も渾身の蹴りを扉のノブに打ち込んだ。

「開け！ 開け！ 開け！ 開け！ 開けええ！」

その内、「ガキツ」という音と共に、ノブが外れる。安形はそのノブがあつた場所に手を突っ込むと、小型ナイフを上手く動かして扉の鍵を解除した。

扉が開くと同時に弾き飛ばされる床上のノブ。

「愛、佐久間、鋭——！」

安形は叫んだ。

仲間の命を救うため、鋭の暴拳をくいとめるため、己のこの場所

に居る意味、役割をこなすために。
傷ついた体をフル稼働させ、最後の戦いへと足を踏み出した。

<第十四章>孤独な狂王（前編）

<第十四章>孤独な狂王（前編）

「僕にケンカを売るのが？」

月明かりに精悍な顔を照らしながら、キツネが呟いた。その瞳は真つ直ぐに紫の怪物を捕らえている。

「ヴオオオオオオオ！！」

鋭は屋上のコンクリート製の地面を激しく割り、一気に飛び上がった。そして一直線にキツネの頭を砕こうと拳を振り上げる。

「まるで野獣だな」

キツネは鋭が飛び上がった瞬間にその動きを予測し、拳が到達する前に懷を潜るように鋭の向こう側へと一瞬で移動した。

鋭の拳と地面が鉢合わせした衝撃で白居邸が大きく揺れる。

「凄い力だな。まともに当たれば頭が消し飛びそうだな」

軽やかに体を反転させながら、スリルを楽しんでいるかのようにキツネが笑った。余裕なのか黒柄ナイフを抜いてすらいない。

——いいぞ、キツネが相手なら鋭もただではすまない。出来るだけ潰しあってくれ。

中央で繰り広げられる鋭とキツネの争いを傍観しながら、本田はこつそりと後ろに下がろうとした。

「どこに行くんだ、本田。漁夫の利作戦とは関心しないぞ」

目ざとく、キツネがその動きに気がつく。

「言っただけだ。僕は今回はただの傍観者。鋭を手にかけることは無い。任務を達成したいのならお前らが自力でどうにかしろ」

「お、俺たちが鋭に負けたら次はあんただろ？ 三人で居られるうちに協力して鋭を倒した方がいいんじゃないか？」

いくらキツネと言っても、生身の人間が兵器である鋭に勝つ事は

かなりの危険を伴うはず。本田はキツネが何とか自分たちに協力してくれることを願ってそう言った。

しかしその思いも虚しく、キツネは即答する。

「僕にとって、お前らの存在なんかいてもいなくても何ら変わらないさ」

それは確信と自信に満ちた声だった。それ以上、本田は何も言う事が出来ず黙ってしまう。

多くの黒服メンバーはキツネのことを化け物だと思っている。知識、判断力、行動力、実力、その他エトセトラ……。

それはあながち間違いではない。

なぜならばキツネは生まれた瞬間から、最初から黒服メンバーとして育てられた人間だからだ。

その存在そのものが、キツネという男の全てが、武器であり、兵器であり、体の、心の其処から闇に浸かった人間。

特殊な超感覚も、人外の身体機能も無いのだが、その精神は遥かに一般人を超えていた。

大人と子供を分ける壁が『経験』や『責任感』だというのなら、キツネと他の黒服メンバーとの最大の差はまさにそれだ。

彼は僅か九歳の頃より、既に感染者の蔓延る場所で任務についていた。強制的に自分の命に対する責任、生き残る術、生存力、経験をその身のまま自然現状として与えられていたのだ。

警察や軍隊で実際に凶悪犯と戦う人間は、形式化した武術をならつていてもそれを使用することは殆どない。なぜならば実践と試合ではまるで勝手が違うから。だから通常、軍人はCQBやCQCなどの実践向けの近接戦闘法を習う。

キツネは他の黒服メンバーのように訓練を受ける事は殆ど無かった。全て実践から技術や生き残る術を学ばせられたからだ。それは下手な格闘技などでは得ることの出来ない、完全な経験に基づいた圧倒的な生きる術、殺人技術となってキツネの生存力を形作った。

何故、キツネが他の黒服メンバーよりも強く、別格と評されるの

か。その理由がこれだ。キツネはどうやれば自分が勝てるのか、どうやれば一番簡単に相手を殺すことができるのか、体の底、心の底から、殆ど本能に近い形で分かる、感じる事が出来る。

それはもはや、バシン計画で生まれた超感覚とは全く別種の、一種の『超感覚』と呼べるほどのものだ。

だから彼はこの若さで黒服の幹部となった。

六角行成から、白居学から、圧倒的な信頼と任務達成の高さを得た。

本能的に、最短で任務を終わらせる、敵を殺せる方法を導き出すことが出来る男だから。

それが、その運命がどれほど彼を苦しめているのかも知られずに。

白居邸地下シェルター、総合制御室。

真っ白な円形の空間であるこの部屋の一角に無数のモニターが敷き詰められていた。

今、その全てに紫色の大男と、漆黒の衣を着た男がお互いの目をにらみ合っている映像がリアルタイムで流れている。モニターの前には複雑な制御盤やパソコンが並び、白衣や作業着を着た男や女がなにやら色々と指を動かし、かなり忙しそうにしていた。

ただ一人の男を除いて。

「キツネめ、相変わらず食えない男だ」

白居学はグラスに残った血のような赤い高級ワインを一気に飲み干すと、心の底から楽しそうに笑った。

クスクスと、女の子のような静かな笑い方で。

それは鋭の人生をあざ笑っているようで、キツネの全てを見透かしているようで、とにかく不気味さを感じさせる笑い方だった。

「ヴオオオオアアアア！」

完全に自我を失った鋭は、ケモノのような大声で吼えた。空気が振動し、その場に居る全員の耳が痛みを訴える。

「ここに居たらまた狙われるな。僕は一旦外野に移動させてもらう」
先ほど宣言した通り、キツネは入り口左にある屋上の柵を飛び越え、三つある屋根の一つに降り立った。これで鋭から一番離れた位置に移動したことになる。

「ち、曽根。こうなったらやるしかない！ でかくなつた分、スピードは落ちたはずだ。何とかして鋭を倒すぞ！」

本田は背水の陣に追い込まれた武将のように、死の物狂いの表情を浮かべ、のしのしとこちらに向ってくる鋭を睨みつけた。

「この二人はどうするんだ？」

曽根が入り口の前で座り込んでいる愛と佐久間を指差す。本田に聞いたつもりだったのだが、キツネが口を挟んだ。

「その二人は僕が後で殺しておく。お前らは気にしないで鋭と戦っている」

——くそつ、何様のつもりだ？

本田は心の中で愚痴を言った。声に出さないのは当然どんな目に会ったかが分かっているからだ。

「ヴウウウ……」

唸りながら身を屈める鋭。何故か視線が斜め下、丁度屋上への階段の方へと向いている。

「何だ？」

本田と曽根がその視線の先を確かめようとしたとき、屋上の扉が激

しく開け放たれ一人の男が現れた。――安形だ。

「鋭！」

飛び出すなり瞳に飛び込んできた紫色の怪物を見て、安形は力強い声でその相手の名前を呼んだ。

「安形さん！」

佐久間は安形を見ると、鼻水を撒き散らしながら心の底から嬉しそうな顔をした。

「佐久間！ 無事だったか！」

「ああ、で、でも姉御が……！ 早く病院に連れて行かないと――」
安形は入り口の壁に寄りかかり、佐久間に体を預けている愛を見た。その顔は青白く変色し、荒い呼吸で胸が大きく上下している。

――この出血……愛さんは元より、佐久間もかなり酷いな。確かに、早く治療しないと不味いようだ……！

二人の状態に動悸が激しくなる。

「……安形、俺たちに協力しろ。鋭を倒せばこの町のミミズも全て機能停止する。二人を助けるには一番の近道だ。鋭さえ居なくなれば、いつでもここに救護ヘリを呼べる」

曾根が鬼気迫った顔を安形に向けそう言った。

現状、二人で化物化した鋭に勝つ可能性はかなり低い。しかし安形が加われれば勝てるというわけではないが、戦法を使うことは出来る。実際は愛と佐久間の命を握っているのはキツネであるにも関わらず、曾根はそんな叶う当ても無い取引を持ちかけた。

「分かった。元々お前らと戦う理由もない」

真面目な安形は簡単にその取引を受けてしまう。

「よし、確かお前の役目は後衛だったな。俺が指示を出す。曾根が上手く鋭を引きつけたら隙を突いて攻撃しろ。あの巨体でも何度も刺されればそれなりにダメージは負うはずだ」

三人で戦う事が確定したため、中衛の経験がある本田がそう指示を出した。

「ああ」

安形は鋭を見つめて気合を入れながら返事をする。

——鋭……感情を制御出来ずにイグマ細胞に支配されてしまったのか。待つてろ、俺が助けてやる……！

三本の黒い刃が抜かれ、その切っ先が鋭の紫の瞳に映る。

夢遊町の数百、数千人の犠牲者の解放。そして白居易の計画。その運命を左右する戦いが今、始まった。

「ヴオオオオオオオ！」

暴力の塊のような体を動かし、鋭は先ほどキツネに突撃した時と同様に三人に突っ込もうとした。だが、前衛を努める曾根がいち早くその動きを察し、三人の中で一番前に出ることで上手く鋭の注意を己に集中させる。そして目と鼻の先まで鋭を引きつめたところで横にダイブするように転がり、相手のタックルを避けた。

「よし！」

安形は今はチャンスと走り出そうとした。だが本田がその肩を掴み、動きを止めた。

「まだだ！ 確実に攻撃を当てられる瞬間まで待て！」

今攻撃すると反撃される危険が大きい。ベイト・トラップ（罠を使った一連の戦法）を成功させる秘訣は確実に獲物の注意を自分たちから離すことだ。まだ鋭の意識は曾根のみに絞られてはいない。そのことを理解していた本田はいくら安形が反抗しても、決して手を離さなかった。

「さすが、分かっているな」

立ち上がりながら曾根は本田の冷静な判断にニヤリと微笑む。熟練ながらの意思疎通だろうか。

「どうした鋭！ 黒服最高の兵器の力つていうのはこんなものか？ さつきといい、今といい、たかが一構成員すら殺せないとはな。

案外、大したことはない」

曾根は鋭の注意を完全に己のみに集中させるためにそう叫んだ。暴走している鋭がこちらの言葉が分かるかどうかは疑問だったが、声を出す事で注意を引きつけることぐらいには効果はあるはずだと

考えたのだ。案の定、鋭は安形と本田に背を向け、その憎しみに満ちた紫の瞳を曽根一人に注いだ。

「頼むぞ曽根。もうここには罠に使えそうな道具も配置物もない。もうこの連携で勝負を決めるしかないんだ」

ガスタンク、アンテナ、屋上にあったものは先ほど鋭を倒すために全て使用してしまった。残っているのは己の肉体と黒柄ナイフのみ。鋭を倒すにはもはやこの戦法にかけるしかなかった。

「……何だ？」

曽根はあることに気がついた。いつの間にか自分の足元に無数のヒモのような物が落ちている。

——これは——？

「ミミズだ！！直ぐにそこを離れろ！」

いち早くその正体に気がついた安形が慌てて叫ぶ。

「な、ミミズだと！？」

もし感染したら鋭を倒すどころか敵を増やすことになってしまう。曽根は自分の足に這い上がってきた数匹のミミズを蹴散らすと、急いで後ろにさがった。

「『ネルガルの鎧』か！不味い……！」

鋭の体から湧き出ている無数のミミズを見て、悔しそうに歯軋りする本田。デパートであれを纏われたときは手も足も出せず、仲間の高木を殺されてしまった。今、またあの悪夢が甦ろうとしている。「曽根、何がなんでもあいつに触れるな！とにかく逃げ続ける！」

あの時とは違い、今は熟練の高木も黒村もない。気を抜けばあつと言う間に全滅してしまうだろう。その恐怖が本田にそう叫ばせた。

「ヴオオオオアアア……」

鋭はさらに体から吐き出すミミズの量を増やしていく。

「佐久間、愛さん！今すぐそこを離れろ、感染するぞ……！」

ミミズの一部が屋上の入り口へと近付いたため、驚いて安形は二人に警告した。しかし、既に満身創痍の二人は動く事が出来ず、そ

の場にずっと留まっている。

——くそっ！

安形は二人の下へ走り出そうとした。

「おい、今ここを離れたらもし曾根が最高の機会を作っても無駄にしちまう。あんな二人のことは忘れる！　綺麗さっぱりな」

「直ぐに戻る！　行かせてくれ！」

「駄目だ、そんな危険はおかせない！」

本田は安形の前に立ちふさがったままテコでも動こうとはしない。安形は一瞬本田を殴ろうかと考えたが、そんな簡単に倒せる相手でもない。悶々としているうちに、こう着状態が続いた。

「——キツネ！　頼む、二人を助けてくれ！」

拒否させることは分かっていたが、安形はそう言わざるおえなかった。そうしなければ気持ち持たないから。

「……いいよ、助けてやる。どうやら安形さんはこの二人が気になつて鋭に集中出来ないようだからな」

「えっ？」

怪しい笑みを浮かべながらキツネは柵を跨ぎ、屋根の上から屋上へと移動した。その手には黒柄ナイフが握られたままだ。

——まさか、あいつ！？

キツネの言葉の意味に気がついた安形は顔を青くする。

「待て、キツネ——」

「今だ！！」

安形が一か八か本田を振り切りキツネを止めようとしたそのとき、曾根が大きな声で合図を送った。見ると鋭はまさに曾根に拳を振り下ろそうとしており、完全に注意がこちらから反れている。今いつきに背後からナイフを刺せば、大きなダメージを与えることが出来るはずだ。

——だが、そんなことをすれば佐久間と愛さんが……！

キツネはこの瞬間にも確実に二人へと近付いている。二人の生存は黒服にとって邪魔でしかない。安形はキツネが間違はなく二人を

殺す気だと思った。

「すまない！」

「な、お前！？」

安形は曾根の言葉に気を取られていた本田を押し付け、キツネの元へと走り出した。本田たちに対する罪悪感を感じながらも必死に入り口を目指す。

「キツネえええ！」

「……ふん」

キツネは迫ってくる安形を見ると、冷笑を浮かべながらナイフを突き出そうとした。安形はそれを避けようと身を屈めたが、いつまで経ってもナイフは頭上を通過しない。そのかわりに安形の脛に鈍い痛みが走った。キツネに蹴られたのだ。

「ぐあっ！？」

がくんと、安形は倒れ込む。

「はあ、黒服失格だな。任務対象よりも情を優先するとは」

「……っ……！」

安形は唇を震わせながら拳を握り締める。

キツネは安形を通り越して屋上の中心に視線を向けた。そこでは安形の代わりに本田が後衛として鋭に攻撃を試みたようだったが、やはり普段と違う役目にうまく立ち回ることが出来なかったようで、曾根と一緒に鋭に吹き飛ばされ床に倒れていた。

「僕は二人が感染するまえに楽にしてあげようとしたのに……まったくお前の考えることは分からないな」

クスクスと笑いながらキツネは安形を見下す。

「ヴオオオオオオオオオオオオ！！」

中央で鋭がこれ見よがしに叫んだ。勝利の雄叫びか、これから本田と曾根に留めを刺すために意気込んでいるのか。とにかくこのままでは二人が鋭に殺されることは確実だ。

「あの二人の死も、この二人の死も、お前が引き起こしたことだ。お前が正しい判断をしていたのなら、こんなことにはならなかった。

安形さん、判断を間違えればどんな気持ちで動こうと残酷な結果しか呼ばないんだよ」

キツネは小馬鹿にするように安形を見る。安形はただ黙ってその目を見返すことしか出来なかった。

ババババババババババツ……—

丁度その時、屋上の数十メートル上からプロペラの音が聞こえ、一機の黒いヘリが現れた。黒アメリカの軍用ヘリ、ブラックホークを真似て黒服で開発されたものだ。

安形はそのヘリを不思議そうな目で見る。

「……草壁か？　どうやら、白居さんが痺れを切らしたみたいだな。いい加減地下に引きこもるのも限界だったんだろう。あの人は閉所恐怖症だから」

キツネは感情の籠らない声でそう言うと、視線を安形に戻した。

「この二人を生かしても邪魔にしかない。諦める」

「や、止める！？」

キツネは左足を前に踏み出し、ナイフを持った右腕を上に掲げ、僅かにオーバーな動きを見せながら、佐久間の心臓へとその刃を振り下ろした。

高い音が響いた。

金属と金属がぶつかり合い、火花を散らす音。

振り下ろされたキツネの黒柄ナイフは、突然空から降ってきた男のナイフに止められた。白い、雪のように白い柄をしたナイフに。

バババババ……

ヘリの音がうるさく屋上に響く。

その音を背中で背負い、腕に握ったロープを投げ捨てながら、男は口を開いた。

「間に合ったぞ、バカ野郎」

どれだけ待っただろうか、どれほど願っただろうか。安形はその男の姿を見た瞬間、纏わりついていた枷が体から外れたような気がした。自然と顔に笑みが浮かぶ。気がつくと呼んでいた。一緒に苦難を乗り越えてきた男の名を。

「^{せう}截ー！」

「何が起きる頃には全て終わってるだ。俺を馬鹿にするのもいい加減にしろ」

截はキツネの黒柄ナイフを弾くと、佐久間と愛を守るようにその前に立ちふさがった。

キツネは截の登場に一瞬だけ驚いたような顔をしたが、すぐに表情を戻しナイフを突き出した。截は極限まで集中してそれを己のナイフで打ち落とす。

「甘いな」

キツネは截の注意がナイフに移っている隙に膝蹴りをその腹へと浴びせた。その蹴りで截の体はくの字へと曲がる。

「間に合ってもお前が僕に勝てないことには何も変わらない。また寝ろ」

そして続けざまに黒柄ナイフの柄を思い切り截の後頭部へと打ち下ろそうとした。

「寝るのはアンタだ」

「っ……！？」

その瞬間、キツネの頭の真上に鋭い刃が振り下ろされた。キツネは辛うじてそれをかわしたが、ギリギリだったためか額に僅かに切り傷が出来ていた。

「……………まったく、僕の部下はみな反抗的だな」

截の横に降り立ったスタイルの良い、黒髪の女性を見ながらクスクスと笑うキツネ。その女性、翠^{すい}は手に持った折りたたみ式の、日本刀のような長い黒柄刀をキツネに突きつけるように向けた。

「翠、お前まで……………」

安形は遅い助っ人の登場に目を見開いた。

「安形さん。この『暴君』は俺たちが食い止める。安形さんはあの紫の怪物を」

翠と並んだ截が前を向いたまま言う。

「……………すまない……………！」

安形は喜びの気持ちを抑え、立ち上がった。

「直ぐに終わらせる」

そしてそう、覚悟を決めたように二人に声をかけ、鋭の待つ中央へと走り出した。

この事件の、全ての決着をつけるために――。

＜第十五章＞孤独な狂王（中篇）

＜第十五章＞孤独な狂王（中篇）

ネフトウヌス
” 般若 ”

「ヴオオオオオオッー！」

「ええええいいい！」

今にも本田の頭を踏み潰しそうな鋭の足に向って、安形は回収していた小型ナイフを全て投げつけた。総勢五本の小型ナイフは隼のように空中に飛び出し、深々と鋭の足に食い込む。鋭は足を振り下ろす直前になって突如走った強烈な痛み悲鳴をあげ、バランスを崩し倒れた。

「今だ、逃げる！」

鋭に向って走り続けながら安形は倒れている二人に呼びかける。その二人、本田と曽根はドブ水から這い出るように慌てて鋭から離れた。

「お前が依頼した相手は俺だろ！ 俺の仕事が終わっていないのに他の黒服に手を出すな！」

屋上の中央まで来ると安形は黒柄ナイフを構え、鋭と真正面から相対した。足元には無数のミミズが蔓延っており、注意を怠れば直ぐにでも感染してしまいそうだ。

「……醜い姿になりやがって……」

ミミズに覆われた紫の巨体を見て、安形は悲しそうに呟いた。

「俺が……お前の苦痛を終わらせてやる」

「ヴオオオオウウウ……」

もはや動く者は全て敵だとしても判断しているのか、鋭は自分が依頼し、ここまで導いた安形が相手だというのに、全く敵意を隠すことなく唸った。

「どうする気だ安形。あいつの体はネルガルで覆われているんだぞ？」

柵に手を付き、ようやく立ち上がった本田が不安げに安形を見つめた。

ミミズを全て殺すには大量の火で燃やすしかない。だが、その材料になりそうなタンクは既に使用済みだし、燃やしてもまた体から吐き出されたら何の意味も無いだろう。本田は「万事休す」といった表情を浮かべた。

「ミミズは感染するまで十秒間の猶予がある。その十秒で、鋭を倒すしかない」

「はあっ？ お前本気で言ってるのか？ ちょっとでも遅れば狂人になるんだぜ」

「それしか手がないなら、やるしかないだろ」

「……——言つとくが、感染したら迷わず殺すぞ？ 助けてる暇なんかねえんだ」

安形は静かに頷いた。それを覚悟の合図だと理解した本田は溜息を吐くと、鋭をちらつと見た。

「まずはさっきと同じだ。曽根にあいつの注意を引きつけさせる。」

お前は隙を突いて一気に攻め込め。もし鋭の懐に入り込めても、失敗すればミミズを払う時間なんかない。すぐに奴の反撃が来るんだからな。その一度で全て決めろ！」

「分かった」

安形は本田が立ち上がると同時に鋭の背後へ回ろうと移動を始めた。その間に、確認するように背後を振り返る。

——あまり時間が掛かれば愛さんや佐久間たちが持たない。すぐに決着をつけるぞ！

「向こうは大分盛り上がっているな」

屋上の中央で繰り広げられている鋭との戦いを横目で見ながら、キツネは軽く笑った。

その前にはキツネ自身が鍛え、部下として行動してきた二人の間が立っている。

「お前の目的はなんなんだ？」

右手に白柄ナイフを構え、左手で黒柄ナイフを引き抜きながら、截は探りを入れるようにキツネの目を見た。

「目的？ 僕は白居さんに頼まれて護衛に來ただけだけど？」

おどげるようにキツネは両手を左右に開く。

「だったら何で鋭を倒そうとしない？ もしお前が本当に『白居学の護衛』を優先するのなら、迷わず鋭を殺そうとするはずだ。……」

——お前の行動は不審点が多すぎる」

「ふ、初めて会ったときと比べて大分冷静になったじゃないか」

「茶化すな」

截は白柄ナイフの切っ先をキツネの眉間に合わせた。斜め横に立っていた翠も同じように黒柄刀を握った腕に力を込める。

そんな二人をどこか嬉しそうに眺めながら、キツネは自分の黒柄ナイフの切っ先を二人と同じように前に突き出した。

「そうだな。もしお前がいまここで僕を倒せたら……全て教えてやるよ。何もかも全部さ」

截は勢い良く地面を蹴った。己をこの世界に巻き込んだ、親友を死に追いやった、憎むべき最大の敵に向って。

彼に教え込まれた技術を使いながら。

それが彼の思惑通りの行動だと知る由も無く、ただ無我夢中で――

」。

安形に命を救われた曾根は、鋭から急いで離れると本田を見た。本田は指を動かして囃を続けるようにと伝える。

「……やれやれ、あれの攻撃を避け続けるのは半端なく危険なんだから」

溜息を吐きながら曾根はその指示通りに鋭に向って走り出した。

鋭はすぐにその動きに反応した。大きく腕を振るう。

「むおっ!？」

その腕が振られた瞬間、無数のミミズが曾根に向って飛んできた。あれほどの量を浴びたら払い落とすことは出来ない。間違いなく感染してしまう。

「くおおおっ!」

間一髪でミミズの雨を避ける。曾根は前転しながら鋭の目の前に転がった。

——反応が速すぎる！ 遠視感覚の力か!？

鋭は生物兵器であると同時に視界外の状態を感じることの出来る超感覚者だ。そのことを思い出した曾根は重大な問題に気がついた。

「本田！ ベイト・トツラブは——こいつに囃戦法は無意味だ!」

「何!？」

そこで鋭が拳を振り下ろす。直撃するコースだったが、先ほどの安形の攻撃で痛んだ足の影響か、直前で僅かに軌道がずれ、奇跡的に曾根の体には当たらなかった。

「あ、危なっ……！」

どわっと冷や汗が背に流れる。

遠くから様子を見ていた本田は危うく貴重な戦力である曾根を失いかけ、手に汗を握った。そして彼が放った言葉を思い出し、歯を噛み締めた。

「くそ！ ミミズの鎧に、囷が効かない？ 打つ手がないじゃねえか……！」

黒服にしろ、イミユニティーにしろ、ディエス・イレにしろ、感染者やイグマ細胞保有者との戦闘はベイト・トラップを骨組みとする。それが効かないことはつまり攻撃する手段が無いということだ。本田は何の指示も出すが出来ず、言葉を失ってしまった。

中衛は全員の命を握っていると言ってもいい。中衛が指示を出せない事は、全員の命を危険にさらすことを意味する。当然、あつと言う間に曾根と安形はピンチに陥った。

「くそ！ 鋭のやつ、三百六十度全てに目がついているのか！？」
いくら背後に回ろうとしてもすぐに気づかれ攻撃を受ける。安形はもはや後衛というよりは前衛に近い状況へと追い込まれていた。いつの間にか、曾根と一緒に鋭の拳から逃げ惑うことしか出来なくなっている。

「本田！ このままじゃ全滅だ！ どうかしてくれ！」

一発一発を死ぬ思いでかわしながら、安形は本田に助けを求めた。
「うるせえっ、今こっちも必死に考えてんだよ！」

本田は安形に負けないほどの焦った表情で叫び返す。

——こっちの動きが全て見えているのなら、見えていても回避出来ない攻撃を食らわせるしかねえ。でも、そんなことが可能なのか——！？

いくら考えても妙案は浮かばない。こうしている間にもますます二人は追い詰められていった。

「おい、早くしろ！ このままじゃ柵まで追い込まれる！」

既に安形と曾根は中央から大分離れ、屋上の端付近まで移動して

いる。もはやあと少しで逃げられなくなることは目に見えていた。あれでは殴り殺されるか下に落ちるしかない。本田は死の一步手前まで迫った二人の状況にさらに焦りを募らせた。

——まずい！ まずい！ まずい！ 俺一人になったら勝てるわけねえ！ 逃亡しようとしてもキツネか白居に殺されちまう……！ マジでどうすればいいんだよ！？

任務放棄は死あるのみだ。一度任務を受けた以上、それを終わらせるまでやめることは許されない。あらゆる意味でのプレッシャーが本田を襲う。

——くそ、くそ、くそ！ 考えろ、考えろ、考えろ——要は鋭が避けられなければいいんだ。避けられない攻撃、避けられない……避けることが出来ない……動けない……ん？

「——そうか！」

何かが頭に閃いた。成功する確率は低いが、これ賭けるしかない。本田はその考えを急いで二人に伝えた。

「柵の手前、ギリギリで鋭の攻撃をかわせ！ あいつを空中に放り出すんだ！」

「はっ？ 落としてもまたすぐに上がってくるだろ！ 何言ってるんだ！？」

本田の意図することが理解出来ず、安形は声を荒げた。

「いいから言うことを聞け！ 上手く行けば確実に鋭に攻撃を浴びせられる！」

本田はまがりなりにも黒服で中衛を張っている男だ。安形は不安感を腹に押し留め、素直に従うことにした。

「失敗したら、化けて出てやる……！」

そうぼそりと呟きながら。

「ヴオオオオアアアア！」

勢い良く雄叫びを上げ、鋭は前方の二人に向って拳を振り下ろした。同時に腕に纏わりついたミミズが周囲に飛び散り、小さな雨となる。

「くそっ！」

安形と曾根はそれぞれ自分の上着を脱ぐと、拳を避けながらそれを傘のように被り、ミミズの雨を防いだ。ぼとぼとと上着に不快な音が鳴る。

「こんな手は何度も使えない。さつさと決めるぞ」

その上着を柵の外に投げ捨てながら、曾根は本田が唱えた内容を実行しにかかった。柵のぎりぎりまで下がりながら、鋭の攻撃を避けるために膝を軽く曲げる。安形もそれに習い、同じように後ろにさがった。

「俺、避けるのあんまり得意じゃないんだけどな」

柵に背を当てると同時に苦笑いする。

「泣きごと言っている場合か、来るぞ！」

とうとう二人を追い詰めたと思った鋭は、迷わず腕に力を込め、渾身の一撃を前に突き出した。

その巨大な拳の圧迫感と速さ、力強さに体中の神経を振るわせながら、安形は右に、曾根は左にそれぞれ身を投げ出す。鋭の拳は柵を大きく歪め、粘土のようにぐにやぐにやに曲げた。

「……っこの——！」

自分がなんとか生き延びたことを知った二人は、決死の表情で体を起こすと、まだ拳を振り下ろしたままの状態の鋭の背に全力で体当たりをした。

「ヴォオオアアア！？」

バランスを崩した鋭はそのまま前のりに屋上の外へと飛び出す。

柵が外に向って歪んでいる分、それは実にスムーズに行われた。

だが鋭は下に叩きつけられることは無かった。体が空中に飛び出す直前、その歪んだ柵を掴み、なんとか建物の側面に己の体を留まらせる。

「駄目か……！」

がっかりしたように安形は呟いたが、本田はこの瞬間を待っていたかのように叫んだ。

「今だ！ この状態なら例えいくら見えていようと攻撃を避けることは出来ない。やれえっ！」

鋭は両手で柵を掴み、ぶら下がっている状態だ。確かにこの状態では反撃も回避も出来ないだろう。この形が成り立つまで何度か試みる予定だったが、いきなり成功したことに本田は喜色を浮かべた。

「——なるほど——……！」

安形は本田の咄嗟の機転に感心すると、屋上へと戻ろうとしている鋭に向って駆け出した。今の鋭は無防備だ。今なら頭部に攻撃し、一撃で全てを終わらせることが出来る。

下に落ちる手前の位置、屋上の端に足を乗せると、安形は丁度足元からこちらを睨んでくる鋭の顔を見た。紫の、怪物と化した鋭の顔を。

決着をつけるべく、力強く黒柄ナイフを振り下ろす。

だが、——……鋭の顔の直前になってその刃は止まった。

赤と青の中間、暗黒に近い夕焼けのような瞳がじっと自分の目を見つめる。

止められなければ、犠牲者が増えるのなら殺さなければならぬ。

そう覚悟し、決意し、意気込みここへと踏み込んだはずだった。

だがその瞳を見た瞬間、安形は思い出してしまった。自分を信頼し、頼ってくれた鋭の顔、人間だった頃の姿を。

いくら黒服として、この世界最高峰のエージェントの一員として組しようとも、所詮はまだ三年目の新米。元々持っていた優しさ、そして黒服として冷徹につ徹しきることの出来ない甘さが、無意識のうちに安形の腕を止めさせていた。

「馬鹿野郎っ——死ぬぞ——！」

耳の奥にそんな本田の怒号が入り込む。

「ヴォアアアアアアアアアア！」

気がつくと、空が下に、地面が上に移動し、安形はぐるぐると回りながら鋭から離れていた。

何度もお互いの刃が交差する。

火花を散らし、血飛沫を飛ばし、一步間違えば即己の命を失うかもしれない斬り合いを続ける。

高度な技術を要するナイフの戦いは刹那的だ。本来ならばここまで長引くことはない。斬り合う彼らが生き延びているのは奇跡か、それとも人為か。その理由は神のみぞ知るところだった。

「強くなつたな」

キツネは截の鋭い突きを後方に飛ぶことで回避すると、本心からそう言った。珍しく微かだが息を乱している。

二人がかり。確かにその影響は大きいだろう。翠の実力は黒服内でも高く、しかも彼女は長年キツネの部下として行動していたためその動きに見慣れている。彼女がいることは大分有利に働く。だが、例えそういった利点を無視しても、確実に截の実力は上昇していた。感染者たちとの戦闘、赤鬼との戦闘、黒服での経験、キツネの指導。三年前と比べれば遥かに、別人のように截は変わっている。黒服の中で見れば、まだ截など良くても中の上だ。しかし他のメンバーとは明確に異なる気持ち、親友の敵討ちという強い思いがその進化した実力と相まって、高い生存力を作り出していた。

——思っていたよりも腕が上がっているな。これなら白居も……

二人の攻撃をかわしながらキツネはとある算段をした。自分がこの事件に介入した本来の目的に関わる算段を。

「どこ見てるんだよ」

翠はキツネの注意が自分たちから離れたのを見逃さなかった。一瞬の隙を突いてフェンシングのような動きでその胸に強烈な黒柄刀

の突きを叩き込む。

「っ……！」

キツネは反射的にそれを防いだが、その影響で截の振り上げた黒柄ナイフを避ける術^{すべ}を失ってしまった。

——まずい、これは——

鮮血が飛び散った。

鮮やかな赤い血が流れ出る。截の攻撃をかわしきれないと悟ったキツネはその腕で黒柄ナイフを防いだのだ。

「血、赤いんだな。お前の血は黒いと思ってたよ」

黒い血は悪魔の血。截はキツネのことをそう蔑^{あざわら}むと、憎悪の籠った目で腕に力を入れた。彼の腕を切り落とそうと考えて。しかし流石にキツネもそこまで甘くはなかった。ひらり捻^{ひね}りと手首を返し、截のナイフを腕の下へと移動させる。

「クスクス、前に言っただろ。僕はあくまで『人』だ。それに、そういう言い方をすれば黒い血にはお前の方が近いんじゃないか？」

「何……？」

言葉の意味が分からない。超感覚者はあくまで人間。それは科学的に立証されている。

「身体的な意味じゃない。その存在意義のことだ」

余裕を取り戻したキツネはそう呟くと、翠の黒柄刀を押さえつけた黒柄ナイフをくると自分側に円をかくように回し、拘束を解くと同時に尋常ではない速さで前に切りつけた。

「ちっ！」

仕方が無く、翠はそれを避ける為に一旦後ろに下がる。

キツネは自分の腕で截のナイフを防いだまま、顔を彼に近づけた。「目に見えるものがその全てだとは思うな。何事にも真意がある」

「さつきから何を言っている……？」

妙に真剣な顔をしていうキツネの考えが理解出来ず、截は戸惑いの表情を浮かべた。

「隙あり」

キツネはその瞬間、急に笑みを浮かべると、腕で強引に截のナイフを横にずらし、押し出すように蹴りを放った。完全に油断していた截は見事に吹き飛ぶ。

「まだまだだな。でもまあ、今回はこれで十分か」

「ぐっ……この……！」

截は痛みには耐え、再び走りかかろうとしたが、横の方から感覚で脅威を感じ、踏みとどまった。

視線をそちらに向けると、安形が地面に倒れ、その前に紫色の怪物が今にも腕を振り下ろそうとしていた。

「安形さん！」

思わず叫んだが、彼の体はピクリとも動かなかった。

「化物に同情しやがって、あの大馬鹿が！」

千載一遇のチャンスを経によって振ってしまった安形に舌打ちし、本田は声を荒げた。

「曾根、鋭の気を反らせ！ 俺がその馬鹿を助ける」

曾根は直ぐに理解し、真横にいる鋭に向って攻撃をしかけた。しかし鋭は腕を振って曾根を遠ざけるだけでまともに相対しようとはしない。どうやら今は安形を殺した方がいいと本能的に判断したようだ。

「くそっ！」

今安形を失うことはこちらにとってマイナス面が大きすぎる。鋭がいなければどこで死のうと勝手だが、この限られた戦力下では戦

える存在は貴重だ。本田は肋の痛みおはに耐え、仕方が無く自分の足で安形の下へと向った。

「早く起きろ！ 俺を殺す気か！」

自己中の極みであるセリフを投げつける。

「……—うつ……！？」

ようやく意識がはつきりしてきたのか、安形はその声で頭を上げた。

「ヴオオオオオオ！」

同時に鋭が拳を下に向って叩きつける。安形は間一髪のところをそれをかわした。しかし完全には避け切れなかったようで、避けながら打たれた肩を痛そうに押さえた。鋭はその隙を逃さず二撃目を繰り出す。

「ぐあっ！？」

安形の体は弧を描く様に飛び、本田の足元へと転がった。

「おい、大丈夫か！ まだ動けるか！？」

色んな意味で心配そうに安形の顔を覗く本田。

「——だ、大丈夫だ。吹き飛ばされた分、ダメージは少ない。さっきのは頭から落ちたのが悪かった。まだ十分動ける」

口から血を垂らしながら安形は強がった。恐らく内臓にいくらかの損傷を受けていることがその様子から判断できる。

「動けりやそれでいい。……で、どうするよ？ お前の所為で今度こそ本当に打つ手が無くなっちゃったぜ。綺麗さっぱりな」

「また、柵に追い込めばいいんじゃないのか？」

「いくら知能が低下したとはいえ、そこまであいつもアホじゃねえよ。あの手は一度きりの切り札だった。例え使っても、もう鋭は引つかつたりはしねえだろうな」

本田は安形を軽く睨みながらそう悔しそうに言った。

「おい、次はどうするんだ！？」

そこへ曾根が鋭から逃げつつ息を切らして駆けて来る。

——くそっ！

安形は不甲斐なさから地面を強く叩いた。佐久間と愛の命もかなり弱まっている。なるべく早く鋭を倒さなければいけないはずだった。倒すと覚悟をしていたのにこのザマだ。己の心の未熟さに嫌気がさす。

「ヴオオオオウウウ……」

満身創痍の三人をあざ笑うかのように見下すと、鋭は動いた影響で体から離れたミミズの鎧を再生産するために、僅かに体を縮こまらせた。前屈みになっているのは安形たちの攻撃に素早く対処できるようにしているからだ。

「……あの『溜め』が終了したら俺たちは終わりだ。いつそのこと鋭を倒すのを諦めキツネをのすか？　ヘリからロープで降りてきた奴らも居るし、この数なら勝てるだろ。まあ、後で黒服に追われることにはなるだろうけどな」

自嘲気味に本田は笑う。

さっき倒れた時に付いたのか、安形は己の体に這っていたミミズを叩き落しながら周囲に視線を走らせた。屋上の地面はもうその殆どが薄くミミズに覆われ、無事な場所といえば柵の外と、キツネや截、翠が立っている入り口付近だけだ。佐久間や愛の怪我を心配する以前に、ともに動ける場所も時間も限られ始めていた。

「ここが境界線だ。ここが攻撃の限界点だ。これ以上もがいても俺たちに勝ちの目は無い。俺はもう諦める。お前らはどうするんだ？」

『戦争論』の著者、クラウゼヴィッツは攻撃の優越はある点を持つて逆転すると述べている。攻撃が上手くいけばいくほどこちらの戦果は大きくなるが、それにつれて戦闘力が減少し、消耗が大きくなるという考えだ。本来は戦争に対して使われる言葉だったが、本田をそれを引用して現状を表現した。

「ここで引き下がったらなんのために生きているのか分からなくなる。俺は……諦めない。鋭を倒すさ」

全身の軽い火傷や引っかき傷、そして先ほど鋭から受けた肩の打撲と内臓の損傷。安形はそう強がっているが、誰の目にも限界なの

は明らかだ。本田は頭の悪い子供を見るように安形を一瞥^{いちべつ}すると、曾根に顔の向きを移した。

「お前はどうすんだ？ この中では一番怪我が少ないけど」

「……黒服に入った時点で俺は既に死人だ。今更死に対する恐怖などない。やることを最後までやるだけだ」

「真面目だな。いや、この場合はイカれてるって言う方が正しいのか？ まあ何にしてもこれでキツネに特攻ルートは消えたわけだ」

二人に逃げる意思が無い以上、キツネを倒して逃げることは出来ない。本田は仕方が無く鋭に挑み死ぬ覚悟を決めた。

諦めた上の戦闘。死を覚悟した、死ぬことが前提の戦い。日本古来の武将は戦^{いくさ}のとき、常に死人として戦い死を恐れなかったと言われている。だが、それは勝ちを意識した、勝利のための覚悟だ。死ぬ気で戦うものは必ず死ぬ。それが真理。己の死を認めてしまった時点で、二人が鋭に勝つ可能性は消えてしまった。なぜならば死を受け入れてしまっているのだから。どんな場合も、どんな物事も諦めたらそれでお終い、負け。その時点で全てが決まってしまふ。本気で生き残りたいのなら、勝ちたいのなら、決して死を受け入れてはいけない。どれほど傷を負おうとも、追い詰められようとも、最後まで生にしがみ付き、諦めない人間が生き残るのだ。そう、この男のような――

「曾根、さっきお前は偶然鋭の攻撃を避けることが出来たよな？ 確か俺たちが鋭と戦い始めて一番最初の頃だ」

傷だらけの体にも関わらず、瞳に光を灯しながら安形は言った。

「ん？ ああ、どうやらお前が投げたナイフの傷が痛んだらしい。おかげで拳の照準がずれたんだ。だから助かった。……それがどうかしたのか？」

「……最初に鋭を見たときから思っていたんだが、鋭は俺が傷を付ける前から足を痛めている。多分、俺が来る前にお前らがつけたダメージが原因なんだろう」

ダメージ。その言葉に曾根はガスタンクの爆発を思い起こした。

良く見ると鋭の足は安形に付けられた小型ナイフの他に、タンクの破片のような物が無数に食い込んでいる。背中への破片はそれほどダメージを与えられなかったようだが、細い人間時の足にはあの破片の効果は大きかったらしい。だから疲労している自分や、後衛である安形がここまで奇跡的に攻撃を避け続けることができたのだ。

「まさか……お前……」

「ああ、鋭の左足を集中的に攻撃すれば、動きを完全に止められる。まだ諦めるのは早いぞ」

力強く、安形は言い切った。

「遠視感覚の影響で攻撃が当てられないから動きを止めようとしているのに、足に攻撃できるわけがないだろ」

「鋭の感覚は確かに厄介だけど、万能じゃない。多分クリアな映像としては見えないはずだ。実際、俺が投げた五本の小型ナイフは全て命中しているからな」

「そ、それでも動きを止めるとなると、どこかで大きなダメージを与える必要があるはずだ。大体、あいつの攻撃やミミズを避けながらちまちまナイフを投げる体力なんか誰も残っていない。どうやって攻撃する？」

曾根は命を諦めていた分中々安形の案を認めることが出来ないらしく、食いつくようにそう反論した。死を覚悟した状態で救われる可能性を提示されることは、幸と不幸の二通りの感情を呼ぶ。前者はそのまま助かる見込みへの喜び、後者は再び死を覚悟しなければいけない、より重い絶望への恐怖。曾根が今抱いている思いはまさに後者だった。

「……ひとつ案があるぜ」

それまで黙っていた本田が不意に口を開いた。

「これは賭けとしか言いようがないが、実効すれば鋭の足を壊して、直接急所に攻撃することが出来るかもしれない」

「どんな方法だ？」

不審そうに曾根が聞き返した。

「『三重囷』だよ。黒服内の資料にあつた短期決戦用戦法の前例だ。前衛、後衛、中衛の全員が囷として相手に突撃し、注意を拡散せると共に辿り着いた人間が攻撃を当てる戦い方。もっともその前例だと失敗して全滅したらしいがな」

「三人全員で？ 随分ぶつ飛んだ戦法だな」

本田の言葉を聞いて安形は目を丸くする。

「確かにまともな戦法じゃねえが、まさにこの状況に適した技じゃねえか。少しでも生き残れる可能性があるのなら俺はやるぜ。絶対に」

チームを全滅させた戦法。成功する可能性よりも失敗する可能性の方が高いギャンブルのようなもの。安形と曾根は躊躇し、黙り込んだ。

「ヴウヴウウ……」

夜空に浮かんだ星々の下で、狼の唸り声のような重い響きが起こる。身を屈めていた鋭はゆっくりとその体を広げ始めた。その肌には再びウネウネと蠢く生き物たちが蔓延っている。

「早く決断しろ！ 奴の『溜め』が終わったぞ」

「くそつ……——分かった、やってやる！」

黒服としての経験も、感染者との戦闘経験も圧倒的に本田の方が上だ。安形は覚悟を決め、その案に乗る事にした。

「曾根！」

本田は叱るように叫んだ。それを聞いた曾根は自分の抱いていた恐怖を振り払うと、表情を繕い冷静そうな顔で呟いた。

「……お前たちがやるなら俺は協力するだけだ」

「よし、こうなったら体の頑丈さと運だけが頼みだ！ 突っ込むぞ！」

大きく息を吐き出しながら、本田は腹の底から叫んだ。その音で周囲の音が一瞬消し飛ぶ。

鋭が完全に膝を立てると同時に、三人は走り出した。もはや策も罠もへつたくれも無い、完全なる特攻だ。傍から見れば馬鹿な行為

にしか見えないかもしれない。だが当の三人にとてはこれが最善であり、最良の方法だった。

「来るぞ、避ける！」

腰を捻^{ねじ}り肘を折り曲げた鋭を見て、本田は二人に号を出す。全員が囷のような状態といっても、中衛としての役目からかやはり反射的に命令を出してしまうようだ。

二人もそれを合図に足の行き先を変えた。右から順に安形、本田、曾根と、ギリシャ神話の海の神、ポセイドン——ネプトゥヌスが持つ三叉の槍、トライデントのような形に三人の位置が形成される。

短期決着。もはやそれしか頭がない。三人は三人とも鬼のような表情を浮かべ、鋭の周囲に散らばった。

「ヴオオオアアアア！」

得体の知れない何かを感じ取ったのか、鋭はこれまでにないほど警戒し、彼らを自分から遠ざけようとする。

「本当に見えないんだろぅな！」

頭の横を掠^{かす}める豪腕に頬を焼きながら、曾根は所持していた全ての小型ナイフを順に鋭の左足へと投げつけた。そのどれもがものの見事に突き刺さる。

「ヴオオオオオオオ！」

「効いているぞ、頑張れ！」

小型ナイフを持っていない安形は直接黒柄ナイフを叩き込めるチャンスを伺いながら二人に激^{げき}を飛ばす。声に反応し、鋭は側面へと回りこんでいた安形の頭に裏拳を打ち込もうとしたが、その瞬間左足がぐくんと折れ曲がり大きく攻撃を外した。

——もう少した！

懷に飛び込みたい気持ちを抑え、安形は鋭の拳の届かないギリギリの距離に留まる。不注意に怪物の腹に飛び込めばどんな反撃を負うかは三年前の出来事で身にしみて理解している。

「ぐおあっ!？」

鋭の真正面にいた本田が蹴りを食らい、吹き飛んだ。やはり肋^{おはし}の

傷の影響で早く動けなかったらしい。今の衝撃で骨の一部が内臓に突き刺さったのか、屋上端の柵横で泡を吹いて痙攣を始めた。

「黒服を……な、めるな……！」

だがそんな悲惨な状況にも関わらず、本田は声を絞り出すと己の小型ナイフのホルダーを今だ鋭の周囲で走り回っている二人の方へ投げた。丁度曽根がそれを上手く受け取る。

「さっさと決めるぞ！ 早くしないと本田が狂人化する」

本田が落ちた場所はミミズの真っ只中だ。腹部に大きな傷を負っている彼が感染を免れるはずはない。敵を増やさないためにも、曽根は気合を入れて叫んだ。

「分かっているさ……！！」

安形はちらりと入り口付近を見る。

——佐久間と愛さんも完全に動かなくなっている。もう一刻の猶予もない。これで必ず、絶対に終わらせてやる！

獲物が二人に減ったことで狙いやすくなったのか、鋭は先ほどよりも的確に二人に攻撃を繰り返すようになった。二人の体に掠る拳の回数が激増する。

「この野郎！ 暴れるなああ！」

こちらの意思とは裏腹に中々ナイフを投げる暇が作れない。曽根は下唇を噛み締め必死に攻撃をかわし続けた。

「あつ……！！？」

しばらくその状態が続いたのちに、安形は背後で立ち上がった一つの影を見つけた。本田だ。唾液と泡を口からだらしなく吐きながら、黒柄ナイフを握りしめこっちに向っている。

——あいつがここに乱入したら俺たちのリズムは崩れる。曽根もそれは分かっているだろう。間違いなく本田を殺すはずだ！

安形にとって本田は悪人でも憎むべき敵でもなんでもない。ただの仕事の同僚。だから彼の死を受け入れて鋭と戦うことなど出来るわけがなかった。距離的に考えて狂人化した本田がここに辿り着くまで五秒。まだ完全に鋭の足が壊れてはいないのだが、本田の身を

案じて安形は無理に突撃を始めた。

「うおおおー！」

鋭に負けないほどの雄叫びを上げ、その胸に向って踏み出す。鋭は待ってましたとばかりに拳を振り下ろした。

——馬鹿が、今更俺が本田を殺すわけないだろ！

心の中でそう叫び、曽根は安形の頭蓋骨に直撃しそうな鋭の腕の関節、丁度肘に内側に向って二本の小型ナイフを投射した。流石に腕を引っ込めるまでとはいかないものの、鋭は僅かに動きを鈍らせる。安形はその隙を突いてなんとか拳を避けきった。

曽根はそのまま続けざまに残り三本の小型ナイフを投げたが、今度は全て叩き落されてしまった。もう残された手は遠視感覚の合間を縫って直接鋭の左足にナイフを突き立てるしかない。これで完全にこちらの策は潰えた。

——くそつ、これで終わりか——！

流石に安形も覚悟し、迫りくる大きな拳骨に身を任せようとした。鋭の足は死んでいない。小型ナイフも使い切った。遠視感覚の中近付くのは不可能。こうなれば誰であっても諦めるしかないだろう。生きるための最後の希望が消えうせた瞬間だった。

「まだだ、まだ終わっていない！」

刹那、怒号を上げながら曽根が鋭に向って体当たりする。当然それはすぐに止められたが、鋭の腕に吹き飛ばされる直前、その僅かなタイミングで曽根は己の黒柄ナイフを鋭の左足に突き刺した。どうやら元々攻撃を食らう覚悟でそれだけを狙ったらしい。確かにいくら鋭でもまさか獲物が避けることを度外視して、その身と引き換えに攻撃してくるとは思わないだろう。見事に鋭はバランスを崩し、地に膝を付いた。

肋骨を数本折られながら盛大に宙を舞った曽根は、地面に体を打ちつけ、額を擦り付けると同時に真横をよたよたと駆けて行く狂人本田の姿を見つけた。

「あああうー……」

「お前はそっちに行くなつて！」

腹の激痛を我慢し、後ろから腰に抱きつく事で本田の動きを封じる。倒さないのは体のダメージの影響と、情を抱いてしまった本田の体を気遣つてのことだ。

「――安形あああつ！」

その状態のまま腹の底から叫び声をあげる。

安形は遂に自由に動けなくなった鋭を見つめ、曾根の期待に答えるべく一氣にその距離を詰めた。

「ヴオオオオアアアアツー！！」

「えええええいいいい！！」

お互いの声が空気を引き裂く。

黒服の計画を、白居学の野望を止めるために全てを捨て、命をかけた鋭。

例え悪魔の手先になろうとも自分の信じる正義、信念のためにそれを阻止しようとする安形。

どちらが正しいのか、どちらが間違っているのか、その答えは分からない。ただ言えることは一つ。

勝った方が全て。それだけだ。

歴史にしても、戦争にしても、何にしても、この世の流れを決めるものは結局は『力』。暴力、知力、権力、財力、人力、人の行動を支配するものには全て『力』という言葉が付く。愛や平和などと理想を掲げることは誰にでも出来る。だが人間は人間である以上、動物である以上、最後に頼るものは必ず力なのだ。弱肉強食。それが全てでありこの世の真理。力がなければ誰も守ることは出来ない。戦争抑止のために大国が核兵器を所持し合うことがそのいい例だ。

今、この戦いにおいても結局は力の強いものが生き残る。

それは暴力なのか、知力なのか、はたまた別の力なのか、なんにしても強いものが勝つことには違いない。鋭と安形もこれまで人間が犯してきた幾多の戦いと同様、己の持つ力を使い、互いにその命を奪おうとそれぞれの矛を向け合った。

足を一步踏み込むごとに死の気配が増す。圧倒的な殺意と憎悪。それが籠った鋭の視線をしっかりと受け止め、安形は体ごと黒柄ナイフを突き出した。

ほぼ同時に鋭もまた鋭利な己の爪を強烈な速度で打ち出す。

安形はただの人間。超感覚者ではない。これほどの近距離で相手の攻撃をかわすことは出来ない。当然、同時に攻撃を繰り出せば鋭の方が速度でも力でも勝る。

安形自身もそれを理解していた。理解しているにも関わらずあえて突っ込んだ。例え自分の命を失おうとも、こちらの攻撃が心臓に届けばそれでいいのだ。鋭の暴虐さえとめることが出来れば、佐久間と愛は助かるから。

黒色の爪が眼に映る直前、安形は鋭の依頼を成し遂げられなかったことを悔い、心の中で謝った。

——すまない——鋭——

「しゃがめええ——！」

鋭い声が後頭部を突き抜ける。

咄嗟に安形は膝を屈めた。直後に頭の真上を鋭の巨大な拳が通過する。

目だけを動かして声の主を見ると、こちらを見つめる截の姿が見えた。

——そうだ、果たさなきゃいけない約束はもう一つあった——

「……——つうおおおおああああつ——！！」

そのまま眼前の巨大な胸に飛び込む。

——鋭——！！

黒い刃が、生と死の象徴である黒服の、死神の鎌が、その瞬間——

――紫染^{しせん}の怪物^{うが}を穿^{うが}つた。

<第十六章>孤独な狂王（後編）

<第十六章>孤独な狂王（後編）

十秒間。

それがこの戦いの結末を確認できる最大の時間。

鋭の心臓に刃を立て、彼と重なるように倒れ込みながら、安形は己に残された時間をそう仮定した。二人の間合いはほぼゼロ距離。当然鋭の体に蔓延^{はびこ}っているミミズたちは本能の命ずるままに安形を襲^{またたく}つ。

瞬^{またたく}く間に飛び移り、その体内へと侵入し、支配し、主のために周囲の生きとし生けるものを破壊する。鋭の持つ最大の特性であり、黒服の生体技術の集大成。疫病鬼^{ネルガル}という名を与えられた感染生物。

彼らは鋭の意思によって行動し、その死と共に同時に感染能力を失い機能停止する。逆にいえば、彼らが動きを止めないということはまだ鋭に戦う力が残っていることを意味していた。

既に全身をミミズに覆われているため、今更鋭の上から退いても意味は無い。黒柄ナイフを引き抜き、鋭の黒い血を体中に浴びながら、安形はどうにかミミズの動きが止まることを願った。

一秒、二秒、三秒――

どんどん過ぎてゆく時間。しかしミミズの動きは止まらない。安形に纏^{まと}わり付きながら、そこら中の皮膚から頭を体内へ潜り込ませていく。

「安形――！」

己の自我を失い、鋭の道具となった本田を必死に腕の中に押さえ続け、曽根は安形の様子を食い入るように見た。

「ああああああああ——」

その曾根自身も、抱えている本田の体からこちらへ移ろうとするミミズや、足元から這い上がってきたミミズに覆われ今にも感染しそうだ。次第に^{まぶた}瞼が重く、意識も遠くなっていく。

——ここまで、ここまでやっても駄目なのか！？

霞が掛かったような視界の中、安形は黒柄ナイフを再び振り上げようとした。しかし既に大分体内に侵食されている所為か、腕に力が入らず手からナイフが抜け落ちてしまう。

鋭に最後の一撃を叩き込んでから既に六秒。もう後が無い。ふらふらと鋭の胸に崩れ落ちる。

截と翠が安形を助けようと駆け寄っても、その体を取り巻いているあまりに多いミミズの影響でどうすることも出来ないだろう。なにより今二人はキツネの相手で手一杯の状態だった。

心臓を貫かれた状態の鋭がまだ動けるか、それとも死ぬのか。その結果が後者になることをただ願うより手は他にない。

十秒感染まで残り三秒、二秒、一秒——
擦れる音がする。

鋭の首が僅かに上がった。安形は反射的にその顔を見上げる。

それは怪物の、イグマ細胞に支配された化物の顔ではなく、人間のように感情の籠った表情をしていた。まるですまないと謝っているような表情を。

「鋭——？」

脳裏に過ぎるかつての鋭の姿。がつくりと、彼の頭が地面に落ちる。

その瞬間、全てのミミズが動きを止めた。

遠のいていた意識が戻ってくる。

本田と一緒に地面に寝転びながら、曾根は鋭と安形の方に視線を向けた。自分の意識が戻ったということの意味は一つだけだ。その意味を心の中で叫ぶ。

——…勝った——

「……う……？」

感染が解除されたことで内臓の激痛が戻ったらしく、血を吐き出しながら本田が呻いた。

「……終わった、のか？」

それでも決して涙をみせることなく、任務の結果を確かめる。曾根は彼の命がまだ持っていることに安堵し、ずっと止めていた息を吐き出すように答えた。

「ああ、終わった。俺たちの勝ちだ」

「……そうか」

これで任務は完了だ。ずっと張り詰めさせていた神経を緩め、本田は今日始めて体の力を抜いた。

嬉しさと、生き延びたことに対する喜びが湧き上がってくる。

「これで昇進だな」

そして満足そうに、邪な言葉よこしまを呟いた。

「翠、安形さんを」

床に広がっていたミミズたちが動かなくなっていくのが分かる。鋭の死を悟った截は翠に声をかけた。

「分かってる。けど、そっちはどうするんだ？」

顎でキツネを示しながら、翠は警戒の籠った表情を浮かべた。キツネは翠の鋭い視線にワザとらしい笑顔を返す。

「安形さんが鋭を倒しちゃったからな。……——この二人はその報酬として殺すのはやめるよ。生かしておけば安形さんを操るいい道具にもなりそうだし。どうやら安形さんは僕が思っていた以上に使えるみたいだからな」

截は両手のナイフを構えたままキツネをじっと睨んだ。その視線をしっかりと受け止め、キツネは話を続けた。

「……嘘じゃないさ。僕は言葉遊びはしても約束を破ったことはない。お前もよく知っているだろ」

截のナイフを手の平で押し下げ、そう自慢するように言う。

キツネに刃を向けられるチャンスなど滅多にない。心では腕を振りたくて仕方がなかったが、背後に寝ている二人の体ももう限界だと分かっている。仕方がなく截はナイフをしまった。

すぐに回れ右をし、佐久間と愛の様子を伺う。寄って来た数匹のミミズたちは戦いながら足で潰したり遠ざけたりしていたから感染の可能性は低い。心配するべきは二人の傷だけだ。確か二人とも尋常ではない出血をしていた。普通ならもうとつくに死んでいるだろう。

恐る恐る体の状態を確かめると、奇跡的にも二人は生きていた。

「——良かった。早く傷の手当てをしないと……！」

自分で行ったのか佐久間の腕は上部が布で巻かれ、止血されている。愛の方は何の対処もしていないようだったが、見た目よりも傷は浅いらしく、また負傷箇所が腸だったため永らえることが出来たようだ。刺さっているナイフを見ると、キツネがこれを行った犯人だと推測できる。怪女を一撃で仕留められるほどの腕でなぜ疲労している女性一人を殺せなかったのかは不明だが、截はそれにはあまり深く考えなかった。

安形は自分の体を見た。体内に入り込もうとしていたミミズたちが、ボロボロと肌の上から落ちていく。完全に機能停止したようだ。これで夢遊町中の狂人たちも皆もとの人格を取り戻すだろう。

赤黒い血の池が足元に、鋭の胸の上に広がっている。既にズボンや上着はビチョビチョだ。だがそんなことなど全く意に介さず安形はじつと鋭の顔を見つめた。

飛山鋭。彼の一生は何だったのだろうか。

安形はどうして彼が黒服に利用されていたのかも、数多の超感覚者たちの中で、なぜ彼が般若の実験体選ばれたのかも何も知らない。そしてこの町中の人々を犠牲にしてまで彼が食い止めようとしたものが一体なんだったのかも、全ては謎のままだ。

だが、もうその答えを知ることが無いだろう。結果として鋭の黒服に対する反逆は成功した。極秘実験施設であるこの白居邸は公の下に晒され、夢遊町は今後何年も復興するまで政府の監視下となり、多くのマスメディアも訪れることになる。こんな場所で実験を続けることなど出来はしない。

実験に関する全ての資料や機器も破壊した。極秘の研究である以上、同じようなものが他の研究所にあるとは考えられ難い。ましてや鋭の体に関わった研究員も全て死んだのだ。例えこの計画を再開しようとしても、一からのやり直しだ。当分の間は何も出来ないに違いない。

研究の集大成である鋭自身もたった今この世を去った。

イグマ細胞は生命活動を停止するとそのデータを採取し難くなる

という特徴を持つ。鋭の亡骸からその体のデータを採取することは困難を極めるのだ。

安形は思った。もしかしたら、鋭は最初から死ぬつもりだったのではないのか。そのために自分を雇ったのではないのかと。鋭にとって最後の暴走は予定外の現象だったのだろう。おそらく鋭は最終的には必ず自分に刃を向け、殺されることを考えていたのだ。それが白居の計画を阻止するための決めになるから。それが、最大の攻撃だから。

だから鋭はあのか、実験室で自分を裏切るような真似をした。ワザと嘘について狂人を呼び込んだ。自分の敵意を呼び起こすために。佐久間と愛を助けるという名目で己を殺させるために。

だがこれはあくまでただの推測だ。実際のところ、鋭は本気でパンドミックやアウトブレイクを引き起こそうとしたのかもしれないし、そうではなかったのかもしれない。鋭が死んだ今、真実は分からない。ただ安形は鋭の目的が後者だと確信していた。最後のあの表情を見たから。化物でも、怪物でもない、純粋な人間としての鋭の顔を。

「安形さん」

截が呼ぶ声が聞こえる。名残惜しそうに鋭の死に顔を数秒ほど見ると、安形はその場を離れた。滑るように紫の巨体から折りながら、急いで屋上の入り口へと向う。

「二人は、大丈夫か？」

そしてずっと気になっていたことをすぐに聞いた。

「ああ、心配ない。重傷には違いはないけど助かる見込みはある。幸い上には大助さんが操縦しているヘリもある。まだギリギリ間に合うはずだ」

「そうか、良かった」

安形はほっとしたように胸を撫で下ろした。

「あ、安形さん……」

真下から声が聞こえる。下を向くと、佐久間が青白い顔でこちら

を見上げていた。

「え、鋭はどうなったんだ？」

心配そうに聞いてくる。

「鋭は……死んだ。もう動くことはない」

「……そうか」

佐久間は悲しそうに目を伏せた。僅か三日間とはいえ苦楽を共にした仲だ。情の厚い佐久間にとって例えこの事件の原因であろうと心を痛めずにはいられないのだろう。

「佐久間。喋らない方がいい。お前の怪我は軽くないんだ」

「ああ、分かてるよ。姉御と一緒に仲良く養生するさ。あ、同じ病室って出来る？」

「同じ病室？」

場違いな佐久間の提案に思わず目を丸くする。

「——ふ、分かった。頼んでみるよ」

軽く微笑みながらそう言うと、佐久間は嬉しそうに笑った。だがやはり鋭の死に対するショックが大きいのか、その表情は重い。

截と翠の手で、先ほど着陸したヘリに乗せられる佐久間と愛を眺めながら、安形も鋭の死を悲しんだ。『人』の死は何度体験しても慣れるものではないなと思いながら。

「陽介さん、この二人を付近の黒服が所持している病院へ急いで運んで下さい」

截は二人をそつと椅子に横たえたと、運転席に座っている中年の男に呼びかけた。顎鬚を生やした短髪のその男は軽い感じで振り向く。

「何だ、さっちゃん。無理やり俺にヘリの運転をさせたら、

今度はパシリか？ 人使い荒いぜ」

「馬鹿なこと言っていないで早く離陸して下さい。翠も付きますからパシリではないですよ」

「はあ、何で私が！？ あんたが乗れよ！」

「え？ 翠ちゃんがおじさんと一緒に居たいって？ しょうがねえな、可愛い翠ちゃんのためだ。病院まで一走り行ってやる！」

「おい、嫌だぞ！ こいつと二人きりになるのは——あんたも乗れって！」

「寝かせているんだからこれ以上乗ることは出来ないだろ。それにこの人たちがいるから二人きりじゃない」

「ちよつ、そんな屁理屈——」

「よつしゃ、じゃあ飛ぶぜ！ さつちゃん、危ねえから離れてな」

まだ何かを叫びかけた翠の言葉を切り、陽介はヘリの操縦桿を倒した。次第に機体が浮上していく。

「おまつ、この野郎、後でどうなるか覚えてるよ截！」

いくら吼えようとプロペラの音で截の耳には届かない。ヘリは直ぐに屋上から離れていった。

「截」

安形がその背後から声をかける。截は振り返ると同時に安形の顔を見つめた。

「助かった。お前が来なかったらあの二人は……」

「気にしないで下さい。僕はただキツネに受けた一発を返したかっただけです。安形さんが礼を言うことじゃない」

「いや……それでも俺が助かったことは事実だ。ありがとう」

安形は真剣な顔で截の肩に手を置いた。

「相変わらず安形さんは真面目ですね。キツネの馬鹿にも見習って欲しいくらいだ」

「はは、あいつは不真面目というよりはただの唯我独尊だろ」

笑い合う二人。

その笑いを中断させるようにいきなり屋上の扉が開いた。

ずらりと黒スーツを着た人間たちが、きびきびした足取りで入ってくる。

「……白居か」

いつの間にか一人鋭の横に立っていたキツネはその様子を見て無感情に呟いた。

オールバックに漆黒のスーツ。吸血鬼のような顔をした中年の男、白居学がゆっくりと屋上に足を踏み入れた。倒れていた本田と曽根はその瞬間、己の傷のことなど忘れたように一瞬で立ち上がり、びしっと姿勢を正す。

——あれが、白居か……——！

初めてみる自分の組織のボスに截は鋭い視線を飛ばした。

「諸君、ご苦労だった。これで今回の騒動は終了だ。各自支部にもどり体を休める。報酬は追って振り込む」

——今飛び出せばあいつを殺すことが出来る。俺たちの運命を狂わせた組織の首を、取ることが出来る。

じとりと張り付く汗を額に浮かべながら截は拳を握り締めた。

「何やら契約した要員以外の人間もいるようだが、まあいい。結果が全てだ。お前たちにも同量の額を払おう」

静かに右腕を動かし、腰にしまった白柄ナイフに当てがう。

——あいつに直接会える機会なんて滅多に無いんだ。今を逃せば、もう会えないかもしれない。

「截、下手なことは考えるな」

気配を察したのか、安形がその腕を後ろから掴んだ。

「安形さん……！」

截は小声で反論しようとする。

「ここで白居を殺しても黒服自体の消滅には繋がらない。また新しいリーダーが生まれるだけだ。下手したらキツネとかな」

「……それは嫌だな」

「前にも言ったが機会を待て。必ず全てを終わらせるチャンスはある。それまでに命を無駄使いするな」

安形も内心では截と同じ気持ちだ。今にも白居の顔面を殴り飛ばしたくて仕方が無い。きつと昨日までの安形だったのなら実際にそうしていただろう。

鋭の存在が、鋭の行動とその結果が安形の足を食い止めた。ここで白居に挑むことには何の意味のない。何かを成し遂げるためには己の感情を心の奥底に潜める必要がある。

「そんなことを言うためにわざわざここまで上がって来たんですか？」

二人のやり取りを見通し、暴拳を食い止めるようにキツネは白居に近付いた。これで白居に一撃を打ち込むためにはキツネをどうにかしないといけなくなった。流石の截も、諦めざる終えない。

「なに、あの鋭を倒した奴らの顔を直に見ておきたくてな。それにお前に傷を負わせる相手というものも珍しい」

「クスクス、この腕の傷はちょっと油断してただけですよ。実力で負けたわけじゃない」

「そうか？ ふ、まあそういうことにしておいてやろう」

キツネの言葉を言い訳だとしても捉えたのか、楽しそうに笑うと白居は体を反転させた。

「今後この町の対処について話がある。キツネ、付いて来い」

背を向けたままそういうと、指で部下たちに何かの指示を送った。黒スーツを着た男たちはその途端鋭の方へ歩き出し、色々と調査を始める。

「鋭は取りあえず支部のどこかへ運べ。もう役には立たないだろうが、ここに残してイミューニティーにサンプルを提供するわけにはいかないからな」

そのまま扉を開け、階段を降りていく。まるで地獄に帰る悪魔のように、悠然とした足取りで。キツネは一瞬だけ截と安形に視線を送ると、その後を追った。

闇の世界へ消える二人の姿を、截と安形は決して目から離さず眺め続けた。

それぞれが、それぞれの思いを抱きながら。
いつか、必ず彼らを倒し、この地獄を終わらせるために。
隠し、研ぎに研いだ爪を振り下ろすために。
じっとその獲物の姿を目に焼き付けた。

狭い階段に二人の足音が木霊する。

一段一段その音を味わうように降りながら、白居は渋い声でキツネに声をかけた。

「心配するな。鋭の暴走は予想外だったが、計画には何の影響もない。ただ僅かな遅れを引き起こしたただけだ」

「……どういうことですか？」

「お前にはまだ言ってなかったが、この計画のデータも、実験設備も、資料も、全て予備の場所に複製を取ってある。本来ならば『先方』へのプレゼントのつもりだったが、今回の事件の所為であちらを使用せざるおえなくなった。遅れると言ったのはその許可を取るための契約や、やり取りが複雑だからだ」

「『あちら』の方はそれを了承しているんですか？　もしかしたら、全ての資料をこちらに渡さず、計画を自分のものにする危険もあります」

「ふふ、それは無いさ。お前も知つての通り、この計画は『あちら』とこちらの協力があってこそ成功するものだ。黒服の力無くして実

行することは不可能に近い」

「ですが、『あちら』の力は強大です。本気になれば……」

「確かに組織自体の影響力は大きい。だが、『六角行成』一人の力ではどうすることも出来まい。イミユニティー内には奴のことを疎んじている人間も多数存在する。先月の水憐島事件の効果もあるしな。だから奴は私たちを必要とせざるおえないのだ」

「なるほど、全て読んだ上での行動でしたか。鋭の暴走に僕だけを呼び、草壁を呼ばなかったのもそれが理由なんですね」

「ふ、何を言っている。私はお前を高く評価している。彼女を呼ばなかったのは単に必要が無いと思ったからだ。事実鋭は肅清された」
「あなたが僕をそこまで評価しているとは意外でしたよ、『先生』」

「お前の訓練をしていた時代から何度も言っているだろ。私はお前に期待している。誰よりもな。お前の方こそ、下手な謙遜はよせ。らしくないぞ」

「クスクス、すいません。自分を隠すのが癖になってしまったようです。でもこれは先生に教えられた通りの行動なんですがね」

「そうだったな。だが、私の前では小細工はやめろ。お前の信用にもかかわる」

「分かりました」

しれつとした調子でキツネは答えた。その様子に白意は何かを言いかけたが、口を開いたところで、それを言葉にすることは止めた。
「……まあいい。行くぞ。仕事はまだまだ残っている。遅れることにはなったが、計画の完成に近いことには変わらない」

にやりと口元を歪め、クスクスと笑う。

その後ろでキツネが鋭い視線を飛ばしていることなど気がつきもせず、彼は次の一步を踏み出した。進むべき場所を目指して。その場所がどんな場所なのか知りもせずに。

己の望みのままに、足を動かした。

キツネと白居が出て行った直後。しばらくその入り口を見つめていた二人だったが、何かを思い出したように安形は背後の鋭を振り返った。

「どうしたんです？」

「いや、何でもなし。ただ……まだ鋭が生きているような気がしたんだ」

「……そうですか」

同情するように、截は安形を見た。

「ああ、つたく、結局あいつの依頼をこなせなかったぜ。これで俺の首はとんだかな？」

暗くなった雰囲気から逃れるように、安形はワザと明るい声を出す。

「白居は全員に報酬を出すって言ってたし、大丈夫だと思いますよ。キツネも安形さんを見直すような言葉を呟いてましたしね」

「あのキツネが？　それが本当なら嬉しいが」

少し前まで殆ど音が無かった夢遊町が、何時の間にか雑音だらけになっている。截はすぐにその原因を理解した。

「……感染が解けて町の人たちが意識を取り戻したみたいだ。これからイミユニティーや警察も来るでしょう。騒がしくなる前に、さつさとこんな町、離れませんか？」

「そうだな。俺もいい加減疲れたよ」

ゆつくりと安形は空を見上げた。

「酒を注がなきゃいけない相手もいるしな」

「確か、ここへ来る時に使用したヘリが町のはずれにあるんでした

よね。鋭の回収へりを待ってもいいけど、そっちを使った方が早いでしょう」

「そつえばあのパイロットのこと完全に忘れていたな。生きているといいが」

自分をここまで運んできたパイロットのことを思い、僅かに安形は苦笑いした。

「さあ、帰りましょう。俺たちの住処に」

截が道を譲るように手を屋上の入り口の方へ伸ばす。

「ああ、帰ろう。俺たちの、偽りの家へ」

その誘いに答えながら、安形は歩き出した。
来るべき日へ向けて。

黒服を、キツネを、白居を、全ての悪腫を取り除ける日を目指して。

確固たる目的の下に、足を踏み出した。

<第十七章>エピソード

<第十七章>エピソード

夢遊町暴動事件から数週間後。黒服第一支部の船内。

その廊下を一人の男が歩いてた。

緩やかな黒い癖毛の髪をセミショートまで伸ばした西洋風の髪型。そして端が鋭く釣りあがった見る者を不安にさせる怪しい目。

全身を真っ黒な特徴ある服に覆われたその男は、廊下の終わりに辿り着くと、静かに扉を開け、船の甲板へと出た。

するとすぐに強風が全身を撫で、海へ突き落とそうと暴れる。

「……風が強いな」

思わず目を細めつつも、男は構わず歩みを再開した。何の迷いもなく、船の先頭へと進んでいく。

積んであるコンテナを避けながら舳先まで辿り着くと、そこには男を待っている人間が居た。

顎鬚を生やした、短髪の中年男だ。

「遅かったな」

タバコを口に挟み、船の淵に片足を立てながら、その中年男はこちらに声をかけた。

「クスクス、陽介さんが早すぎるんですよ。僕は時間通りに来ただけです」

「デートは早めに来るって相場は決まってるだろ。そんな態度じゃモテねえぞ、キツネ」

「別にモテなくてもいいですよ。そんなことより、さっそく本題に入りましょう。あまりここであなたと話をしている姿をみられるような危険は犯したくない」

「なに、いくら白居だろうと、草壁だろうと四六時中お前を見張っ

てたりなんかしゃないさ。なんせお前モテないことになってるし」
軽く笑みを浮かべながら陽介は煙を吐き出した。その煙は輪となり、キツネの顔の横を飛んでいく。

「さて、冗談はさておき、本題に入ろうか」

全ての煙を吐き切ると、陽介はタバコを自分の携帯灰皿にぐりぐりと突っ込み、打って変って真剣な顔になった。灰皿には限界以上のタバコが収納されていたらしく、押し込まれた直後に別のタバコがロケットのように飛び出し、陽介の顎に直撃する。

しかし構わず陽介はクソ真面目な顔を続け、じっとキツネの目を見つめた。気づかないフリをしているのだろうか。

「夢遊町事件でのセリフで確信しました。どうやら白居は僕の行動を怪しみだしているみたいです。これまでのあの人だったら、イミユニティーへの研究物品の寄贈を僕に隠すようなことはなかった。あれは明らかに僕を警戒している」

「ふん……俺からすれば今更って感じだけだな。お前が勝手な行動に出るのは昔からだろ」

「今回は今までとはわけが違います。どうやら僕は少々動き過ぎたようだ。今回の鋭への協力や安形への依頼メールにしろ、水憐島事件での草壁との問題にしろ、もう少し慎重にやるべきだった」

「そこまで怪しまれているのか？ 監視されるようになったのも、お前から聞いただけで俺は実際にその監視員を見たことはねえぞ」

「監視員がいるわけじゃありませんよ。白居だったら僕がそれにすぐに気がつくことくらい分かってる。監視というのは白居と草壁自身の僕に対する意識が変わったということです。忠実な部下と同僚から『怪しい存在』へとね」

「そうか、どうやら本当に深刻な状況になってるようだな」

陽介は顎に指を当て、何かを考えるように顔を伏せた。その様子を見たキツネはクスクス笑うと、続けて言葉を発する。

「ですが悪いことだけではありません。警戒されていると言っても、

疑いを持たれた程度ですし、おかげで白居の目に安形や截の存在を知らしめることが出来ました。鋭と、僕を抑えることの出来る黒服メンバーとしてね。まあ、安形さんが今回の事件に関わったのは完全に予想外でした」

「予想外か。確かに截に送った筈のメールを安形が受けていたときは俺も驚いたわ。『何でお前が受けてんの！？』って感じでさ。まあ、結果としてはプラスに働いたみたいだな」

「ええ、きつとあれが安形ではなく截だったのなら、あそこまで見事な終わり方はしなかったはずです。截だったら確実にもっと早いうちに鋭を殺していた。あれは安形さんだったからこそその見事な結末ですよ」

「ふ、優しい安形さんか、皮肉なもんだな。それで、俺に頼みたいって話は一体なんだ？　そのために呼んだんだろ？」

二本目のタバコを口に挟み、陽介は尋ねた。キツネはライターでそれに火をつけてやりながら、陽介の耳元に顔を寄せる。

「近いうちに、東郷大儀が——デイエス・イレが本格的にイミューニティーを攻めます。恐らく総攻撃になるでしょう。その期日が分かったら、僕から得た情報ということは内密に截に流して欲しいんです」

「截に？　なぜだ？」

「彼は今回のことで白居に存在を知られた。彼が動けばその分白居の注意もいくらか引きつけられるでしょう。それに、白居が本気で彼のことを調べれば、彼の裁との関係もすぐに分かる。必ず食いつくはずですよ」

「そういえば、截を自分の身代わり、デコイとして動かすことが、お前があいつを黒服に引き込んだ最大の理由だったな。奴と仲のいい俺からすれば、死に追いやるような真似はしたくないんだが」

「黒服武器開発主任ともあろう方が一個人に同情ですか？　それとも彼が……」

「そんなことは関係ないさ。ただ、知り合いが死んでいくのは例え

どんな奴だろうといい気持ちにはならない」

「……クスクス、どうやらお人よしは安形さんだけではなかったみたいですね」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味ですよ。まあ、軽く聞き流して下さい。僕はもう行きます。次の任務があるので」

「相変わらず馬車馬のごとくこき使われているな。少しは齒向かってみたらどうだ？」

「そんなことをせずともすぐに暇になりますよ。そう、本当にすぐにね。——それでは、陽介さん。また会いましょう。截のことをよろしくお願い致します」

冷たい笑みを浮かべると、キツネは陽介の目を見ることなくその場から遠ざかっていった。

狂気を含んだ空気を纏いながら。

「……キツネ、お前の考えは間違っちゃねえが、その笑い方は白居そのものだぜ」

陽介が呟いたその言葉は強風に流れ、キツネには聞こえなかった。まるでキツネ自身がその声を拒絶しているかのように。

見えない壁に阻まれているかのように。

決してその耳に届くことは無かった。

＜第十七章＞エピソード（後書き）

ご読了ありがとうございました。

E1の方もよろしくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7264g/>

尋獄E2 (BLOODY STORAGE)

2010年10月8日12時55分発行